



霞み桜

～涙月、はらり冬の花～

東めぐみ

運命の岐路（わかれみち）

一現か夢か定かにはあらねど、彼（か）の桜、桜下で微睡みて見る夢は

すべて真となるといふ。即ち、其の者の願いを叶えるものなり。彼の桜をいつの世からか名付けて

霞み桜といふ。一



運命の岐路(わかれみち)

その日、久々に一味に頭目からの招集がかかった。さして広くはない荒れ寺の堂内は十数人はいる仲間たちが一同に会せば、それだけではや身じろぎするのも難しくなる。

その場に満ちた静寂にはどこか高揚感さえ孕んでいる。期待に満ちた一同の眼を一人一人、しっかりと見つめ返ししながら、小柄な男が朗々と響き渡る声で沈黙を破った。

「皆、久方ぶりだったな」

対して、皆は頷くばかりで、余計な声を発する者は一人としていない。

「前(さき)のお勤めから数えて丸々二年という月日が経った。そろそろ次の仕事に掛かる潮時ではなかろうかと思い、今日は皆にこうして集まって貰ったというわけだ」

男は年の頃は五十ほど、見るからに痩せて身の丈も低く、身体つきだけすれば、けして威圧感などない。だが、その鋭い光を放つ双眸や隙のない身のこなし、聞く者に有無を言わさぬような低い声、すべてが支配者だけが持つ雰囲気兼ね備えている。

「お頭」

「お頭」

一味の中から感に堪えたような声が洩れた。

「あっしはこの二年という日々がもどかしくてなりませんでしたぜ。たかだか奉行所の詮議が厳しくなったからといって、泣く子も黙る `般若の喜助、一味が借りてきた猫のようになりを潜めちまったんじゃア、お頭の名が廃るっていうもんだ」

声を発したのは、最前列にいた初老の男だった。 `お頭、と呼ばれた小柄な男とほぼ同年配に見える。その男に `お頭、が鋭い一瞥をくれた。

「そういうわけにはゆかねえ」

視線だけで射殺せそうな眼を向けられ、男が息を呑んだ。 `お頭、はその男からさっと眼を背け、また一同を見渡す。

「俺は手下の者二十一人の生命を預かってる身だ。狩られると判りきっている危ねえ勝負にうかうかと出られるはずがねえ」

もっともなひと言に、男も押し黙り軽く頭を下げた。

「申し訳ねえ。どうも久々のお勤めだと聞いて、気が逸って口が滑っちゃったようで」

「お頭、がフツと笑み、その細い眼を和ませた。

「いや、徳市の言葉は一味の大方の者が考えてきたことには違えねえ。だからこそ、俺もここいらで奉行所に「般若、の一味はいまだに健在だってことを示してやりたいと思ったのよ」

「やりやしょう、お頭」

後方から比較的若い声が上がり、それに呼応するかのように「お頭、が頷く。先ほどの徳市が腕組みをして問いかけた。

「で、お頭。二年ぶりにお頭が眼を付けた先はどこですかい？」

「お頭、がすぐ脇に控える若い男に目顔で合図した。

「般若の喜助、一味はかれこれもう二十年余り前から江戸ばかりか、その周辺から果ては上方まで名を知られた大盗賊の一味である。押し込みに入れば女は犯し放題、一家は主人から果ては奉公人まで皆殺しという悪質非道な盗っ人一味が多い中、喜助一味はまだマシな方だといえた。

盗みに入るときは頭領の喜助は人相を知られないように般若面を被っているため、いつしか、この名で呼ばれるようになった。

一応、一味の掟としては「殺さず犯さず、を建前にしてはいるものの、実際に盗みに入れば綺麗事だけでは済まない場合も少なくはなかった。押し込みに入った時点ですべての者に目隠し猿轡をするが、顔を見られてしまった者はやむなく口封じのために殺すこともあった。

決起に逸った若い連中が眉目の良いお店(たな)のお嬢さまを数人がかりで手籠めにしたこともある。頭の喜助がその顛末を知ったのは事後、さんざん蹂躪された娘が舌をかみ切って果てた後のことだった。もちろん、数人の若い者たちはそれ相応の「仕置き、を受けることにはなったが一。

どれだけ気を付けていても、そういったことが数度に一度はある。盗賊稼業といえども、二十人もの大所帯を率いてゆくのはそれなりに気を遣うことだった。

この喜助一味にはさしもの江戸町奉行所も手を焼いてきた。何しろ嚴重な包囲網を見事なまでの鮮やかさでかいくぐり、次々と押し込みを成功させてゆくのだ。しかも、江戸はむろん、府外にまで行動範囲は渡っている。

奉行所が躍起になればなるほど、喜助一味は嘲笑うかのような巧みさで出現し、眼を付けたお店(たな)からビタ銭一文残さず盗み出して、まんまと逃げた。その神出鬼没ぶりのために、罾を仕掛けることもできず、ただ喜助一味が次々と鮮やかな手並みで盗みを働いてゆくのをおめおめと見ているしかない。

喜助が標的に選んだのはすべて江戸でも名の知れた錚々たる大店ばかりだった。

ところが、数年前から、さしもの喜助一味にも強敵が現れた。北町奉行として新たに赴任した北山源五泰典という男がなかなかの傑物だったのである。北町奉行を数年務める前は勘定奉行も歴任したという源五はこの時、三十代の壮年で、英邁の聞こえの高い人物だった。しかも知略に富むばかりか、剛胆なものふとしても有名な男だ。

源五は南町と結託して用意周到な包囲網を江戸の随所にしいた。喜助一味同様、名を馳せた盗っ人一味が次々と源五にお縄にされ、獄門に送られた。その有様を重く見た喜助は二年前、今日のように手下一同を集め、

一しばらくお勤めは休む。各々、繋ぎがあるまでは身を潜めて暮らせ。

と命を下したのだ。

その時、ここにいた仲間には総勢二十六人。二年の間に病を得て亡くなった者、これまでの盗っ人稼業から足を洗い堅気に戻った者もいる。怖じ気づいたのか連絡も寄越さず蓄電した者もいた。

地方で暮らしているため江戸に出てくるのに時間がかかり、今日、間に合わない者は数に含めて占めて二十一人が二年ぶりに集まった。

喜助は一味を抜きたいと願い出た者にはそれなりの温情を示してやった。引き止めることもなければ、口封じのために殺すこともない。幾ばくかの餞別と共に一達者で暮らすんだぞ。もう二度と、盗っ人なんかになるんじゃない。

そのひと言で足抜けを許してやった。

今回、喜助が二年ぶりに招集をかけたのは、北山源五が病に伏したという報を得たからだ。病に取り憑かれた源五は早々に老中まで辞職願いを出しているというが、源五の奉行としての器を惜しんだ老中がいまだに辞職届を受け容れず、保留にしているそうだ。

確かに、源五は数々の名の知れた大盗っ人をお縄にしてきた。あれだけの男は敵ながらあっぱれ、なかなか出るものではない。老中が源五を慰留しているのも判らぬ話ではない。

が、所詮は盗賊と町奉行、敵同士だ。憎き源五が病とやらの中にと、喜助は二年ぶりについに沈黙を破り各地に散らばった手下どもに招集をかけたのであった。

「久々のお勤めだと思やア、血が沸き立ちまさあ。お頭、それで、お頭が見込んだお店はどこですかい？」

徳市が少し焦れた口調で再度訊ねるのに、喜助から目顔で促された若い男が静かに応えた。

「押し込み先は中町の呉服太物問屋美濃屋」

徳市がホウと溜息をついた。

「美濃屋か、そいつたはまた大物だな」

美濃屋といえば、かつては江戸城大奥出入りの御用商人を務めたこともある老舗にして大店である。その暮らしは下手な田舎大名などよりよほど豪勢だと専らの評判になるほどであった。

若い男の後を引き取るように、喜助が続けた。

「今回は結衣(ゆい)を引き込みとして美濃屋に入れる」

そのひと言に、あちこちからどよめきが洩れた。徳市がそれらの声を代弁するかのよう言う

。「だが、お頭。お結衣坊はこれが初めての仕事だぜ？ 美濃屋といえば相当の大店だ、初めての引き込みを入れて大丈夫なのかい？」

美濃屋ほどの大身ともなれば当然ながら奉行所も警戒しているのではと暗に告げたのだが、喜助は不敵な笑みを浮かべた。

「何の、結衣は儂の娘として物心つく前から盗っ人の仕事を見て育った娘だ。たとえ引き込みを務めるのは初めてでも、その点はぬかりなくやる。案ずるな、徳市」

「まあ、お頭がそう言いなさるなら」

徳市はそれでもまだ不満げな表情だ。そして、その頭領喜助の片腕たる徳市の言い分は手下たちの気持ちを反映しているようでもあった。残りの手下たちは年格好はまちまちだが、皆、あからさまに不満や落胆を浮かべている。

「まあ、皆の不安な気持ちも判るが、今回は結衣の初仕事をとくと見てやってくれ。何しろ儂が手塩にかけて仕込んだ娘だ」

喜助の宥めるような科白に、徳市が肩を竦めた。

「お頭、それにしてもよくお結衣坊に引き込みをさせる気になったな。これまでは、あの娘は一切盗賊稼業に拘わらせる気はないと言い切っていなさったじゃねえか」

その指摘に、喜助は言い訳めいたことはいわず、ただ静かに笑ってるだけだ。

「あれがどうしても、おとっつあんの役に立ちたいとせつつくものでな。あれを今回の引き込みにすると決めてからは、色々と引き込みのいろはをたたき込んでやったさ」

最後にそう言う喜助の顔は奉行所の役人も身構えるという凄腕の盗っ人というよりは、娘が可愛くてならない父親のものだ。徳市が頷いた。

「まあ、お結衣坊にはあっしからもそれとなく教えてやりませう。お勤めは引き込みが上手くやるかどうかで大方は決まってくる」

「ああ、それは心強い。よろしく頼むよ」

喜助のそのひと言で、二年ぶりの顔合わせは締めくくられた。

暑い。結衣はただ座っているだけでも、うなじを流れ落ちる汗に知らず眉をしかめた。

その時、気まぐれな風が庭をさっと吹き抜けた。初夏というには遅すぎる季節の生温（なまぬる）い風だ。風が軒につり下げた風鈴と釣りしのぶをかすかに揺らし、ついでに庭の紫陽花も揺らしてゆく。

風は母親が慈愛をこめて赤児をあやすかのようにゆったりと静かに紫陽花を撫でて通り過ぎた。

結衣は母親の顔を見たことがない。一というよりも、母親というものがどんなものなのかも知らない。結衣の父は喜助といい、表向きは江戸の町外れで小さな仏具屋「大仏や」を営んでいる。表向きというのは喜助の本業が仏具屋ではないからだ。

あろうことか、喜助は「般若の喜助」という二つ名を持つ盗っ人であり、その一味は公方さまのお膝元だけでなく関東周辺から上方までに名を馳せる盗っ人集団だ。

今は水無月下旬とて、初夏にはまだ殆ど色づいてさえいなかった紫陽花はほぼ真っ青に染め上がっている。

ここ数日、江戸は梅雨の最中の陰気な曇り空が続いている。周囲の景色すべてが鈍色に塗り込められたかのような中、海色に染まった紫陽花がやけに眩しく眼を射るようだ。

結衣は喜助の実の娘ではなかった。喜助自身は詳しいことは語りたがらなかったけれど、喜助の長年の友でもあり相談役でもある徳市がひそかに教えてくれたことだ。

もちろん、喜助の実子ではないというのは結衣も喜助から教えられて知っていた。ただ、自分の実親というものがどんな人であったか知りたいという願いは物心ついてから片時も離れず、徳市ならば知っているのではとしつこくせがんだ。

徳市は最初は頑として応えなかったが、結衣があまりにも拝み倒すものだから、一俺がお結衣坊に教えたと知ったら、お頭に殺されちまうぜ。

と、言いつつも内緒で教えてくれた。

結衣は過ぎる日、喜助が押し込みに入った先の商家の主人夫婦の娘であったという。徳市の話によれば、結衣は江戸の生まれではないということになる。生まれは大坂のそこそこ羽振りの良かった乾物問屋の娘だった。

そこの主人夫婦はまだ若く、そのときも昂ぶった若い衆が色白で美貌の内儀に乱暴を働いてしまった。良人である主人は女房が眼前で陵辱されるのを見かね抵抗するものだから、とうに殺されていた。

その側でまだ生後半年ほどの赤ん坊が泣き喚いていた。数人がかりで内儀を輪姦した後、彼ら

は赤児を殺そうとした。そこで喜助が事態に気づき駆けつけたが時は遅かった。

彼が駆けつけた時、若い衆の一人が今にもヒ首(あいくち)を赤児に向かって振り上げようとしているところで、その傍らにはさんざん弄ばれた末、殺された内儀が骸(むくろ)となって転がっていた。

一止めなっ。

喜助は鋭い声を投げ、ヒ首を持った若い手下の横面を張り倒した。

一何で、こんなに酷えことをした？

内儀を犯すだけならまだしも、殺すとは許し難い所業だった。喜助は無様に転がった手下を続け様に殴った。

一お前ら、何てことをしやがる。

続けて駆けつけた徳市が荒い息を吐きながら、怯える他の若い手下三人を次々に殴った。

一行け、貴様らのような屑を配下に置いておく気はねえ。どこに行くなり好きにしろ。

「お頭、お頭、と若い者たちは次々に哀れっぽい声を出したが、徳市が凄んだ。

一手前ら、生命を取られねえだけまだありがてえと思え。お頭の気が変わらねえ中にとっとと出ていくんだ。

その剣幕に、四人は這々の体で逃げていった。喜助はいまだ泣いている頑是無い赤児をそっと拾い上げた。尋常ならぬその場の空気を悟ったかのように、赤ん坊は顔を真っ赤にして泣いている。

一済まねえな、お前をててなし子、母なし子にしちまった。

喜助が赤ん坊の頭(つむり)を怖々とした手で撫でた。それが、結衣と喜助が父娘の縁(えにし)を結んだ馴れ初めであったという。

喜助はその時、女房を持っているわけでもなく、子を育てたこともなかった。そんな男が罪滅ぼしからか、不器用な手つきで赤児の襁褓(むつき)を替え、薄粥を食べさせ、赤児を育て始めた。いつしか赤児から両親を奪った罪滅ぼしから始まった繋がりには真実の親子にも勝るとも劣らないものになった。

結衣は今年、十六になった。押し込みに入った当時の若い衆が劣情を抑えられなかったほど美貌であった母親に似て、雪膚の肌理(きめ)が細かい匂い立つような美少女になった。喜助はこの一人娘を溺愛していると言って良い。

一結衣には盗っ人稼業には一切拘わらせねえ。

と、宣言し、現に言葉通り、愛娘には盗っ人仕事のことは殆ど語ったこともない。それでも、門前の小僧何とやらで、結衣は成長するにつれて自然に盗賊稼業がどんなものかを大方は知ることとなった。

結衣に喜助への恨みはなかった。徳市から自分が喜助に引き取られることになった経緯を聞いても、不思議と憎しみの心は湧かなかった。徳市の話では、喜助が結衣の両親殺しに直接関わっているわけではない。

むしろ、母親に続いて殺されそうになった自分を救ってくれたことに恩さえ感じていた。喜助がいなければ、自分は手籠めにされた母親の後を追っていたらう。結衣という名も他ならぬ喜助が付けてくれたものだし、結衣自身もたいそう気に入っている。

元々は生みの親がつけた別の名があったことは確かだけれど、その名を知りたいとも名乗りたいとも願ったことは一度もなかった。

今も昔も結衣の父はこの世にたった一人、喜助だけだ。紫陽花を見ながら、とりとめもない物想いに耽っていたときだった。

「ここにいたのか」

低い声にいざなわれるように、結衣は振り向いた。

「嘉助兄さん」

嘉助は徳市に続く一味での実力者だ。喜助一味には頭領はむろん喜助と決まっているが、副頭領というのは存在しない。決まっていはいないが、暗黙の中に、副頭領、格だと手下たちが認めている者が二人いる。一人が喜助の若い時分からの盟友であり、懐刀である徳市、今一人が七つのときに喜助に拾われた嘉助である。

嘉助は行き倒れていた旅の巡礼女の側で泣いていたところ、徳市が見つけて連れ帰ってきた。どうやら、その行き倒れていた女は嘉助の母親だったようである。嘉助は喜助にとっては間違いなく息子同然でもあるのだが、何故か、喜助は嘉助を養子とはしなかった。どれだけ可愛がっても、結衣のように娘だとは名乗らせず、あくまでも手下の一人として扱った。

喜助のその意図は直に判った。嘉助は拾ってきたときから聡い子どもで、喜助を歓ばせた。喜助はこの将来見込みのある子どもを娘に婿として娶せ一味を継がせようと目論んでいたのだ。

結衣は十三になった年、嘉助ともども喜助に呼ばれて、この話を聞かされた。

一お前は どう思う？

話の終わり、喜助に訊かれ、結衣は正直に首を振った。

一私はまだ判らない。嘉助兄ちゃんのこと、ずっと兄ちゃんだと思ってたし。

裏腹に嘉助は男にしてはやや白い頬を紅潮させ、喜助を真っすぐに見上げて頷いた。

一俺は願ってもねえ話だと思ってます。

もし結衣と一味を自分に託して貰えるなら、自分にできるだけのことはしたいとも述べた。

更に、

「結衣が俺のことをまだ兄としてしか見られねえというなら、俺は男として受け容れて貰えるようになるまで待ちます。」

とも、告げた。

「二人ともまだ若い。この話はお前らがもうちょっとこの話を具体的に考えられるようになった数年先まで置いておこう。」

喜助はあっさりと言い、二度とその話を蒸し返すことはなく日は過ぎた。

嘉助は約束を律儀に守り続けている。二人の関係は嘉助が十九、結衣が十六になった今も兄と妹のような状態から何ら変わらない。

そう、結衣にとって嘉助は「頼りになって優しい兄ちゃん」だった。嘉助が七つで家で暮らすようになってから、ずっと見守り続けてくれた兄だった。その認識は三年前に嘉助が独り立ちした今も変わらない。

現在、嘉助は近くの裏店で一人住まいしている。それは結衣との間に祝言の話が出た時、嘉助の方から「俺なりにけじめをつけたい」と申し出たことだ。

「お頭は何を考えてるんだ？」

嘉助は結衣の側に来て座り、胡座をかいた。二人の間の距離は微妙に空いている。そう、三年前、喜助が祝言の話を持ち出して以来、嘉助は結衣に対して一定の距離を保って接するようになった。

結衣はそれが淋しくてならない。結衣には嘉助はいつまでも頼もしい大好きな兄だったのに、嘉助は祝言話からこっち、結衣の眼をまともに見ることさえなくなった。大好きな兄が急に遠い存在になったようで、もどかしい。

以前はこうやって並ぶときは、すぐ隣に座っていたのに。

喜助が表向き営んでいる仏具屋「大仏や」は小体な店だ。表店ではあるけれど、構えも店内も狭く、人が数人も入れば一杯になるほど。狭い店内に喜助の几帳面な性格を示すかのように整然と様々な仏具が並んでいる。

見かけどおり家の中も狭く、どちらかといえば京の町家のように縦長い作りになっていて、庭はここ一つ、坪庭と呼ばれるような狭い庭があるきりだ。それでも喜助はここに四季の様々な草木花を植え、丹精してきた。

「それは、どういう意味？」

結衣は嘉助に物問いたげなまなざしを向ける。昨夜、二年ぶりに喜助一味の手下が町外れの荒れ寺に集まったことは徳市から聞いて知っている。そこはいつも一味が集まる場所として使っている塀(ねぐら)だった。

結衣の視線を受けた刹那、真面目一方の嘉助の頬にかすかに血が上ったのに結衣は気付かない。嘉助は狼狽えたように眼を伏せ、それから小さく首を振った。

「今度のお勤めはお前が引き込みの役を務めると聞いた」

結衣は頷いた。

「ええ、そのとおりよ。それがどうしたの？」

嘉助の声がやや高くなる。

「だが、お前。お頭はこれまで結衣には裏の稼業のことには一切拘わらせねえと言いなすっていたのに」

嘉助は建前上は、大仏やの使用人、手代ということになっている。徳市は番頭だ。手下の中で大黒やの奉公人となっているのはこの二人だけで、後はそれぞれ表向きの生業(なりわい)を持って普段はその仕事に従事している。

喜助がいかにも二人を信頼しているかが判るというものである。常々、喜助は結衣だけは堅気のまま生涯をまっとうさせたいと口癖のように言い続けてきた。嘉助にしてみれば、三年前、結衣と一味を託すと言われたのは即ち、結衣を女房とし「大仏や」の婿養子となることだと思い込んだのも無理はない。

むろん、その裏には「般若」の一味を率いる跡目となることも含まれていただろうが、それは女房となる結衣とは一切切り離して考えることだと一少なくともこれまでの喜助のふるまいからはそう判断すべきだった。

喜助は結衣を引き取ってからこれまで、一度たりとも「般若」と拘わせたことはおろか、盗みの話も極力避けてきたのだ。一人の父親として愛娘には堅気の生涯をまっとうさせたい、その心根は至極真っ当に思えた。

いかに名を馳せようと、盗っ人は所詮盗っ人、ひとたびお縄になれば獄門は免れない。喜助が掌中の玉と愛でる結衣にそんな酷い道を歩ませるはずはなかった。

一味の誰もが一徳市でさえ一結衣は生涯、喜助の裏の稼業とは一切関わりなく過ごしてゆくものだと思込んでいた矢先の出来事だった。

結衣はゆるりと振り向いた。

「兄さんは私が美濃屋へ引き込みに入ることを言っているのね」

嘉助はかすかに頷いた。

「当たり前じゃないか。これまで一度も引き込みなんぞしたことのないお前がよりによって美濃屋ほどの大身代に入るだなんて、俺には無茶だとしか思えない」

結衣は嘉助を真正面から見た。

「兄さんは私が何もできない素人娘だと思っている？」

嘉助が眉根を寄せた。ほどほどに整った容姿の彼は物静かな質ではあるが、なかなかからに若い娘にはモテる。

「当たり前だろう。結衣は事実、そのとおり、お頭のお勤めとは無縁に過ごしてきた。いや、俺はそれで良かったとむしろ思っているんだぜ、流石はお頭だ、先々のことまでちゃんと考えてなさると俺は安心してたんだがよ」

「私がおとつぁんに頼んだのよ」

結衣の言葉に、嘉助が一瞬、息を呑んだ。

「昨夜、お頭もそんなことを言いなすっていたが、あれは真実だったのかい？」

「当たり前でしょ。おとつぁんが嘘を言うはずがないわ」

嘉助は額に手をやり唸った。

「そういう問題ではないよ。しかし、何でお頭が結衣の我が儘をあっさり許したのかも皆目合点がゆかねえな」

そこで、結衣の声もまなざしも尖る。

「失礼ね。私が単なる我が儘で引き込みになりたいだなんて言い出すと思ってるのね、兄さんは。私を見くびらないでちょうだい。これでも般若の喜助の娘よ」

嘉助が苦笑した。

「いや、それは俺が言い過ぎた。でもよ、結衣。考えてもみな。お前は確かにお頭の娘には違えねえが、生まれてこの方十六年もの間、盗っ人稼業とは一切無縁で育ってきた。それがお頭の願いでもあったはずだ。つまり、お前は盗みに関してはまったくの素人ということだ、そんなお前がいきなり美濃屋を相手にするほどの大仕事に加わるなんざ、正気の沙汰とも思えねえ」

「つまり、私が引き込み役では役不足ということなのね？」

嘉助が小さい息を吐き出した。

「ここまで来ては話をうやむやにしても仕方がない。まあ、有り体に言えば、そうともいえるな。結衣、良いか、よく聞け。お勤めというのは生きるか死ぬか、武士でいえば合戦と同じだ。いわば奉行所と俺らの知恵比べなのさ。戦いと言ったからには、負ければ生命が無くなる。特に引き込みの仕事は重要だ。ここで失敗して万が一にも美濃屋から役人に知らせがいけば、俺たち全員が獄門台送りだ。お前の行動一つに一味の存続どころか生命が掛かっていることをお前は理解してるんだらうな？」

結衣が笑った。

「当たり前よ、それくらいのことを私が判ってないとでもいうの？ 兄さん、私は今まで、おとっつあんがもどかしくてならなかったの。私は般若の喜助の娘だし、娘であるからには、お勤めにも参加させて欲しいと何度も頼んだわ。でも、その度に、おとっつあんは駄目だの一点張り。だけど、とうとう、おとっつあんが許してくれたの。大丈夫よ、大切な仲間をけして危険な目に遭わせたりはしない。私に任せて、兄さん」

嘉助がうつむいた。膝の上で握りしめた両の拳が震えて白くなっている。

しばらく沈黙が二人の間を漂った。

「俺はお前に危ねえことはさせたくない」

嘉助が振り絞るように言った。しばらくしてガバと面を上げた嘉助の眼が揺れていた。

「俺はお前が般若の娘であろうが、そんなことはどうでも良い。俺は、俺は、お前が好きだ。惚れた娘が盗っ人稼業に足を踏み入れるのを指をくわえて見てるなんて、できねえよ」

結衣は茫然として嘉助を見つめた。

「兄さんー」

嘉助がどこか投げやりに言った。

「気付いてなかったのか？ 俺はずっとお前のことしか見てなかったさ。それも妹じゃない、女として見てた。お前は生憎と俺を兄としか見ちゃくれなかったようだがな」

結衣は嘉助を複雑な想いで見た。

「その話は今はまだー」

心が決まらないと言おうとした矢先、嘉助がフツと笑った。どこか淋しげな笑いが結衣の胸をついた。

「良いんだ。俺はこのとおり、朴念仁で女を口説く文句一つ知らねえ。だが、お頭に言ったことだけは本当だぜ。お前がその気になるまで、頭が真っ白の爺さんになっても待つ。だから、これは祝言だとか夫婦(めおと)になるだとかは別にしての話だと考えてくれ。その上で、俺はお前が引き込みになるのは反対だ」

嘉助が呻くように言った。

「お前を引き込みにするなんて、お頭は気が狂っちゃったとしか思えねえ」

ふいに声高な声が響き渡った。

「止めて」

嘉助が茫然として結衣を見やる。

「おとつあんを悪く言わないで」

「結衣ー」

結衣はうつむいた。

「ごめんなさい、大きな声を出しちゃって。でも、兄さん。私にとって、おとつあんは何より大切な人なの。ずっとずっと育ててくれた恩返しがしたいと思ってた。兄さんだって、それは同じでしょう？ 私たち二人、本当の両親はいないけれど、おとつあんがいたからこそ、ここまで来られた。今、やっとその願いが叶うときが来たの。だから、お願い、一度だけ、私のその願いを叶えさせて」

「本当だな？ 引き込みになると、お勤めに拘わるのはこれが最初で最後だと約束してくれるか？」

結衣が頷いた。嘉助がホウと肩の力を抜く。

「判った。結衣がそこまで言うなら、今回に限り、俺も精一杯お前に協力するよ。これから色々と引き込みに必要な手練手管を教えてやる」

結衣の瞳が嬉しげに輝いた。

「ありがと、兄さん」

しかし、頷いた嘉助の顔色は依然として冴えなかった。

風もないのに、庭の紫陽花がまたかすかに揺れた。江戸の町の上にひろがる空は今日もまた陰鬱に曇っている。

その夜、町外れでひっそりと商いを営む仏具屋大仏やから、按摩が出ていった。杖をつきつつ、帰路を辿る按摩に結衣は背後から声をかけた。

「お気を付けなすって」

四十ほどの按摩は見えない眼で振り返って頷き、ゆっくりと遠ざかった。按摩の後ろ姿が角を曲がるのを見届けてから、結衣は表の掛け行灯の火を落とし、暖簾を閉まった。

戸締まりをして店から続く短い階段を上った先には二部屋ある。一つは喜助、廊下を挟んで向かいが結衣の居室だ。結衣はその一つの障子を開けた。

「おとつあん、腰の具合はどう？」

夜具に腹ばいになった喜助がゆっくりと身体を動かし、床の上に座った。

「いやはや、齢(よわい)五十に手が届く前に、腰痛(こしいた)とはなあ。年は取りたくないものだし」

喜助が腰の痛みを訴え動けなくなったのは、今日の夕飯時のことだ。二人で夕飯を食べている最中、座り直そうとした際に腰を変な具合に捻ったらしい。急に激痛を訴えて、その場に這いつくばったままになった。

既に通いの徳市や嘉助も帰った後で、結衣は苦勞して喜助に肩を貸して二階まで連れていった有様だった。喜助が小柄で痩せているとはいえ、それでも娘の結衣よりは身体も大きいのは当たり前なのである。

寝間まで運ぶのもひと苦勞で、汗だくになって連れてゆき、床を延べて寝かせる一方で、急ぎ懇意の町医者を呼びにいったが、生憎と急患の往診に出て留守だった。そのため、急遽、按摩に来て貰い、鍼を打って貰ったのだ。

その鍼治療が効いたようで、少し動いただけで痛みを訴えていた喜助は今はゆっくりとではあるが難なく身体を動かせるようになっている。

「ふふっ、もう歳なんだから、少しは自重してよね、おとっつあん」

笑いを含んだ声音で言うのに、喜助も笑い声を上げる。

「言ったな、口ばかり達者になりおって。そんなんじゃア、嘉助に嫌われちゃうぞ」

大きな声を出したのが響いたのか、喜助が「うっ」と呻いた。

「いけねえ、まだ痛むな」

「当たり前でしょ、幾ら腕の良い按摩でも、神業のように急に痛みが消えるなんてことはないわよ」

喜助が苦笑いする。

「下手に身体を動かしたら痛むもんだから、しゃちほこばってみたいだな。肩まで凝っちゃったよ」

「じゃあ、もう一度横になって」

「何だ何だ？ 肩でも揉んでくれるってえのか」

喜助がもう一度腹ばいになるのを待ち、結衣はその側に座った。横から喜助の肩に手を乗せ、ゆっくりと揉みほぐしてゆく。

「ああ、気持ち良いな」

いつしか喜助は恍惚(うつと)りと眼を閉じている。結衣は父の肩を揉みながら、それとはなしに言った。

「おとっつあん、先ほどの話だけれど」

短い沈黙の後、喜助が唐突に言った。

「嘉助のことか」

「うん」

幼い時分に戻ったような甘えた口調で言う娘に、喜助は優しく言った。

「お前は嘉助を嫌いか？」

結衣は即座に首を振る。

「それはないよ。嘉助兄さんは大好き」

小さな溜息の後、喜助が言う。

「嘉助はお前にとっては、いつまでも兄さんってことかい？」

長い沈黙があった。結衣は父にだけは本当の気持ちを告げたいと思った。

「一多分」

更に永遠とも思える沈黙が続いた。今度は大きな溜息と共に喜助の短い応(いら)えがあった。

「そうか」

ややあって、喜助が溜息混じりに続ける。

「だがなあ、結衣よう。おとっつあんもこのザマだ。そろそろ歳だし、いつ何があるか判らねえ」

「それは、どういうこと？」

結衣がやや気色ばんだ声色で問う。

「お勤めの最中に、何かあるってこと？」

喜助が盗賊だと知るだけに、結衣はつい父の言葉の裏を勘ぐってしまう。喜助が笑った。

「別に深い意味はねえ。ただ、単に俺も歳だからってことさ」

「おとっつあんはまだ五十じゃない」

「五十は立派な年寄りさ。あの信長公だって、本能寺は五十のときだったんだぞ」

喜助が酔うと必ず出るのが

一人生五十年、下天の中を比ぶれば、夢まぼろしのごとくなり。ひとたび生を受け滅せぬものがあるべきか。

戦国の覇者信長が逆臣明智光秀に討たれて本能寺で取れない最期を遂げたときに焰の中で舞いながら謳ったというひとくだりである。

いつもなら笑って眺めているのに、今夜ばかりは違った。

「止めてよ、そんな縁起でもない。今は天下泰平で戦国乱世でもないのに。何が本能寺よ」

尖った声で止めるのに、喜助はどこか悟ったような顔で言う。

「結衣、俺たちが生きているのは乱世と同じ、考え様によっては、それより修羅場かもしれねえ。奉行所や役人はそれこそ盗っ人をお縄にしようと血眼になってるんだからな」

結衣は溜息をついた。

「そういえば、嘉助兄さんも昼間、似たようなことを言ってたわ」

一お勤めというのは生きるか死ぬか、武士でいえば合戦と同じだ。いわば奉行所と俺らの知恵比べなのさ。戦いと言ったからには、負ければ生命が無くなる。

嘉助の言葉をそっくりそのまま伝えたと、喜助は笑いながら頷いた。

「あいつもなかなかいっばしのことを言うようになったもんだな。これなら、安心して後を任せられる」

ひとしきり低い声で笑った後、喜助が真顔になった。

「なあ、結衣。嘉助は信用できる男だ。何より、あいつには実がある。世の中には口ばかり上手いが、信用できない手合いはごまんという中で、今時、ああいう男は珍しい。あいつなら、おとつあんに何かあった時、お前を守ってくれるだろう。夫婦(めおと)というのは何も初めから惚れて惚れられて一緒になるばかりとは限らねえ。祝言を挙げて長い年月を連れ添う中に自然と湧いてくる情というものもあるんだぜ」

その何気ない科白に、結衣は閃くものがあった。

「ねえ、おとつあん、一つ訊いても良い？」

「何だ？」

「おとつあんは昔、結婚したことがあるの？」

「何でえ何でえ、いきなりなことを訊くんだな」

どこか照れたような口調に、結衣は弾んだ声で言う。

「さっきの物言いが何か昔、奥さんがいたことがあるような感じだったから」

「そりゃア、俺だって男だからよ。女房の一人くらいはいたこともあるさ」

「そうなの？」

「結衣、済まねえが、煙管を取ってくんな」

結衣がたばこ盆を階下から取ってくると、喜助は腹ばいのまま上手そうに煙管をふかしだす。

「そうさな、お前も年頃だし、そういう話も良いだろう。俺は二十歳の頃は上方にいたんだよ。まだこんな稼業に入る前のことさ。そこで日傭取りをしていた頃に惚れた女と所帯を持った。続いたのは三年くれえかな」

喜助が遠い眼で訥々と語る。結衣は少しからかうように訊ねた。

「愛想を尽かされちゃったの？」

「いや、死んだ」

え、と、結衣の笑みが固まった。

「ごめんなさい、私ったら、何ていうことを」

「いや、良いんだ」

喜助は首を振り、思案げな顔で続けた。

「所帯を持って二年目に身籠もってなあ。翌年に子どもが生まれたが、たいそうな難産で、子どももろとも女もおっ死んじまった。子どもは女の子だった。二十歳のときの子だから、生きてればもう三十近くなってる。俺もとっくに爺イになってただろう」

だから、と、彼は言葉を継いだ。

「十年余り後、お前を引き取ったときは、これも神仏の導きだと思ったさ。お前が女の子だったというのも不思議な縁だと思ってなあ。結衣という名は実のところ、死んだ子につけるはずの名前だったんだ。こんなことを言えば、お前は気を悪くするかもしれねえが」

「ううん、そんなことないよ、おとつあん。私は今まで、おとつあんに育てて貰って、おと

つつあんの娘にして貰って幸せだったもの」

いや、と、喜助は首を振った。

「俺は結局、お前からふた親を奪った。せめてもの罪滅ぼしにとお前を引き取って娘として育てたが、逆にお前の存在に励まされたのは俺の方だった。お勤めの最中、もうこれで終わりだとお縄になりそうになったときも、お前の笑い顔が瞼に浮かんだら、いや、俺はこのまま死ぬわけにはかいねえ、お前を残して死ねねえと思えて、そうやって死地を幾たびもかいくぐってこられたんだ」

今、初めて耳にする父の心に、結衣は言葉を失った。

「おとつつあん」

「結衣、俺は今まであまりにもたくさんの罪を重ねてきた。一度だけだが、人を殺ったこともある。まだ駆け出しの盗っ人で、大きな一味の下っ端だった時分さ。逃げ遅れて物陰に隠れた若い女中がいてなあ、俺はお頭に見つからねえように逃がそうとしたが、間の悪いことに兄貴分に見つかった。俺は命じられたとはいえ、お頭の前でその娘っ子を殺した。まだ十六にもなってねえだろう、今のお前よりも幼い子どもをこの手でなあ」

喜助はポンと煙管を煙草盆に打ちつけた。

「さんざんっばら阿漕なことを重ねてきた身だ。今更閻魔大王さまに言い訳を並べ立てようとは思っちゃいねえが、ただ一つ、気掛かりは後に残していくお前のことさ。お前が嘉助を嫌うてはいないというなら、この際、あいつと所帯を持って、この大仏やを継いでくれねえかい」

「一」

うつむく結衣に、喜助の手が伸ばされた。

「もっとも、こればかりは無理強いもできねえ。無理にくっつければ、お前だけじゃねえ、嘉助まで不幸になっちゃう。だが、俺としてはお前たちが夫婦になってくれれば、いつ何があっても安心して逝ける。まあ、時間はあるから、たっぷりと考えてみる」

結衣は差し出された嘉助の手を両手で押し包んだ。

「おとつつあん、この手は確かにたくさんの罪を重ねてきたかもしれない。でも、私や嘉助兄さんを優しく抱いてくれたり撫でてくれた手でもあるのよ。それを忘れないで」

溢れた涙の雫が握りしめた喜助の手にポトリと落ちた。

「嬉しいことを言ってくれるな。お前が泣くから、俺まで柄にもなく泣けちゃったじゃねえか」

言葉とは裏腹に、喜助の口調はどこまでも優しい。グスッと涙を啜る喜助に、結衣は言った。

「私はおとつつあんのためだったら、何だってするんだから」

「そんなことは間違っても口にするんじゃねえ。お前の人生はお前だけのものだ。結衣、お前はこんなろくでなしの父親のためじゃなくて、自分の幸せのためにだけ生きてくれ。それが父ちゃんの願いだ」

もう夜も遅いというのに、まだ商いをするつもりか、遠くからかすかに按摩笛が響いてくる。江戸の町はひっそりとした夜陰の底で眠りにつこうとしていた。

出逢いは別離の始まり

出逢いは別離の始まり

結衣が中町でもひときわ目立つ大店美濃屋に住み込みの女中として入ったのは、その翌月の初めだった。

「般若の喜助」は闇の世界では名の知られた大物であり、あらゆる方面につてを持っている。その気になれば、大名屋敷にさえ密偵を送り込むことができるのだ。ゆえに、たとえ大店とはいえ、一商家に引き込みを一人入れることなど造作もないことだ。

とはいえ、奉行所の手前、以前よりは事が進めにくくなったのは確かではあった。凄腕と知られ、多くの名だたる盗っ人を獄門台に送った北町奉行北山源五はいまだ病臥中であり、一時に比べれば探索の眼は随分と緩くなったものの、それでも、源五の配下が執拗に江戸の町を嗅ぎ回っている。

そんな中、結衣は江戸でも五指に入るといふ大店に押し入るための先鋒としてまず美濃屋に送り込まれたのである。

美濃屋は流石に当代の信右衛門で八代目を数えるまで続いた格式を誇る大店であった。構えも立派だが、内証は更に豊かで、田舎大名よりはよほど豪勢な暮らしをしているという噂は真実であったようだ。

主人の信右衛門は四十半ばほど、内儀のおこうは三十手前と信右衛門の年齢にしてはかなり若い、その理由はすぐに判った。おこうは後添いなのだ。しかも、その前は水茶屋で働いていたところ、信右衛門と知り合ったらしい。おこうに夢中になった信右衛門は直におこうに水茶屋勤めを辞めさせ、一軒を与えて囲った。つまり手活けの花としたのだ。

当時、信右衛門の前妻であるお芙美はまだ健在で、二人はいわば道ならぬ恋だった。それがお芙美が不慮の事故で頓死した後、まだ一年の喪明けも済ませぬ中に信右衛門は親戚一同の反対を押し切っておこうを後添いに直し美濃屋に入れた。

前妻のお芙美はどうやら、あまり良い内儀ではなかったらしい。歌舞伎役者に現を抜かし、芝居見物やそれに着てゆく衣装に湯水のごとく金を使っていたという。そんな内儀に信右衛門が頭が上がりなかつたのは、お芙美が先代の一人娘であり、信右衛門が奉公人上がりの婿養子であったからだ。これは結衣が後に朋輩の女中から仕入れた話だ。

そういうわけで、当時、美濃屋夫妻の仲はとうに冷め切っていた。しかも、お芙美の死因というのがどうにも不自然だ。というのも、お芙美は病死ではない。芝居帰りの道中、事故は起こった。人当たりして気分が悪くなったお芙美が途中で駕籠を降りて一人で歩いて帰ると言い出したところまでは、駕籠かき人足の証言で判っている。

が、その後のなりゆきがどうも妙で、駕籠を降りたお芙美が近くの川に足を滑らせ転落して亡くなった。亡骸が発見されたのは翌朝だった。しかし、酒を飲んでいただけでもなく、何の発作を起こしたわけでもない女が何故、川に足を滑らせたりしたのか。誰かに突き飛ばされでもしない限り、あり得ないことだ。

このことを当然ながら、奉行所は重く見て詮議したというが、美濃屋信右衛門はどうも大枚を与力に渡し、事をうやむやにってしまったらしい。この月の担当は公正な裁きをすると言われる北町ではなく、南町の方であったことも美濃屋には有利だったに相違ない。

信右衛門には亡くなったお芙美との間に一人息子作蔵がいる。この跡取りは既に二十二歳になっていて、後妻のおこうとの間には一人娘のおゆみがいるが、信右衛門はこの五歳になる娘を溺愛していた。このままではれきとした跡取りがいても、おゆみに美濃屋の暖簾を継がせるのではないかという剣呑な噂も流れる中、去年の暮れ、おこうが待望の男児をあげた。

信右衛門はこの次男を殊更可愛がり、作蔵に対しては一あんな役者狂いの身持ちの悪い女が生んだ倅なぞ、本当に自分の種かどうか判らない。と、まで広言しているとか。

この作蔵、一昨年、遠縁のお店の娘と祝言を挙げたものの、吉原通いなどあまりに放蕩が過ぎて、女房は新婚わずかふた月で愛想を尽かして実家に帰ってしまい、ほどなく離縁となった。

商いに精を出すどころか、日がな岡場所や吉原に入り浸り、このままでは信右衛門が言葉通り作蔵を息子と認めず勘当するのではないかと古参の奉公人たちは心を痛めている。

結衣も奉公初日にそれとなく若旦那を紹介されたものの、遠目に見た作蔵は確かにけして良い印象を与える男ではなかった。見映えはそう悪くはない。むしろ、男前で通るだろう。眼許もきりりとして、これで眼(まなこ)に陰がなく荒んだ様子がなければ、女たちも放ってはおかないだろう。それでなくとも、作蔵には美濃屋の跡取りという世間的立場がある。

自棄のような暮らしぶりがそのまま表に出て、近づきたくもないような陰惨な雰囲気を持っている。

もっとも、下っ端の女中として入った結衣は直接当主やその家族と拘わる上女中とは違うから、作蔵のことはさほど気にしなくても良い。結衣の真の目的は美濃屋の内情、特に最奥にあるはずの蔵の位置を調べ一味に伝えることだ。更に重要なのは蔵の鍵の型を取ることだ。

これが実は引き込みの大切な任務の一つだった。この鍵型をひそかに繋ぎの者に渡し、もう一つ同じ鍵を作る。その鍵を作って押し込み当日、蔵を開ける。最も大切な役目はその当日、美濃屋の家内が寝静まった後を見計らい、表戸を開けること。実はこれが引き込みの最大の目的である。

これから当日までの限られた期間内で、これらの役割をそつなくこなさなければならないと思えば、緊張に身体が震えた。しかも、周囲の誰一人として自分が引き込みであることを悟られてはならない。嘉助が言ったように、ここで引き込みが失敗すれば、芋づる式に探索の手が伸び、一味がことごとく捕らえられる。

失敗は許されないのが引き込みの任務なのだ。

美濃屋に入って十日ばかりが過ぎた頃、結衣は庭を掃いていた。文月の今は落葉よりは雑草がどうしても目立ってしまう。結衣は落ち葉や小枝を掃きつつも、せっせと草を抜いた。

美濃屋の庭はたいそう広い。今は夏の花がその広い庭を美しく彩っている。蒼色とピンクの紫陽花、山梔子(くちなし)の花や桔梗も見えた。しばし花に見入ってから、結衣は再び手を動かし掃き掃除を始めた。

そのときだった、少し離れた後方で派手な物音が響いた。どうやら、誰かが転んだらしい。急ぎ振り向くと、五歳ほどの愛らしい女の子が転んで泣いていた。

眼にも鮮やかな紅色の小袖に鶴丸が織り出された豪華な着物を着せられた童女は美濃屋信右衛門の愛娘に違いなかった。

泣いている小さな子をそのままにもできない。結衣は駆け寄り、童女を抱き起こした。

「大丈夫？」

小さな身体を眺めやるも、幸いにも怪我をしている様子はない。結衣は女の子の頭を撫で、できるだけ優しく言い聞かせるように言った。

「どこにも怪我はしてないからね」

だが、童女はいっかな泣き止まず、結衣も弱り果てた。と、足許に露草が咲いているのが眼に入った。

「これを見て、綺麗なお花でしょ」

その言葉に漸く童女が泣き止んだ。結衣の手許をじいっと見つめ、こくりと頷く。

「綺麗、何ていうお花？」

「露草というのよ」

「つゆくさ？」

あどけない声で繰り返す女の子に、結衣は視線を合わせて言った。

「これを上げるから、もう泣かないで、ね？」

「うん！」

女の子は小さな手にこれまた愛らしい蒼色の花を持ち、にっこりと笑った。まだ涙の粒を宿し

たその瞳が愛くるしい。結衣もつられて微笑んだその時、向こうから悲鳴のような声と脚音が聞こえた。

「おゆみ！」

顔を上げると、豪華な紫色の着物に黒縹子の帯を締めた三十ほどの女が駆けてくる。信右衛門の女房おこうであろう。結衣は咄嗟におゆみから距離を置き、深く頭を下げた。

「急に姿が見えなくなったと思って、あちこち探し回っていたというに」

言い置き、つと結衣の方を見やる。

「お前が見つ付けてくれたのかえ？」

「はい、お内儀(かみ)さん」

結衣は面をできるだけ伏せて応える。引き込みはできるだけ主人夫婦の印象に残らない方がよいとは、徳市が教えてくれたことだ。

「名は何と？」

「結衣と申します」

「良い名だねえ。お前、そんなに頭を下げていては顔が見えないよ。結衣はおゆみの生命の恩人なのだから、ちゃんと顔を見せておくれ」

「生命の恩人だなどと、そこまでたいしたことをしたわけではありません」

応えるのに、おこうは涼やかな声を立てて笑った。

「若いのに謙遜するところも好ましい。そう言わずに、顔を見せておくれでないか」

そこまで言われて顔を上げないのもかえって不自然だろう。結衣が顔を上げると、おこうが微笑んだ。

「あれま、何と可愛らしい娘なこと。気立ても良さそうだし、孝太郎が年頃であれば、お前のような娘を嫁に欲しいほどよ」

孝太郎というのは昨年末に生まれたばかりのまだ赤児の次男のことである。

「それにしても、そこまで器量良しの娘であれば、記憶に残っていそうなものだけど」

おこうの言葉に、結衣は控えめに告げた。

「つい十日ほど前に奉公に上がりました新参者でございます」

おこうが大きく頷いた。

「なるほど、それで見かけたことがなかったわけね。そのなりでは下女中として入ったのかえ？」

結衣は改めて我が身の粗末な身なりを思い出した。地味な着物も帯も質素なもので、すべて家から持参したものばかりだ。頬を赤らめた結衣に、おこうが優しく言った。

「どうも悪いことを言っちゃったようで、済まないねえ、だけど、あたしも元はたいした家の出じゃないから、お前と似たようなものだよ。結衣のような機転の利く若い女中が一人奥にも欲しいと思っていたところだったから、丁度良い。今日から早速、上女中として奥の方で私やおゆみの世話をしてくれ」

おこうはけして美人という質ではなかった。子どもを生んだばかりということもあるだろうが、ふっくらとしており器量も平凡だ。しかし、その細い瞳には優しさが溢れており、結衣が男でも、こういう女となら寛げるだろうという気がする。信右衛門がおこうに惹かれたのも判るような気はした。

そういえば、美濃屋に来てから内儀の悪口を聞いたことがない。口うるさいと若い女中たちからは怖れられている謹厳な女中頭お登勢でさえ、おこうの指図には文句一つ唱えず従順に従っている。

おこうが後妻に直るはるか前から美濃屋に奉公している大番頭なども、おこうには一目置いているようだ。大方の奉公人は老いも若きもこの若い内儀に心服しているように見えた。むしろ、不幸な亡くなり方をした先妻のお芙美を悪く言う奉公人の方が多かった。

「ありがたいお言葉ではございますが、私のような粗忽者に奥向きでのご用が務まりますでしょうか？」

おこうは微笑んだ。

「お前ほどの賢い娘のこと、心配しなくてもすぐに慣れるでしょう。なに、別にたいした用事など、ありはしないよ」

上女中になれば、主人一家が暮らす居住区にも怪しまれずに入出できるようになる。美濃屋の全体図を頭にたたき込んでおくためには、願ってもない好機といえた。

こうして、結衣はひょんなことから、上女中として内儀おこうの側近く仕えることになった。

その翌日、結衣はおこうの言いつけで主人の信右衛門の居室を掃除していた。床の間には墨絵で鯉の滝登りを描いた雄壮な掛け軸が掛けられ、竹籠にふた色の紫陽花と山梔子、桔梗が活けられている。

大方、昨日見た庭の花をおこうが摘んだに相違なかった。まずは部屋内を掃き、床の間、違い棚を丁寧に拭き清めて掃除は終わりとなった。主人の居室にあまり長く居ては怪しまれる。それでも、結衣は周囲を眺め回し、その部屋の様子や家具の配置などを頭にたたき込んだ。

部屋を出るために襖を開けようと手を掛ける寸前、向こうから怒声が響き渡った。

「良い加減にしないかッ。毎日毎日、良い年をした若い者がろくに働きもせず廓に入り浸って、恥ずかしいと思わないのか!？」

かなり立腹しているらしい声は信右衛門のものだろう。対して、よく似ているけれど、少し若

い声で応える。

「それこそ、おとつあんの思う壺でしょう。私が身を持ち崩せば崩すほど、孝太郎に身代を譲りやすくなりますからね」

その応えで、この声の主が想像どおり、信右衛門の長男作蔵だと判る。

「何だと？」

信右衛門の声が更に凄みを増した。

その声に、擲揄するような声が応える。

「おや、違うのですか？　うちの奉公人だけじゃない、同業のお店連中でも寄ると触ると、その噂で持ちきりだそうですよ。美濃屋の旦那は憎い先妻腹の息子じゃなくて、惚れに惚れ抜いた後妻の生んだ赤児に身代を譲りたがってるって」

「お前、本気でそんな埒もない噂を信じてるのか？」

作蔵が鼻を鳴らした。

「当たり前じゃアないですか。おとつあん、あんたは鬼のような人だ。惚れた女を家に引き入れるために、何の罪もないおっかさんを殺して何食わぬ顔をして、のうのうと生きてる。私がそれを知らないだけでも、思っているんですか！」

「作蔵ッ、口にして良いことと悪いことがあると、その年になってもまだ判らないのかっ」

「私是一向に構いませんがね。口にされて困るのは、おっかさんを殺したおとつあんだけでしょう」

「馬鹿っ」

派手な音がした。作蔵が信右衛門に打たれたのだと知れる。短い沈黙の果てに、信右衛門の苦渋に満ちた声が響いた。

「お前にだけは話すまいと思っていたが一、お芙美が何故あんな亡くなり方をしたか、お前は真実を知っているわけではなからう」

「だから、それは、あんたとあの女が結託して、おっかさんを殺したんだ！」

「何度言ってる、おこうはもう美濃屋のれきとした内儀になったんだ。あの女呼ばわりせずに、おっかさんと呼びなさい」

「馬鹿な、おっかさんを殺した売女を母親だなんて呼べるものか」

「今、何と言った？ お前、おこうを売女と呼んだのかっ」

「売女でも足りない、美濃屋の身代欲しさなら、十七も一自分の父親ほどの男にも平気で脚を開くような淫売じゃないか。おっかさんは、そんな女のために可哀想に信じてたおとつつあんに殺されちゃったんだ！」

溜息が聞こえ、次いで信右衛門の深刻な声音が続いた。

「そこまで言うのなら、致し方ない。真実を話そう。お芙美は、お前の母親はあの日、事故のあった川のほとりで鬘頭の若い役者と逢い引きの約束をしていたんだよ。何でもまだ駆け出しだが、たいそうな美男だったそうだ。その役者に随分と店の金を持ちだして貢いでいることも私は知っていた。だが、それで、お芙美の気が済むならと見て見ぬふりをしていた。だが、若い役者の方は次第にお芙美に飽きてきて、ケリをつけたがっていたらしい。それで、その日も別れ話を持ち出され、お芙美が逆上した。別れる別れないと揉めている最中、お芙美が誤って川に落ちてしまった。おっかさんが異様に水を怖がっていたのは知っていただろう」

作蔵からの返事はなかった。

「幼い頃に川に落ちて溺れかけてからというもの、お芙美はたとえ浅瀬でも怯えて入ることはできなくなった。それが災いしたんだ、川に落ちたお芙美は恐慌状態を来たし、本来なら溺れるはずのない足の立つ川で溺死した。亡骸が見つかった同日、その件(くだん)の役者が芝居小屋の者に付き添われて番所に出頭してきたそうだ。それで、お芙美の死んだ原因が判ったというわけさ」

「そんな、馬鹿な」

作蔵の声が戦慄いた。

「お芙美の死因が明らかになるのを金を使ってもみ消したという世間の噂は真実だ。だって、お前、たとえ心はとっくに離れていたとしても、お芙美は十六年も連れ添った女房じゃないか。息子のような年の若い役者に入れあげた挙げ句、棄てられそうになって別れ話の果てに死んだなどと到底、世間さまに言える話ではなかった。それでは、あまりにお芙美が不憫だからな」

「だが、おとつつあんなは私が実の子ではないと思っているとー」

信右衛門の声が皆まで言わさなかった。

「つまらない噂を信じるな。世間は何でも他人の家の揉め事は面白おかしく取り沙汰するものだ。だが、お前が誰の子かはこの私がいちばんよく知っている。お芙美は祝言を挙げたときは綺麗な身体だったし、お前を身籠もったのはそれからすぐだった。その後は知らないが、お前は間違いなく私の子だ。それは父親である私が保証しても良い」

「嘘だ嘘だ嘘だ！ おっかさんが役者と別れ話で揉めて川に落ちただなんて、そんなことがあるはずがねえ」

「作蔵！」

信右衛門の悲痛な声上がる。到底、出てゆける雰囲気ではなく、結衣は身を強ばらせたまま立ち尽くしていた。そんな彼女の眼前で突如として襖が揺れた。怒りに任せて力一杯蹴り上げら

れた襖が烈しい音を立てて倒れてくる。

結衣は小さな悲鳴を上げ、後ずさった。咄嗟の動きが幸いして、倒れてきた襖が結衣にぶつかることはなかった。

「何て乱暴なことをするんだ、お前は」

信右衛門が絶望に染まった顔で作蔵を見つめている。結衣は居たたまれず、うつむいた。その寸前、作蔵と視線がぶつかった。

ぎらついた視線が結衣を射竦めるように絡みついた。その嫌らしげな視線が検分するかのよう、結衣の身体を舐める。あまりのおぞましさに、結衣は総毛立った。

「怪我はなかったかい？」

流石に信右衛門は動ずることなく、結衣に身の安全を問うた。結衣は小さく頷き、頭を下げた。

「申し訳ございません。旦那さまのお部屋の掃除をしておりましたが、出ようにも出られず、ご無礼を致しました」

信右衛門は鷹揚に頷いた。

「これだけ烈しい父子喧嘩をしては、出ようにも出られないのは仕方ない。済まなかったね、できれば、このことは他の奉公人には口外しないで貰えるとありがたい」

流石は江戸屈指と呼ばれる大店の主だ。見事な受け答えに、結衣はいっそう頭を垂れた。

「もちろん、承知しております」

「もう、ここは良いから、行きなさい」

「はい」

結衣は作蔵にも一礼して、静かに下がった。背中にはまだ、あの粘りつくような作蔵の視線を感じていた。

それにしても、世の中は面妖なものだと思わずにはいられない。信右衛門と作蔵は紛れもない血の繋がった親子でありながら、判り合えない。姿形も作蔵は信右衛門そっくりだ。何より二人の姿を見ずとも声だけを聞いた結衣には、この父と息子の声が紛れもなく父子であることを確信した。

作蔵が信右衛門ほどの年になったら、恐らく声に深みが出て、こんな声になるであろうと思えるほど、二人の声は酷似していた。

信右衛門と作蔵に比べ、結衣と喜助の間に血の繋がりはまったくない。それでも、父と自分は血の通った信右衛門父子よりよほど強い絆で結ばれている。そのことを結衣はありがたいと思った。

「おとつあんのようなお人の娘になれて、私は幸せだ。」

そう素直に思える自分が嬉しかった。作蔵がもう少し分別のある男であれば、信右衛門がどれほど息子を案じているか判るといものだろうに。何故、信右衛門ほどの男にあんな愚かな息子が生まれたのか。顔は父に似ていても、どうやら作蔵の性根は父親とは相反しているようだ。

美濃屋の先妻の死については世間では確かにあれこれと取り沙汰されている。その大方は婿養子の信右衛門が妾のおこうを正妻に直したいがために、おこうと計ってお芙美を事故に見せかけて謀殺したというものだ。お芙美の死の真相を隠蔽するために南町奉行所の役人にも多額の賄賂を送ったとも。

しかし、噂の大半は信右衛門自身の今し方の証言で誤りであることが判明した。あのときの信右衛門の言葉には微塵の偽りもないと、傍で聞いていた結衣にも判った。むしろ顔を見ずに声色だけを聞いていたからこそ、そこにこもった真実を知ったともいえる。

信右衛門が妻の死因を公表しないために金を使ったのは確かではあったけれど、それは妻の不名誉な死を隠し、あくまでも妻の体面を守るためであった。

噂ほど、当てにならないものはない。結衣はこの時、つくづくと思い知らされたのだった。

その日も結衣は庭にいた。上女中になってからというもの、女中頭のお登勢からも庭の掃き掃除はしなくて良いと言い渡された。にも拘わらず、暇があれば、結衣は庭掃除をしている。人気がないときは最奥部まで歩いて、蔵の建つ位置、目印になりそうな樹木を記憶に刻み込み、深夜、紙に書き付ける。そんなことを繰り返している。

奉公に上がってしばらくは他の女中と相部屋だったけれど、今は狭いながらも一人の部屋を与えられている。そのため、夜更けまで書き物に夢中になっていたとしても、見咎められる心配はない。美濃屋では下女中は大部屋、上女中になると一人用の部屋を与えられると決まっているらしい。

あまりに頻繁に一味の者と接触しても、怪しまれる危険性がある。そのため、繋ぎを取るのは半月に一度と決めてあった。繋ぎは半月に一度のその日、必ず結衣の前に現れる。ただし、その時、繋ぎがどのようなでたちをしているかは判らない。

襦袢を纏った乞食かもしれないし、裕福な商人風かもしれない。男なのか女なのかも判らない。喜助の手下には女も数人はいる。いずれもこれまでは彼女らの誰かが引き込みとして押し込み

先の商家に潜入してきたのである。

どのようななりをしているか知れずとも、結衣は必ずその者と接触しなければならない。予め周囲に気付かれないように向こうから合図はあるというけれど、結衣は今一つ自信がなかった。

お登勢は幾ら止めても結衣が庭掃除を止めないので、呆れている。

—お内儀さんから何とか言ってやって下さいまし。

お登勢が訴えると、おこうは笑んだ。

—良いことじゃないの。若い娘で今時、結衣のような子はいないわよ？ そんなにやりたいなら、させておやり。

そのひと言のお陰で、結衣は今も掃き掃除をしている。今日は思い切って蔵の鍵を試してみるつもりだ。可能ならば、今回は鍵の型も取りたい。

だが、彼女が庭掃除を好きなのは実のところ、引き込みの役目のためだけではない。美濃屋の庭は広大で、様々な草木が植わっているため、見ていて飽きない。

幸いにも蔵のある奥まった場所まで誰にも逢うことなく行け、蔵の鍵も確かめることができた。美濃屋の蔵には千両箱や父祖代々伝えられた名宝が眠っているという。錠前は流石に立派なものだが、型を取ることはできると判断し、今回は早速実行に移すことにした。

その帰り道、結衣はつい油断していた。蔵の側からは離れたので、余計に気を緩めていたのだろう。山梔子が植わっている辺りで立ち止まり、爽やかな白い花をしばし眺めていた。その中にどこからか蝶も飛んできて、ひらひらと白い花に戯れかけるように舞う。

黄色い蝶は小さく愛らしく、忙しく羽根を動かしてはまた花に止まり、また舞い上がっては別の花に止まる。その様子に思わず微笑んでいると、背後から男の声が聞こえた。

「随分と熱心だな」

突然のことに、結衣は飛び上がった。振り向かずとも、この声が誰のものであるかは知れた。

「申し訳ございません。花があまりにも綺麗だったもので」

頭を下げた結衣の前で、歩いてきた作蔵は止まった。

「いや、お前が熱心に眺めていたのは花ではなく、むしろこちらだろう」

作蔵がつと動いた。結衣がハッとする間もなく、山梔子に止まった小さな蝶は作蔵の大きな手に掴まれ、握りつぶされていた。

「あー」

あまりの出来事に、声も出ない。作蔵はそんな結衣の前で、握りつぶした蝶を地面に投げ捨て更に脚で踏んだ。

「私は綺麗なもの、美しいものが好きだ。だが、あまりにも美しすぎるもの、愛らしいものはこうして踏みつぶしてやりたくなるんだ」

作蔵の手がつと伸び、結衣の頬に触れた。

「お前は美しいな。先刻の蝶などより、この白い花などより、お前の方がよほど綺麗で可愛い」

そういう生きものほど、私は無性に手に入れたいくなるのだよ、そして、手に入れた後はさんざん穢して踏みつぶしてやりたくなる。

男の声が結衣の耳に不吉な呪(まじな)い言葉のように注ぎ込まれる。

「震えているのか？」

人に触れられているのに、これほどに冷たく感じるのは何故だろう？ 作蔵の触れた頬が冷たく、そこから氷と化してゆくようだ。結衣は思わず身震いした。

「だが、安心するが良い。踏みつぶす前には、たっぷり可愛がってやろう。この世の悦楽という悦楽を教え込んでやるから」

彼がスと手を動かし、結衣のすべらかな頬を撫でた。

「お前は既に私の手に囚われた蝶だ。愉しみにしているが良い」

頬に触れた指は呆気なく離れた。作蔵は低い声で笑いながら、踵を返し去ってゆく。結衣は茫然とその後ろ姿を見つめた。

緩慢な動作でしゃがみ込み、無残に潰された蝶を見つめる。溢れた涙で黄色が滲んだ。結衣は小さな穴を掘ると、潰された蝶をその中に埋め、土をかけた。

あの男は狂っている。元々、狂気を帯びた性格なのか、母親の尋常でない死を乗り越えきれずに精神に異常を来してしまったのか判らない。店の者からは、元々、性癖に変質的で異常な一例えば道端で見かけた犬猫に対して訳もなく蹴ったり石を投げたり、時には野良猫に毒をわざと食べさせ、のたうち回って死ぬのを見て飲んでいたという。そういう残忍性は幼いときから見られたという話を聞いたことはあった。

遊廓通いが顕著になったのは母お芙美が死んでからの出来事だとはいうが、元々、あの男の中には狂気じみた性格があることは疑いようもない。

「お前は既に私の手に囚われた蝶だ。愉しみにしているが良い。」

先刻、囁かれた言葉が耳奥でこだまし、結衣は思わず両手で耳を覆い烈しく首を振った。とんでもない男に眼を付けられてしまった。引き込みとしては大失態だ。

無意識の中に男が触れた箇所を手のひらでこすっていた。まるで汚いものでも触れたかのよう。

得体の知れない不安を抱えたまま、それでも日々は何事もなく過ぎていった。上女中となつてからは当主や家族の暮らす奥向きでの仕事が多くなつたとはいえ、元々、若旦那の作蔵は家にいることの方が珍しい。

大抵は吉原で流連（居続け）をしていたり、岡場所に入り浸っていたから、幸か不幸か結衣も作蔵と顔を合わせることはなかった。

暦は八月に変わった。このところ、江戸は雨一つない晴天が続いていて、その日も風がそよとも吹かぬ油照りの一日となつた。結衣は内儀おこうの言いつけで町人(ちょうにんまち)町の京屋まで遣いに出た。

町人町は名の通り、町人の町である。美濃屋とは同業の呉服問屋京屋を初め、名の知れた大店が軒を連ね、町全体が活気のある、いわば商人の町だ。

京屋の主人市兵衛は美濃屋信右衛門と同様、丁稚から出世して先代に見込まれて婿養子となつた。因果なことに、市兵衛も先代の娘と結婚したものの、その最初の結婚は不幸に終わっている。女房を亡くした後、後妻を迎えたが、その女は飾り職人の娘で、市兵衛が妻に迎えると宣言するまでは存在すら知られていなかった娘だった。

信右衛門のように先妻が健在であった頃から関係を持っていたわけではなく、妻が亡くなってからの関係ではあるが、その娘と市兵衛がひそかに関係を続けていたことに変わりはない。市兵衛もまた周囲の反対を押し切って、その娘を後妻に入れたことなど、信右衛門と二人の境遇は似ていた。

だからということもないだろうが、この二人の傑物は歳も近く気も合うことから、かなり親しい付き合いをしている。美濃屋と京屋も共に江戸を代表する大店でありながら、良好な関係を保っているのは、ひとえに主人同士が盟友ともいって良い間柄ゆえであった。

その日、結衣がおこうに言いつけられたのは、わらび餅を京屋に届けてくるようにという用事であった。おこうの実家は浅草の小さな水茶屋である。気立ての良いおこうは、そこの看板娘であったといい、その頃から、おこうの作るわらび餅が美味いと遠来の客もわざわざ買いに来るほどの評判だった。

信右衛門との馴れ初めも元はといえば、このわらび餅であったという。最初、信右衛門はこのわらび餅を作ったのがおこう自身だとは知らず、

「このように美味しいわらび餅はどこで買ったのかね？」

と、おこうに声をかけた。それが二人の始まりであったのだと、三十近いおこうが娘のように頬を染めて話している様子は微笑ましかった。

美濃屋に奉公してひと月、結衣は信右衛門・おこう夫妻に次第に親愛の情に近いものを抱き始めていた。確かに世間のいうとおり、二人の関係は最初は許されぬものであったかもしれない。しかし、先妻のお芙美も亡くなった今、年は違えども惚れに惚れ抜いて一緒になり、互いに労り合う夫婦の姿は結衣には眩しく見えた。

そのおこう自慢のわらび餅は既に結衣も食べた。おこうは時々、自ら厨房に立ち、夕餉だけでなく、こうした菓子をも作った。昨日もたくさんのわらび餅を作り、大勢の奉公人に配った。上は大番頭の茂吉から下はまだ幼い丁稚にまで大盤振る舞いし、皆、暑い時分のこととて、冷たく冷やしたおこう手製のわらび餅に笑顔で舌鼓を打ったのだった。

おこうは、あまたいる奉公人一人一人の顔と名前もすべて諳んじ、けして間違えることはない。どんな用事を言いつけるときでも、ちゃんと名前を呼び

「一済まないけど、よろしく頼むよ。」

と頭を下げ、用事の済んだ後はちゃんと報告させて

「ありがとうよ、助かった。」

と、礼を言う。

世間には水茶屋の娘上がりや玉の輿に乗ったと陰口を言う者もいるけれど、美濃屋の奉公人は皆、この内儀を敬い心から従っているのが判る。結衣もまた、おこうの人柄を知るにつけ、強く惹きつけられていった。

おこうの手作りのわらび餅は竹皮に包まれ、結衣の手によって無事に京屋に届けられた。京屋ではわざわざ市兵衛の内儀お彩(さい)が出てきて、使用人にすぎない結衣に丁重に礼を言った。大店の内儀でありながら、少しも偉ぶったところがない。お彩は気質的にはおこうと相通ずるところがあるように見えたけれど、器量はおこうより数段良かった。

市兵衛がどれだけ親戚連中に反対されても、けして意思を曲げずにお彩を後妻に迎えたそうだが、それも納得できる。はんなりと微笑むお彩は桜の花が綻んだような可憐な美貌であった。歳は既に三十路を過ぎているであろうのに、年齢を感じさせない若々しい美貌は今でも、氷の京屋、と畏怖されるやり手の男を骨抜きにしているほどだと専らの噂である。

—この暑いのに、ご苦労だったね。

お彩は少し上がって休んでいくように言ったが、結衣はとんでもないと辞退した。所詮、自分は美濃屋の奉公人にすぎない身である。幾ら京屋の内儀が勧めてくれたからといって、図々しく上がり込めるなど考えられなかった。

京屋を辞して帰る道すがら、結衣は久しぶりに江戸の町の賑わいを堪能した。目抜き通りには大店が目立つが、そこを抜ければ、小体な店もある。結衣が買えるのは大店の内儀やお嬢さまが鼻根にするような店ではなく、そういった気軽に入れる店であった。

目抜き通りが途切れた辺りで、結衣はふと違和感を憶えた。通りの向こうから薦を被った小柄な老人が歩いてくる。今にも倒れるのではないかと思うほど覚束無い歩き方は寄る辺のない乞食にしか見えない。

が、その乞食が先刻から結衣の方をちらちらと窺っているように見えたのだ。そこで、結衣は愕然とした。

いけない、大切なことを忘れていたと自らの迂闊さに齒がみする。今日は半月に一度、一味の繋ぎに美濃屋で集めた情報を渡す日ではないか！ こんな大切な日を忘れてしまったのでは引き込み失格である。

既に一度めの接触は終わっている。今回はこれが二度目だ。美濃屋を出るときまでは確かに憶えていたし、今も情報はちゃんと懐深く収めている。結衣は大切な情報を記した紙があるはずの胸の辺りをそっと手のひらで押さえた。

今回は錠前から取った鍵型も含まれている。作蔵と嫌な出会い方をしたあの三日後、ひそかにまた蔵の方にゆき、鍵の型を取ったのだ。今回渡すのは鍵型と美濃屋の全景図、ひと月の間に頭にたたき込んで書き込んでいった店舗から居住区、庭に至るまでの見取り図だ。

乞食らしき老人は次第に近づいてくる。そこで、老人の小さな身体が傾ぎ、無様に引っ繰り返る。結衣は慌てて駆け寄った。たとえ繋ぎではなくても、弱り切った哀れな老人をこのまま見過ごしにはできない。

と、転んだ老人が結衣の差し出した手に縋りながら小声で囁いた。

「谷があれば」

「川」

結衣も囁き返す。続いて

「山があれば」

問い返すと、老人が「海」と応えた。

彼の眼と結衣の眼が束の間合う。弱々しいはずの彼の眼は炯々と輝きを放っていた。

「谷があれば川、山があれば海、これは般若の一味で繋ぎと連絡を取る際の合い言葉だ。役人が放つ密偵の眼を眩ますため、合い言葉は幾通りかある。

「何とかやってるようじゃねえか」

囁れた声は徳市のものだ。結衣は懐かしさに思わず肩の力が抜けた。今度は徳市はわざと周囲に聞こえるような大声で言う。

「お情け深い娘さん、どうか哀れな乞食にお恵みを下され」

結衣は懐から銭入れを取り出し、折りたたんだ紙を握りしめた。

「おじさん、これをおとつあんに」

小声で言い、すかさずこれまた大きな声で告げる。

「お気の毒に、どうかこれで冷たい麦湯でも買って飲んで下さいまし」

「確かに受け取った。くれぐれも用心しろよ」

徳市は囁き、

「ありがとうございます」

声高に一礼して、素早く結衣から離れた。結衣もまた軽く会釈して徳市の方を見向きもせず、二人は逆方向に歩き出す。傍目には気の毒な乞食と優しい娘の束の間の邂逅にしか見えないはずだ。

しばらく歩いて振り返った時、小柄な乞食の姿は既に人混みに飲まれて消えていた。

それから更に歩き、結衣はとある店の前で脚を止めた。小さな小間物屋の前には道行く客の眼に止まりやすいように安価な簪が並んでいる。その中の一つに、結衣は引き寄せられるように近づいた。

蝶の形をした飾りが一つ付いただけのものだけれど、薄紅色の蝶には梅の花模様が描かれ、華

やかな雰囲気醸し出している。思わず手に取ると、すかさず奥から店主らしい男が出てきた。三十年配のいかにも如才なさそうな商人らしい男である。

「その簪は綺麗でしょう？ 梅の花ってえいうんで、ちと季節外れなものだから、かなりお安くしてあるんですけど、良かったら当ててみますか？」

と、手鏡まで差し出すので、結衣は慌てた。

「いえ、素敵な簪ですけど、生憎と持ち合わせがないので」

急いでその場を離れようとした時、背後で男の声がした。

「店主、その簪を一つ貰おう」

あからさまに落胆を見せた店主の顔がパッと輝き、現金なほど愛想良くなった。

「これは美濃屋の若旦那。いつも毎度ご贖買にありがとうございます」

その声に、結衣は振り向く。作蔵が懐から錦の銭入れを出して金を払っているところだ。

「困ります、こんなことをして頂いては」

狼狽える結衣に、作蔵は肩を竦めた。

「別にこんな安物の簪一つ買ってやったからといって、どういうことはねえよ」

結衣はムキになって言い募る。

「高い安いの問題ではありません。私は若旦那さまに簪を買って頂く理由がないと申し上げているのです」

作蔵が眉をつりあげた。

「男が惚れた女に簪を買うのは、おかしいか？」

「え、それはおかしくはありませんけど。一って、ほ、惚れたって」

納得しそうになり、結衣は黒い瞳を一杯に見開いた。

作蔵が意味ありげな流し目をくれる。

「つまりは、そういうことだ」

「ええっ」

漸く理解した言葉の意味に、結衣は白い頬を染めた。作蔵がプッと吹き出す。

「お前、面白いな。庭で見かけたときは何だか物凄く神経を尖らせていたようだが、今はあのときは全然違う」

その指摘に、結衣はハッとした。作蔵と庭で遭遇したときは、蔵の鍵を検分した後だった。とはいえ、あのときの結衣の普段との相違は傍目には微妙なもので、凡庸な者であれば見抜けなかったはずだ。その些細な違いを目ざとく見抜いたとあれば、この若旦那、ただの色に狂ったろくでなしというばかりでもないのかもしれない。

今日は徳市に鍵型と美濃屋の見取り図を渡した。これで、引き込みの役目の半分は無事に終えたことになる。後は更に内情をつまびらかにし、押し込み当日の夜、店のあらゆる場所の門を開けておくことだけだ。

その時、突然、内儀おこうの笑顔が臉に浮かんだ。結衣のような女中にまで気遣いを忘れず、優しい観音菩薩のような女(ひと)。今、我が身がしていることは、おこうに仇なすことに他ならない。美濃屋の商いに関して、結衣は悪しき噂を聞いたことがなかった。

先ほど訪れた京屋などは市兵衛がかなりきわどいこともしていて、商いのためなら手段を選ばないため、`氷の京屋、とまで呼ばれているようだが、信右衛門に関しては一切それがなかった。信右衛門の口癖は一儲けだけを追求するのは盗っ人と同じ。商いで得た儲けを世のため人のために還元してこそ、本当の商人なんだ。

若い番頭や手代にそう教えている。実際に、信右衛門は郊外で孤児を集めて育てている寺の住職に時折、寄進と称して多額の金子を融通しているようであった。

その時、初めて結衣の心に疑問が浮かんだ。
一私は一体、何をしようとしているの？ 美濃屋の蔵に眠っているのは皆、真っ当なお金だ。今の旦那さんは間違っても強突張りでもなければ血も涙もない冷徹な商人ではない。

真っ当に働いて稼いだ金を横から奪う権利が誰にある？ 私がこれからしようとしていることこそがまさしく罪と呼べるものではないの？

般若一味は基本的には犯さず殺さずの掟を掲げている。しかし、顔を見た店の者はたとえ幼い子どもであろうと容赦なく殺すこともあるのだ。押し込みの夜、美濃屋の者たちが全員無事であるという保証はない。

結衣は横目で作蔵を見た。こんな男は、どうなろうと天罰だろうけれど。と、考えて、首を振る。たとえどんな極道息子であろうと、理不尽に生命を奪って良いものではない。

「あのときは突然のことで、愕きましたから」

言い訳にもならぬような言い訳をひねり出すと、作蔵はもうそのことについては聞いてはいないようだ。彼は伸び上がるようにして、前方を見つめている。

つられて思わず視線の先を辿ると、若い夫婦が子どもを連れて歩いていた。まだ二十代半ばほどの亭主が赤児を抱き、それよりや若い母親が三つくらいの男の子の手を引いている。

作蔵の親子を見つめるまなざしはやわらかく、彼の方こそ先日の荒んだ雰囲気を発散させていた男とは別人のようである。

「ああいうのは良いもんだな」

その口ぶりには心底羨ましげな響きがあった。

「てて親がいて、母親がいて、子どもがいる。そういう当たり前の光景にどれだけ憧れたか知れやしねえ」

そういう作蔵の整った横顔はどこか泣きそうに歪んでいる。

「若旦那さま」

思わず声をかけると、作蔵がニヤリと笑った。

「意外か？ 俺がまともなことを言ったら」

結衣は「いいえ」と小さな声でかぶりを振る。

「俺のお袋は、本当にどうしようもねえ女だった。親父がお袋に愛想を尽かして若い妾に走ったのも、男としては理解できねえこともない。俺自身、よく憶えてるよ。まだ年端もゆかねえ倅の世話は女中や乳母に任せきりで、自分は芝居三昧。本音を言やア、よく親父がお袋を叩き出さなかったもんだと感心すらしてるさ」

だから、と、彼は天を仰いだ。

「所帯を持ったら、子どもはたくさん作って、俺は絶対に子どもに淋しい想いはさせねえと子ども心に思ってたなあ。親父は悪いヤツじゃねえが、あっちはあっちで幼い倅のことなんぞまるで眼中になく、商いひと筋だった。だから、二十歳で嫁さんを貰ったときも、馬鹿みたいに張り切ってたよ。女房は不細工で、俺の理想とはかけ離れたような女だった。それでも縁あって夫婦になったから、良い亭主になってやろう、てて親にも早くなりてえと思ってたんだぜ」

作蔵が泣き笑いの表情で結衣を見た。

「俺がこんな真っ当な夢を見てたのが信じられねえような顔だな」

結衣は微笑んだ。

「いいえ、安心しました。若旦那さまもちゃんと人の心をお持ちだったんだなって」

「人の心か、お前、俺を一体何だと思ってたんだ？」

まさか当人の前で気違いや鬼に見えたとは言えず、結衣は曖昧に笑った。だがな、と、作蔵は溜息混じりに続けた。

「女房は気位ばかり高え、お袋のひな形のような女だった。俺はこれまでの夢が全部がらがらと音を立てて崩れてゆくような気がした。自棄のやんぱちで家を飛び出して遊廓に行くようになった。廓の女どもは金さえばらまけば、この世の極楽を見せてくれる。どんな優しい言葉も微笑みもそれは嘘だと知りながらも、俺はその偽りの生温（なまぬる）い幸せから抜け出すことはできねえ」

作蔵がついと動き、結衣の背後に回った。

「じっとしてな」

髪に手が触れるのが判った。結衣の不安とは裏腹に、作蔵はすぐに離れた。懐手をして、しげしげと結衣を眺める。

「うん、なかなか良い、よく似合う」

物問いたげな結衣の眼に、作蔵がニッと笑った。

「簪を挿してやったのさ」

その言葉に、そっと髪に手をやる。確かに蝶を象った簪が挿してあった。

「なあ、俺の夢と一緒に叶えちゃくれねえか？」

見上げれば、作蔵が眩しげに眼を細めて結衣を見つめていた。

「俺はお前のような娘を待っていたような気がする。顔が綺麗なだけじゃねえ、心の真ん中にこうピシッと芯が通っている。その癖、妙に優しいところがある。お前となら、子どもの頃から憧れた家庭を作って、真っ当に生きてゆけそうな気がするんだ」

作蔵の眼は真剣そのものだ。一時の気紛れだけに突き動かされて口にしていないことも理解できた。

けれど、出逢って日も浅く、まだ互いのこともろくに知らない間柄で求婚を受けられるはずがない。それに、作蔵には口が裂けても言えないけれど、何の罪もない蝶をいきなり捕らえて踏みつぶしてしまった彼のあの残虐さの印象が今も強すぎた。

今の彼はあのときとは全然違う。だが、作蔵という男がああいう残酷な一面を持つことは間違いない。そんな男と生涯を連れ添うなど、到底考えられない話だ。

結衣は一旦うつむき、顔を上げた。どう言えば、作蔵を納得し怒らせないように求婚を断ることができるのか。

背筋を冷たい汗が流れ落ちたのは、暑さのせいだけではないのかもしれない。結衣は小さく息を吸い込んだ。

「若旦那さまもご存じのように、美濃屋の旦那さまはご立派なお方です。世間では色んなことを言う者がいるようですが、旦那さまは若旦那さまのことを心から大切に思っていらっしゃるのが私には判るんです。若旦那さまは今は所帯を持つとかいう前に、旦那さまとじっくりとお話し

合いになって名実共に認められる美濃屋の跡取りにおなりになる方が大切なではありませんか？」

「おい」

低い声に、結衣は眼を瞠った。

「それは、どういうことだ！ 何で結婚してくれと口説いたら、親父の話が出てくる？」

作蔵の顔が怒りに紅く染まっている。結衣は身を強ばらせた。

「皆、親父、親父、親父だ！ 世間では皆が親父に同情してるんだ。出来損ないの倅を持った世にも優れた親父にな。だが、私はお前に求婚したんだぞ？ お前はせめてそれに対して、はぐらかしたりせず、きちんと応えるべきじゃないのか？」

「私一」

烈しい剣幕に、結衣は怯えを宿した瞳で作蔵を見上げた。

「済みません。若旦那さまを怒らせてしまったんですね。失礼を申し上げてしまったのなら、このとおり、謝ります。でも、若旦那さま、私はまだ結婚とか、誰かの奥さんになるということは全然考えたこともなくて」

「なら、考えてくれ！ な、今からでも考えれば良い。私はいずれ美濃屋の主人になる。お前は本店の内儀だぞ？ 悪い話じゃない」

作蔵の瞳が異様な光を放っている。そう、庭で蝶を捕らえて踏みつぶしたときと同じ狂気を宿した瞳が結衣を射貫いた。

「結衣、私はもうお前にぞっこんなんだ。私の人生はお前なしでは考えられねえ」

まだろくに何も結衣のことを知らないであろうに、この思い込みの烈しさは何なのだろう。憑かれたような瞳が切迫しており、結衣に迫ってくる。

一怖いっ。

結衣は思わず後ずさろうとし、その細い手首を作蔵が掴んだ。

「この近くに出合茶屋がある。そこに行けば、二人きりでじっくりと話ができるから」

この男は結衣を昼間から連れ込み宿に連れてゆこうとしている。出合茶屋がどういう場所かを知らぬほどのおぼこではない。冗談ではなかった。どんなに奥手だと笑われても、結衣は最初は大好きな心から想う男と結ばれたかった。

「止めて下さい。私は行きませんから！」

両脚を踏ん張り、連れてゆかれまいとするも、哀しいかな、大の男と娘の力では敵うはずもない。いつしか結衣は作蔵に腕を掴まれたまま、ずるずると引きずられるような格好になっていた。

「いやっ、放して」

結衣が叫ぶが、作蔵は少しも頓着する風はない。道行く人も揉め事に巻き込まれるのを怖れてか、知らん顔を決め込んでいる。確かに、そのときの作蔵は関わり合いになりたくないと思うほど常軌を逸していた。

「誰か、助けて下さい」

救いを求めて周囲を見回しても、眼が合うと皆、そそくさと視線を逸らし足早に通り過ぎる。いかにも若旦那風の身なりの良い男と下女らしい若い娘では、幾ら娘が嫌がろうと金持ちの好色息子に捕らえられた哀れな娘だと捨て置かれるのがオチなのかもしれない。

このままでは本当に連れ込み宿に引き入れられてしまう。結衣が涙の滲んだ瞳で更に周囲を見回した時、向こうから駆けてくる人影がぼんやりと映じた。

もしかして、私を助けてくれるの？

儂い希望を抱いた結衣の耳に、凜とした声音が飛び込んできた。

「まだ陽が高い中から天下の往来で嫌がる娘を攫うとは、そなた、たいした度胸だな」

涙の幕で霞んでよく見えないが、どうやら助けにきてくれたのは武士らしい。結衣は心底安堵した。いかに美濃屋の嫡男であろうと、お侍さまには敵っこない。

「お願い、助けて」

結衣の声に、若い武士が「もう、大丈夫、というように笑顔で頷いて見せた。

「何だ、しけた町役人の癖にでしゃばりやがって。俺の親父は天下の金を動かしてる美濃屋信右衛門だぜ？ 地獄の沙汰も金次第ってさ、親父の金と力があれば、ご公儀のご沙汰もひっくり返せるんだ。手前みたいなさんびんなんざ、すぐに首にしてやるぞ」

父親を嫌悪しながらも、逃げるときにはその父の威勢を笠に着る一、しかも信右衛門がお芙美の名誉を傷つけまいと金を使って死因を隠匿したことを堂々と暴露する。

最低の男だ。今日、束の間だけ作蔵の哀しい生い立ちに触れ、この冷酷な男の心の底にも人間らしい感情が流れているのだと思い直したばかりだったのに、これでまた作蔵を大嫌いになってしまった。

「言いたいことはそれだけか？ 美濃屋の若旦那。いや、馬鹿旦那、と言い換えた方が良いかな？ あんたの噂は町でもよく聞くよ。できた親父さんの顔に始終泥を塗りたくってる、とんだろくでなしの息子だってね」

侍は作蔵に近づくと、造作もなく手を捻り上げた。

「い、痛え」

その弾みに結衣の手を拘束していた作蔵の手が離れた。結衣は急いで作蔵から離れ、武士の背後に隠れた。

「くそう、結衣。逃げるな」

それでもまだ苦し紛れに結衣を睨みつける作蔵の手を更に侍が捻り上げる。

「一つ後学のために教えてやろう。女を口説くときは、あまりしつこくしすぎないことが肝要だぞ。しつこい男は嫌われる」

言い終わらない中に、侍は作蔵を突き放した。勢い余って、作蔵はその場に尻餅をついて転んだ。

「今度、この娘に狼藉を働いてみる。すぐにしょっぴいてやるからな。お前のご立派な親父どのは公正明大な人柄で知られてる。放蕩息子の尻ぬぐいにまで大枚を払ってくれるほど気前が良いかどうか、そのときはとくと見物させて貰うぜ」

作蔵の顔は憤怒のあまり、赤黒く染まっていた。そのぎらつく双眸が結衣を捉えた。

「このままで済むと思うなよ。私に恥をかかせた償いは必ずさせてやるからな」

侍が鋭い声を放った。

「まだ申すのか？ 衆人環視の中でか弱い女に無理強いしようとする方がよほど男として恥入るべき行為であると貴様はまだ判らんのか？ 本当に救いがたい大阿呆だな」

クッと、作蔵が唇を噛んだ。視線だけで人を殺せるなら、この時、侍も結衣ももろともに作蔵の視線に射殺されていたらろう。

「お前ら、今日のことを後悔するなよ？」

棄て科白を残し、作蔵は逃げていった。

「とんだ馬鹿旦那だな」

その声に、結衣は現に戻った。ハッと顔を上げ、深く頭を垂れた。

「ありがとうございます。お陰さまで、助かりました」

「いや、たいしたことがなくて何よりであった。怪我などはないか？」

心から気遣うような声音に、思わず涙ぐんでしまう。何より今になって恐怖が背筋を這い上ってきた。もし、この武士が助けてくれなければ、今頃、結衣は作蔵の思うようにされていたかもしれないのだ。

カタカタと華奢な身体を震わせる結衣を侍は心配そうに見ている。

「しばらく休んだ方が良さそうだ」

ついてきてくれと言われ、結衣は素直に侍についていった。彼が結衣を連れていったのは、その場所からさほど遠くない小さな甘物屋だった。

卓が三つあるきりの小さな店にはその時、若い娘の二人連れがいるだけであった。

姿の良い若い侍が女連れとあって、目立つらしい。若い娘二人がこちらを見ながら、ひそひそと囁き交わしている。特に男の存在が娘たちの熱い視線を集めているようだ。

侍は奥まった席に座り、結衣は向かい合う形で座る。ほどなく注文を取りにきた四十ほどの年増女が彼にからかうような言葉を投げた。

「まあ、北山さま。今日は随分と可愛いお連れさんがいらつしゃるんですねえ」

「煩い、余計なことを言うな」

北山と呼ばれた若い武士は仏頂面で応えている。彼は結衣には笑顔で言った。

「ここの店の汁粉はなかなかいける。内儀は口は悪いが、汁粉を作る腕は悪くない。気持ちが乱れているときは甘い物がいちばん効く。どうだ、食べてみぬか？」

「でも、お言葉に甘えるわけには」

結衣がおずおずと応えると、侍は破顔した。

「こう見えても俺は甘いものが大の好物でな。さりながら、むさい男一人で甘物屋に入るのはどうでも体裁が悪くて、なかなか入れぬ。今日はそなたと一緒にゆえ、入り易かった。これも人助けと思い、食べてくれ」

優しい男だと思った。ここまで言われれば、食べないわけにはゆかない。

「では、お言葉に甘えて頂きます」

結衣が頷くと、侍は笑った。

「そうこなくっちゃな」

早速、先ほどの女将を呼んで注文する。

「俺は熱々の汁粉を一つ。そなたは？」

結衣は小声で言う。

「私は冷たいのをお願いします」

「うむ、そうか」

頷き、それぞれ汁粉の熱いのと冷たいのを一つずつ注文した。

すぐに運ばれてきた汁粉はひんやりとして喉越しも良く、本当に美味しかった。侍は笑いながら言う。

「暑いときに温かい汁粉など食べるとは酔狂なとそなたは思うであろうが、これがまた格別に美味だ」

言いながら、男は懐から出した手ぬぐいでしきりに額の汗を拭いている。その様子がおかし

くて、結衣は思わずクスリと笑った。

その刹那、男と結衣の視線が交わった。恐らく動転していた結衣が初めてまともに彼の顔を見た瞬間かもしれない。

漆黒の瞳は男にしてはやや大きめで、くっきりとした目鼻立ちが印象的だ。間違いなく美男の部類に入るだろう。殊に紋付き巻羽織の着流しの同心姿がその容姿を引き立てている。

「北山さまは、お役人さまなのですね」

今更と思うような言葉しか思い浮かばないのは、この男に間近で見つめられて頬が熱くなっているせいだ。

「うん？ あ、ああ。まあ、まだ駆け出しの同心だがな。親戚が奉行所にいるのだ。本当は役人になぞ向いておらぬと断ったのだが、その人に是非にと乞われるとか勧められてやむなく」

「そうなのですか？ 北山さまにはお似合いのお仕事だと思いますのに」

言ってから、町人風情が出過ぎた言葉だったと後悔する。

「ご無礼を申しました」

「いや、それは恐らく褒め言葉だと思うゆえ、ありがたく受け取ろう」

北山は大真面目に言う。結衣は微笑んだ。

「私が難儀していても、どなたも助けては下さいませんでしたが、北山さまだけが駆けつけて下さいましたもの。お役人さまはやはり正義の味方なのだと思います」

「正義の味方か」

北山が呟き、吹き出した。

「綺麗なおなごに言われるのは、やはり嬉しいものだな」

くしゃりと端正な顔を崩して嬉しげに笑う。

しばらく他愛ない話をして店を出た時、北山がそれとなく言った。

「俺は北山源一郎。北町奉行所で定町廻りを務めている。そなたの名を訊ねても良いか？」

結衣は源一郎の漆黒の瞳を見つめ返し応えた。

「私は結衣と申します。美濃屋さんに奉公しております」

源一郎の眉がかすかに動いた。

「美濃屋、では、あの若旦那の家に奉公しているのか」

「はい」と頷く結衣に心配そうな声かけられる。

「奉公先を変えるというわけにはゆかぬのか？ あの男はそなたに相当執心していた様子、このまま大人しく引き下がっておれば良いが」

結衣は源一郎を安心させるように微笑んだ。

「私なら大丈夫です。それに、美濃屋さんには先月ご奉公に上がったばかりですし。間に立って紹介してくれた知り合いの顔もありますから、易々と奉公先を変えるわけにはゆきません」

源一郎が紅くなった。

「済まぬ。そなたにはそなたの事情があるというに、身勝手なことを申した」

結衣は首を振った。

「北山さまは私のことを心配して下さったのだと判っています」

源一郎が笑顔で言い添えた。

「もし困ったことがあれば、遠慮無く言ってくれ。俺で力になれることがあれば何なりと力になろう」

「ありがとうございます」

「俺は大抵、この近くの番所にいる。奉行所には怖いお歴々がひしめいているが、番所は書き役や岡っ引きの爺さんを相手にのんびりと世間話をしながら茶でも飲んでいれば良いからな」

これは内緒だぞ、と、しまいは悪戯っ子のように片目を瞑った。何故かその仕種に、胸の鼓動が速くなる。

「それで、どうだ？」

え、と、結衣が眼を瞠るのに、源一郎が期待満々といった顔で問うた。

「甘い物を食べれば、心が鎮まったであろう？」

まるで親に褒めて貰うのを待つ子どものような表情がおかしくて、結衣も笑った。

「はい、それはもうすっかりと落ち着きました」

「だろう？ そいつは良かった」

源一郎は頷き、片手を上げた。

「それでは気を付けて帰るのだぞ」

結衣は頭を下げ、源一郎は背を向けて人波の向こうに消えた。それが、北山源一郎との出逢い—互いにひとめ惚れだった。

戸惑い～うつろう刻の狭間で～

戸惑い～うつろう刻の狭間で～

その三日後、美濃屋を珍客が訪れた。突如として現れた若い同心に、美濃屋の番頭は狼狽えた。大抵、同心や岡っ引きがこういったお店を訪れるのはある目的があるからだと言われているからだ。

三十ほどの番頭に耳打ちされて同心の対応をしたのは、美濃屋でも最古参の大番頭茂吉であった。先代信右衛門の頃から仕え、美濃屋のことなら当代の当主信右衛門よりもよく知り尽くしているといわれる美濃屋の生き字引である。

既に六十路近い大番頭の髪には白いものが目立つが、立ち姿はかくしゃくとして若い者にはまだまだ負けぬという気概を漂わせている。

茂吉は心得た様子でまだ若い同心に頭を下げ、丁寧な物言いで訊ねた。

「お役人さま、いつも見回り、ご苦労さまでございます」

茂吉は懐から懐紙に包んだ小さな包みを取り出し、同心に渡した。

「ただ今、手前どもは取り込んでおりまして、大変ご無礼かとは存じますが、茶菓などのおもてなしができません。どうかせめて菓子などお持ち帰り下さいまし」

茂吉の言葉に、同心は瞠目した。

「これは」

言葉を失い、それから傍目にも気の毒なほどに真っ赤になった。

「済まん。俺は何もそういうつもりで訪れたのではない」

彼は役人らしくもなく、立ち上がると茂吉に一礼した。

「申し訳ない。拙者、北町奉行所の同心で北山源一郎と申すが、この店に結衣と申す娘がおると聞いて訪ねて参ったのだ」

通常、役人が大店を訪ねるとするのは、賄、つまり賄賂を寄越せという暗黙の要求である。大体、紋付き羽織着流しの同心がこれ見よがしに店先に居座っていたのでは、客はおちおち寛いで買い物もできない。それを見越して「見廻り」と称して彼らはしばしば商家を巡回する。

商家の方も心得たもので、こういう場合、できるだけ早く賄を渡して役人に帰って貰う。茂吉が勘違いしたのも無理はなかった。

茂吉は細い眼をまたたかせた。

「さようでございましたか。これは手前どもこそ、お見それ致しました」

同心は幾ら勧めても、最後まで賄は受け取らなかった。茂吉は今時、こんな若い同心もいるものかと清々しい想いで源一郎を眺め、彼を勝手口に案内した。

「お役人さまを裏にご案内するのは失礼とは存じますが、何分、表ではごゆっくりとお話することもできませんので」

と、番頭が説明した後、結衣が現れた。

源一郎に少し外を歩かないかと誘われ、結衣は躊躇った。

「黙って出かけるわけにはゆきませんので、女中頭さまにお伺いしてみます」

お登勢に許可を求めると、あっさりと許された。どうやら、男前の若い同心が結衣を名指しで訪ねてきたという知らせは既に美濃屋の奉公人の間に知れ渡っているようである。

「大人しげな顔をして八丁堀の旦那をたらし込むとは、たいしたものだ。首尾良くやりな。上手くいけば、あんたも晴れてお武家の奥方だよ」

と、言葉は悪いが、お登勢なりに激励をしてくれたらしい。

「それは違うのですが」

誤解だと言おうとした結衣の背をお登勢はバンバンと叩いた。

「何を照れることがあるのさ。なに、心配には及ばないよ。身分違いがどうかというのなら、この旦那さま、お内儀さんの養女にして頂けばよい。内儀さんは特にお前を気に入っていらっしゃるようだから、頼み込めば、それも無理じゃないと思うよ」

謹厳ではあるが、人の好い女中頭は陰ひなたなく働く結衣を気に入っていた。それ以上、誤解を解く気力もなく、結衣はお登勢の許しを得て一時美濃屋を源一郎と共に後にしたのである。

「どうもえらい誤解を受けてしまったようだ」

源一郎の開口一番に、結衣は大きく頷いた。

「そうですね、物凄い誤解です」

源一郎は眼をしばたたき、結衣を見つめた。

「何だ、そなたも誤解を受けたのか？」

そこで結衣は初めて自分たちの言う`誤解、が食い違っていることに気付いた。源一郎の誤解の所以を聞いた結衣は思わず笑ってしまった。知り合ってまもないけれど、彼が賄欲しさに商家を訪ねる強請紛いのことをするような人だとは思えない。

「それで、そなたの招いた誤解とは何なのだ？」

結衣は少し迷い、正直にお登勢の勘違いを源一郎に話した。彼も自分と同じく大笑いするかと思いきや、予想に反して彼は端正な顔に思慮深げな表情を浮かべた。

「そうか、そんなことを言われたのか」

源一郎があまりにも深刻そうなので、結衣は狼狽えた。

「済みません、お気を悪くしてしまったのですね」

自分のような町娘、美濃屋のような大店のお嬢さまであればともかく、しがない小商人の娘は前途有望な同心にはふさわしくない。それで、源一郎が機嫌を悪くしてしまったのかと思ったのである。

源一郎がフワリと笑った。

「いや、別に気を悪くしたというわけではない。俺がいきなり訪ねたことがそんな誤解を招いたのかと少し愕いただけだ」

源一郎の笑顔はどこまでも爽やかで優しい。何故なのだろう、この笑顔を見る度に、胸の動悸が激しくなる。もっとこんな笑顔を見ていたいと思ってしまう。

物想いに耽っている結衣の耳を、源一郎の声が打った。

「そなたのことが気掛かりでな」

結衣は弾かれたように面を上げる。源一郎が頷いた。

「町役人である俺が様子見に繁く訪れているということが知れば、あやつも少しは自重するだろうと思ってな」

「あやつ、が誰を指すのかは結衣にも判る。源一郎の気遣いがとても嬉しく、結衣は無邪気に笑った。その笑顔に源一郎がハッとした表情をし、眼を細めた。

結衣は思い切って言った。

「北山さま。今日は是非、ご案内させて下さい」

「ん？ どこかに連れていってくれるのか」

「はい」

結衣は元気よく頷くと、先に立って源一郎を案内するように歩き出した。

結衣が案内したのは浅草の水茶屋、つまり美濃屋の内儀おこうの実家だった。

店は葦簀(よしず)で囲った小さな一角で、夕刻には畳む。おこうの両親はいまだ健在だが、現在、店を営んでいるのは兄夫婦だ。両親はおこうが美濃屋に嫁いだ際、信右衛門が隠居所を建ててやり、そちらで悠々自適の日々を送っていると聞く。

「ここのわらび餅は美味しいですよ」

結衣が我が事のように自慢げに言うと、源一郎は笑顔で頷いた。

「俺は甘い物なら何でも好きだ」

「今日はこの間のお礼に、私をご馳走させていただきます」

源一郎が破顔した。

「そのようなことは気にするな。そなたのお陰で、気恥ずかしさもなくて甘物屋に入れたのだから、そのお礼だと思ってくれ」

しばらく押し問答を続けた末、今回も源一郎が支払うことになった。あまりに頑なに言い張り続けては、武士である彼の体面を傷つけてしまうことになりかねない。

「実はここのお店は美濃屋のお内儀さんのご実家なんだそうです」

打ち明けると、源一郎が眼を見開いた。

「そうなのか？」

「はい、だから、内儀さんもよく夏場には、わらび餅を拵えて私たち奉公人にまで振る舞って下さいます」

源一郎はしきりに頷いている。

「まさしく内助の功。美濃屋の主人は良き妻女を迎えたというわけだな」

更に彼は声を落として続けた。

「それで、若旦那の方はどうなった？ その後、そなたによもや無体を働こうとはしておらぬだろうな」

結衣は首を振った。

「それは大丈夫です。若旦那さまは普段、家にいらっしゃらないことの方が多いので。私も実のところ、あれからまともに顔を見ていないのです」

「良き後添えを貰ったとはいえ、美濃屋もなかなか気苦労が絶えぬな。さしもの大身代も肝心の跡取りがあればでは先行きが危ういものだ」

結衣も声を低めた。

「大きな声では言えませんが、美濃屋の旦那さまと若旦那さまは随分と前から対立しておいでのように。たまに若旦那さまがお帰りになったら、旦那さまとは喧嘩ばかりで、その度に内儀さんは心を痛めておいでで、気の毒で見えていません」

言ってから、肩を竦めた。

「奉公人が主家の内輪をこんな風に喋ってしまっっては駄目ですね。女中として失格です」

源一郎が苦笑した。

「いや、案ずるには及ぶまい。美濃屋の主人と跡取りが犬猿の仲なのは世間でもとうに周知のことだ。あの家は若旦那の実の母親が活着している頃から何かと揉め事が続いていたからな」

恐らくはお芙美の役者狂いやその挙げ句、事故死してしまったことなどを指すのだろうが、流石に結衣はそれについては相槌を打つのは控えた。

源一郎も特に返答は求めてはいないようで、すぐに話を変えた。

「いや、俺はその意味ではあの馬鹿旦那の気持ちも少し判るよう気がしてならぬ」

自分のことしか眼中にないあの身勝手な作蔵と源一郎では人間の出来が違う。何故、源一郎がそんなことを言うのかと結衣が小首を傾げると、彼はうす紅くなった。

「いや、その何とつかだ。俺にも出来の良い兄がいるんだ。俺は両親の晩年に生まれた子で、兄とは十六も歳が離れている。それでも、出来の良い兄と幼い中から比較され続けて、いやになったことが幾たびもあった。あやつも同じだと思う」

結衣は静かに問いかけた。

「若旦那のことですか？」

「ああ、と、源一郎がどこか遠い眼で頷く。

「作蔵も恐らくは出来の良い父親と比べられるのが嫌なのだろう。傑出した父親が大きな壁となって、あやつの前に立ち塞がっている。あやつはそれを越えられずに、無駄にさがいているのだろうよ」

源一郎は溜息をついた。

「そこで、あやつは考え違いをしている。無駄にさがこうとせず、何故、己れが偉大な父親をいかにしても越えられぬかをとくと考えてみれば良いのだ。見習うべきところは見習えば良い。そして、父親を超える大きな男になれば良い。とはいえー」

彼はそこでフツと笑う。その淋しげな笑いに結衣は愕いて源一郎を見た。いつも明るい陽溜まりのような男が初めて見せた翳りのある素顔だった。

「俺も偉そうなことは言えぬ。結局、若旦那と同じだからな」

「何故、そのように思召すのですか？」

源一郎がまた笑った。

「跡継ぎになれと兄に言われている」

「一」

無言の結衣に対して、源一郎は淡々と話を続けた。

「兄は早くに妻を娶った。俺の歳にはもう妻がいた。我が屋敷の用人を長らく務めた男の孫娘でな。嫁に行った娘の生んだ子ゆえ、町人であった。俺の父も母も当時はまだ健在で、この結婚には猛反対した。しかし、兄はその娘と添えぬのなら、家を棄てるとまで父に言い切った。結果、両親は不承不承、二人の結婚を認めたのだ」

源一郎が結衣を見た。

「世の中、上手くはゆかぬものだ。二人が祝言を挙げたのは兄が十八、兄嫁が十六のときであったが、今も子はおらぬ。恐らく子はできぬと医者からもいわれているようだ」

「だから、ご舎弟の北山さまをご後嗣にと兄君さまは望まれているのですね」

「兄が結婚した翌年、父が病で急死した。その翌年には母までもが後を追うように亡くなった。私は四歳から兄夫婦の許で育った。真実、兄夫婦が両親のようなものなんだよ」

結衣は控えめに言った。

「お武家さまとは大変なものなのですね。私のような一介の町人には窺い知れぬ世界だと判りま

した」

源一郎がいつもどおりの優しい笑みを浮かべた。

「周囲はずっと義姉を離縁して若く健やかな妻を娶るようにと兄に意見してきた。さりながら、兄は一切耳を貸さない。俺にもいつか言っていた」

「私は芳野を愛しておるゆえ、たとえ子が出来ずとも生涯添い遂げる。

「惚れに惚れて迎えた妻だ。兄の覚悟を俺は男として素晴らしいと思う。だが、それと自分が家督を継ぐのとはまた別の話だな。俺は次男坊だから、堅苦しいことは嫌いだ。兄夫婦にも自由にさせて貰ってきた。旗本の次男なぞ、冷や飯食いといって単なる厄介者に過ぎぬ。それなりの家の主(あるじ)になりたいなら、さっさと家を出て、どこぞの婿養子になるしか道はない」

源一郎が結衣を見た。

「俺は婿養子という質ではない。それも自分で判っていたゆえ、生涯独り身でもよいと思うていたし、武士の身分に拘るつもりもなかった。それが何の因果か、奉行所務めなぞするようになったのだ」

結衣の心で思い当たる節があった。

「では、北山さまに奉行所勤めをお勧めになったのはお兄さまなのですね」

今度は源一郎は笑って頷いた。

源一郎の打ち明け話に、結衣は愕いていた。同心といえば結衣のような町人からは偉い役人に思えるけれど、平の同心が幕府から賜る扶持はたかだか知れている。だが、実兄が旗本というからには、源一郎もかなりの格式を誇る旗本の子息なのかもしれない。

奉行所の上役だという兄もそれなりの役職についているのだろう。

一本当なら、この方は私のようなその日暮らしの町娘がお話もできないような人なのかもしれない。

何故か、そう思うと心が沈んでゆく。

そんな結衣の心を見透かしたかのように、源一郎が言った。

「済まぬ。つまらない話を聞かせた」

結衣は微笑んだ。

「いいえ、北山さまのことを色々とお聞かせ頂いて、嬉しうございました」

言ってから、これは少し言い過ぎで、はしたなかったかと頬を赤らめた。

源一郎は弾んだ声音で言った。

「まあ、明日の風は明日に吹くだな。今から遠い将来のことを考えてばかりいても仕方ない。正直言えば、親代わりに育てて貰った兄夫婦に報いるためには、俺が家督を継ぐしかないのだろう」

どこか諦観の滲んだ声音に、結衣は頷くしかない。お登勢の勘違いなど、とんでもなかった。町娘が同心の妻になるというだけでも夢のまた夢なのに、れきとした旗本のお殿さまの奥方になって、あまりにも分不相応すぎる夢だ。そんな夢を見たら、仏罰が当たるだろう。

源一郎が結衣の気を引き立てるように言う。

「うむ、なかなかいける。結衣の申すとおりの、ここのわらび餅は絶品だな」

美男が口中にわらび餅を頬張っている姿はなかなか見物ではあった。結衣が思わず忍び笑いを洩らすと、彼が不思議そうに訊いてくる。

「俺の顔に何かついているか？」

「いいえ」

笑いを堪えて応える結衣に、源一郎が更に言い募る。

「正直に言ってくれ」

「では」

と、結衣は右頬の辺りを押さえた。

「この辺りに、きな粉がついております」

彼は滑稽なほど慌てて、懐から手ぬぐいを出して、しきりに何もついていない右頬を拭った。

「これで良いか？」

「いいえ、まだ、たんとついております」

とうとう笑いを堪え切れずに弾けたように笑い出すと、漸く源一郎が気付いた。

「無礼なヤツめ、さては純真な俺を騙したな」

「純真かどうかは判りませんが」

結衣は笑い転げつつ、白状した。

「元から北山さまのお顔には何もついていませんでした。あまりに慌てられるので、つい嘘をついてしまったのです」

「そなたは男心の判らんヤツだ。男は好いたおなごの前では良い格好をしたいと思うだろうが」

丁度、水茶屋を手伝っている赤ら顔の娘がお茶のお代わりを置いていったばかりだった。冷たいわらび餅に温かいお茶を出すというのが店の拘りらしい。現に美濃屋でも、おこうは必ずよく冷やしたわらび餅と温かいお茶を奉公人たちにもふるまっていた。

見映の良い若い同心に十八ほどの娘はちらちらと未練がましい視線を投げてゆく。娘の置い

ていったお茶を飲もうとした結衣は思わず噎せてしまった。

「え、今、何と」

大きな眼を見開いて見つめる結衣に、源一郎は耳まで紅くなった。

「だから、そのだな。俺は結衣が好きだ。そなたに惚れたのだ！」

結衣はあまりにも予期せぬなりゆきに、呆気にとられた。源一郎が自棄になったようにふて腐れていった。

「俺が好きだと告白したことが、そんなに珍しいのか！」

「いいえ、そうではありません」

結衣はもうひと口だけ生温いお茶を飲み下し応えた。

「嬉しくて。あまりに嬉しくて」

言い終わらない中に何故か涙が溢れた。ポロポロと大粒の涙を流す結衣に、今度は源一郎が慌てふためく番だった。

「何故、泣く？ 嬉しいのなら、泣くことはあるまい。それとも結衣は真は俺が嫌いなのか」

狼狽える源一郎を前に、結衣は大きくかぶりを振る。

「いえ、結衣は心底から嬉しいのです。だから、涙が出るのです」

「はて、女の心というものはよく判らん。女は哀しいときだけでなく嬉しいときも泣くものなのか」

弱り切った源一郎、これまでさんざん汗を拭った手ぬぐいで結衣の頬に流れ落ちる涙を拭いてくれる。

「だが、泣くな。俺はどうも女の涙は苦手だ。惚れた女の涙なら尚更、どうして良いか判らぬ」

「申し訳ありません」

狼狽える源一郎を前に良い加減に泣き止まなければと思う傍から、涙は堰を切ったように溢れてくる。

「頼むから、泣き止んでくれ」

涙をせっせと拭いている源一郎と結衣を赤ら顔の娘が嫉妬と羨望に満ちた顔でボウと眺めている。娘は奥から女将に叱責され、慌てて新たな客の注文を取りに走った。

その日を境にして、結衣と源一郎はゆっくりと恋を育んでいった。源一郎が美濃屋の勝手口まで迎えにゆき、二人肩を並べて江戸の町をそぞろ歩く。その中に美濃屋では源一郎のことを「お結衣ちゃんの良い男、と呼ぶようになり、そろそろ逢う日が近づくと、朋輩女中たちが一そろそろあんたの良い人がお迎えにくるよ。

と、冷やかすようになった。つまり、北町奉行所定町廻同心北山源一郎と結衣が想い人であるということは美濃屋主人夫妻も公認となったのである。

季節はいつしかうつろい、源一郎とめぐり逢ってからはや三月(みつき)が経っていた。霜月の五日、結衣は彼と誘い合わせて随明寺に詣でた。

随明寺は黄檗宗の名刹で開祖は浄徳大和尚。京都の万福寺を開いた隠元隆琦の高弟の一人である。時の將軍家から紫衣を許されるほど徳の高い僧侶であったが、市井で民と共に生きることを選び、布教だけでなく自ら喜捨を募り江戸の土木工事などに従事し、生涯を衆生のために捧げた未曾有の高僧として今もその威徳を語り継がれている。

広大な墓地には金堂を初め、三重ノ塔や閻魔堂、絵馬堂、僧堂など諸伽藍が点在し、最奥部には浄徳大和尚を祀る奥ノ院があった。境内地の隣にはこれまた広大な墓地が併設されている。

毎月五日には縁日市が催され、広い境内はあまたの露店で埋め尽くされ、大勢の参詣客で賑わう。殊に十月五日は浄徳大和尚の祥月命日ということで、「大祭」と呼ばれ大がかりな法要が営まれる。

金堂では百人近い僧侶が集まり読経し、その後、紅白の餅が僧侶たちにより金堂の回廊から参詣人に向かって、ばらまかれる。あまたの餅の中に「福」、「寿」、「浄」、「徳」と四つの文字が入っているものがあり、それらを得た者はその年一年の幸福が約束されるといわれていた。

奥ノ院の傍らには通称「大池(おおいけ)」と呼び習わされる巨大な池が横たわり、到底人工の池とは思えぬ池は満々と水を湛えている。その汀には桜並木と楓の樹が植わっており、春には江戸名所図絵にも載るほどの江戸の花名所となり、秋には美しく池辺を彩る紅葉を愛でる人々の眼を愉しませた。

奥ノ院に至る途中には絵馬堂がある。小さな朱塗りの鳥居の向こうに百度石が続き、小さな御堂がひっそりと建っているそこは、芸能と恋愛の神さまとして知られていた。実際、小さな御堂の正面格子扉には無数の絵馬が掛けられていて、何かそれらから不思議な力を感じるようでもあった。

その日、結衣と源一郎もまずは金堂でお参りしてから、絵馬堂に立ち寄った。誰が掲げたのかは知らねど、とうに古びた幾多の絵馬たちには奉納した人々の切なる願いや祈りがこめられている。見つめていると、自然に敬虔な一頭が下がるような気持ちになる。一源一郎さまといつまでも一緒にいられますように。

結衣はひそかに祈りを籠め、賽銭を箱に入れて手を合わせた。傍らの源一郎も何やら熱心に祈っている。

そのまま二人ともに黙って大池のほとりまで歩く。春の桜の時季はそれこそ花見客でごった返すこの場所も秋の今はさほどでもない。時折、紅葉狩りに訪れた人とすれ違うくらいのものだ。

風もないのにはらはらと赤児の手のひらのような紅葉が舞っている。舞い落ちた紅葉が水面を

飾り、大池の水面はさながら金糸で紅葉模様を縫い取った美しい布のように見える。

ゆっくりと水面を漂う紅葉を眼で追いながら、結衣はつい考えてしまう。

源一郎さまは何を祈ってらっしゃったのしから。

そこは恋人同士、思うことは同じであったようだ。結衣が口を開きかけたのと源一郎が何か言いかけたのはほぼ時を同じくしていた。

「あの」

「実は」

二人は顔を見合わせ、しばし見つめ合う。それからプッと吹き出した。

「俺が何を言いたいか、結衣には判るか？」

結衣は悪戯っぽく笑った。

「では、源一郎さまは私の考えていることがお判りになりますか？」

「質問に質問で返すのは卑怯だぞ。では、まず結衣から申してみるが良い」

いつになく勿体ぶった言い方に結衣はひそかに苦笑を零す。

「私は考えておりました。源一郎さまが絵馬堂で何を一心に祈ってらっしゃったのかと」

源一郎がやや濃いめの眉をつり上げた。

「俺もだ。同じことを考えていた。あんなに一生懸命な顔をした結衣を見たことがない。何ゆえ、そこまでひたむきに祈るようなことがあるのかと気になっておった」

「つまり、私たちはまったく同じことを気にしていたのですね」

「そういうことになるな」

そこでまた二人は微笑み合った。

「それでは」

源一郎がまた鹿爪らしい表情で言った。

「二人同時にその応えを言うというのは、どうだ？」

まるで子どもだが、結衣は真面目に頷いた。

「よし、では、一、二、三で応えよう」

一、二、三と源一郎が数える。三のところで、二人とも口を開いた。

「私は源一郎さまとずっと一緒にいられますようにとお祈りしておりました」

「俺は結衣がこの先もずっと俺の傍にいて欲しいと願っていた」

言い終えた時、源一郎の漆黒の瞳が無心に結衣を見つめていた。

「俺はその言葉を信じてもいいのか」

「一」

かすかに頬を染めて頷くと、そっと引き寄せられるのが判った。引き寄せられままに男の逞しい胸に身を預ける。

「好きだ。いや、もう、そんな言葉では足りない。愛している。結衣、妻になってくれ。そなたのことは兄上にも話している。兄上自身が身分違いの恋の末に結婚した人だから、その点は理解があるんだ。一度屋敷にも連れてくれば良いと仰せだし、義姉上もそなたに逢うのを愉しみにしている。もし上手くゆけば、来年中には祝言を挙げたい。承知してくれるか？」

「一そんな、私のような者で本当に良いのですか？」

信じられなかった。あまりの幸運に頬をつねりたいくらいだ。自分が源一郎の妻になれるなんて一願ったこともない。

ただ今のままで、大好きな男の傍に少しでも長く居られたらと思うばかりで、身分違いのこの恋は消して成就することはないのだと思い込んでいた、諦めていた。

「私のような者などと二度と申すな。俺はお前でなければならぬのだ。結衣以外の女など欲しくはない。町方から武家に嫁ぐのは色々大変ではあろうが、義姉上も町方の出だ。そなたは賢いゆえ、きっと数々のしきたりにも慣れて上手くこなすに違いない」

「源一郎さま、私、本当に嬉しくて」

感情が言葉についてゆけず、気持ちを上手く伝えられないのがもどかしい。語りきれず溢れた想いは涙となった。

源一郎の整った面に狼狽が走る。

「ああ、また泣く。そなたは泣き虫だな。そなたの泣き顔には弱い俺には、これは困ったところだ」

結衣が涙を拭いながら言った。

「源一郎さまがおいやなら直します」

フッと源一郎が笑んだ。

「結衣は可愛いことを申すな。そんな可愛いことを申したら、俺が祝言まで待てなくなるぞ？」

最初は彼の言葉の意味を計りかねた結衣だったけれど、しばらくして白い頬に朱が散った。

源一郎が優しい眼で結衣を見た。

「私の傍にるのが嬉しいと申して泣いてくれたそなたの涙を忘れぬ、幸せにする。こんな男だが、俺についてきてくれ」

結衣はまだ涙の滲んだ瞳で源一郎を見上げた。

「源一郎さまは先ほど私に『私のような、と言ってはならないと仰せでした。ならば、源一郎さまもご自身のことを『こんな男、だなんて言わないで下さい。源一郎さまは結衣にとっては日本一のお方です』

「こいつめ、申したな。だが、今度ばかりは結衣に一本取られた」

源一郎の手がそっと壊れ物のように結衣の頬を包む。仰のけられた顔に彼の端正な顔がゆっくりと近づいてきて、唇が重なった。それは蝶の羽根が掠めるような軽い口づけだった。源一郎は更に結衣の額にも同じように軽く口づけてから離れた。

上気した結衣の額に落ちた前髪に愛しげに触れ、源一郎が囁いた。

「早く祝言を挙げよう。兄上にも申し上げて、そなたを屋敷に連れてくる段取りを進める。できるだけ早く対面の場を設けるようにするよ」

それから二人はまた並んで奥ノ院を通り、来た道を逆に金堂まで戻った。絵馬堂を過ぎれば、今度は閻魔堂が見えてくる。死者があのに逝き、閻魔大王の裁きを受け極楽に行くか地獄に行くかを絵物語風に描いた壁が圧巻の閻魔堂だが、その絵を描いた絵師の名は伝わっていない。

それぞれの場面が板に描かれ順番に並んでいる。一説によれば、絵師は江戸の町が大火に包まれた際、その様子をつぶさに写し取り、それを焰魔堂地獄図絵の下絵に使ったといわれる。皆が悲鳴を上げて迫りくる焰から逃げ出す中、たった一人逃げもせず紅蓮の焰を見つめ続け一心にそれを写し取っていた絵師の姿を思う時、その執念には空恐ろしいものさえ感じる。

けれど、そのような気迫があったからこそ、閻魔堂の壁の地獄図絵は鬼気迫るほどに克明に描かれ見る者を圧倒するのだろう。地獄に堕ちて劫火に灼かれる亡者の姿は、まさに真の地獄を見た者にしか描けない臨場感があった。

金堂の前まで戻ってくると、たくさんの露店がひしめいている。大祭は先月に終わったばかりで、そのときの賑やかさに比ぶべくもないが、それでもあまたの店が軒を連ね、参詣人が思い思いに店を覗いている。

江戸の空は晴れ渡り、十一月にしては温かな昼下がりである。少し歩けば、うっすらと汗ばむほどの陽気だ。ふと秋の風が身の傍を駆け抜けた。この陽気では、秋風も心地良いと思える。

ふいにシャランシャランと涼やかな音色が響き渡った。音の聞こえてくる方を見やると、透き通った硝子細工のたくさんの風鈴が一斉に鳴っている。

「この季節に風鈴とは珍しいな」

季節感を言うなら秋に風鈴とはむしろ興ざめともいえるのかもしれないが、源一郎の性格は違う。むしろ「かえって趣がある、と、良い方に解釈してしまうような男だ。結衣は源一郎のそういうところが好きだった。

「行ってみても良いですか？」

問えば、すぐに頷いてくれた。近づくと、涼やかな音はなお耳に心地良く聞こえる。

「秋に風鈴とはなかなか乙なもんだな」

風鈴を商っているのは二十代後半のまだ若い男だった。源一郎が声をかけると、顔を上げる。精悍な陽に灼けた貌に人懐っこい笑みが浮かんだ。

「お武家さまはなかなか話の判るお人でやすね。大概の人間は無粋だとか言って素通りをしてしまうんですが」

「まあ、世の中、そんなもんだろうな」

源一郎は頷き、店主に問うた。

「しかし、何故、この季節に風鈴を売るのだ？」

店主は破顔した。

「特に理由なんぞありやせんよ。良い品だと思うから、売る。それだけです。まあ、仰せの通り、この季節に風鈴を買うような酔狂な客はなかなかいませんがね」

源一郎が笑った。

「それでは、俺がその酔狂な客になろう。その風鈴を一つくれ」

棒にたくさんの風鈴がかかっている。紅、紫、蒼、緑、様々な色にくっきりとした模様が規則正しく刻み込まれていた。

「へえ、ありがとうございます」

源一郎が選んだ風鈴を男が取り、紙に包んだ。源一郎は錢入れを懐にしまいながら言う。

「これは江戸切り子だな」

「へえ」

江戸切り子とは硝子に切り子細工を施したものだ。透明な鉛ガラス（透きガラス）に鑪や金棒と金剛砂によって切り子細工をし、木の棒等を用いて磨き行った手作業による手摺り工程による細工を用いて制作されたものと考えられている。

「その他には、どのようなものがある？ よもや風鈴だけ売っているわけではなかろう」

更に問えば、店主が自分の横を示した。低い台には切り子細工の湯飲みが所狭しと並んでいる。

「ホウ、湯飲みも売っているのか。こちらが本命だな」

ではと、もう一度錢入れを取り出した。

「湯飲みを二つくれ」

店主が源一郎と傍らの結衣を交互に見た。

「そちらの娘さんがお使いに？」

源一郎が頷くと、男は片隅から二つの湯飲みを取ってきた。両手のひらに乗せて説明する。

「これは夫婦湯飲みです。差し上げますので、良かったら、お二人でお使い下せえ」

大きめの湯飲みは深い藍色、少し小さめの湯飲みは愛らしい薄桃色だ。どちらも精巧な模様が刻み込まれている。今の季節に因んだ菊だろうか。

「さりとして、それでは儲けにならぬだろう」

源一郎の言葉に、男は真顔で言った。

「この季節に風鈴を見て風流だと言って下さったのはお侍さまが初めてでさあ。どうも生涯忘れられねえ日になりそうなので、これは俺からのお礼だと思って受け取って下さいませんか？」

「うむ、それではかたじけなく頂こう」

源一郎は礼を言って店主が包んでくれた二つの湯飲みを受け取った。

「どうぞお幸せに」

店主は源一郎と結衣の関係を正しく見抜いているようであった。ふと源一郎が脚を止め、店主を振り返った。

「そなたには妻女はいるのか？」

男の生真面目な顔がそのときだけ嬉しげに輝いた。

「へえ、五年前に一緒になった女房と今年の春に生まれたガキがいまさあ。なかなか子どもに恵まれなかったんですが、女房がここでお百度を踏みましてね。ご利益があって、やっと生まれました」

「そうか、子は男か女か？」

「女の子です、名はみつといいます」

「それは良かった。可愛い女房と娘を大切に」

「ありがとうございます」

男が頭を下げ、源一郎は今度こそ背を向けた。背後でシャランシャランと一斉に風鈴が鳴っている。源一郎の後について歩いていると、彼が唐突に言った。

「結衣、今日の湯飲みは祝言を挙げたら、二人で使おう。風鈴は来年の夏、新居に飾るんだ」

「新居、ですか？」

茫然として訊ねる結衣に、彼は笑って頷いた。

「そうだ、俺たちが晴れて世にも認められた夫婦となって暮らす住まいにこの風鈴を真っ先に飾ろう」

「本当にそんな日が来るのでしょうか、幸せ過ぎて怖いくらい。まだ信じられません」

偽りのない今の気持ちだった。こんなにも幸せで良いのかと思ってしまう。自分が武家の奥方になるなんて、まるで夢のような話だ。確かに現実のはずなのに、何故か遠い夢の出来事のような気がしてならない。

源一郎が少し怖い顔になった。

「俺がそなたでなければならぬと言っている。その言葉以外に一体、何が必要だというんだ？ 結衣、そなたは少し自分の価値を少なく見積もりすぎている。器量、気立て、聡明さ、何を取っても結衣に勝るおなごはなかなか見つけれぬぞ。そなたには幸せになる資格がある。自分にもっと自信を持て」

「そう—ですね。源一郎さまのお言葉を結衣は信じます」

「それで良い」

源一郎が嬉しげに笑えば、結衣も嬉しい。二人は仲睦まじげに肩を並べて歩いた。

その月も終わり、師走になった。いよいよ今年もあとひと月で終わる。美濃屋でも何とはなしに慌ただしい雰囲気になり、気の早い女中頭のお登勢は女中たちに命じて早くも大掃除を始めている。

もっとも美濃屋は広いから、この時期から大掃除を始めてもまだ大晦日までにはすべて終わらない年もあるのだと、これは一つ年上の朋輩から聞いた話だ。

暦が師走に変わって五日め、結衣は再び町人町の京屋まで遣いに出された。もちろん、内儀おこうの言いつけである。今回は、おこう手製の花びら餅を届けにゆくのだ。

今回も京屋の内儀お彩が直々に応対して、何と座敷に通されて茶菓まで頂くことになってしまった。すっかり恐縮した結衣にお彩はお礼にとおこうへの「いわ藤、のみたらし団子の他に、奉公人一同で食べるようにと同じものをもうひと箱持たせてくれた。

「いわ藤、は日本橋でも有名な和菓子屋だ。奉公人にはなかなか入りにくいような高級な店だから、皆、さぞ歡ぶに違いない。持ち帰った結衣としても嬉しいことだ。恐らく人の心の機微を見るのに長けたお彩はそこまで一他の奉公人たちの手前、結衣の体面まで考えて用意してくれたに違いない。

流石は江戸随一と謳われる大店京屋の内儀だけはある細やかな心遣いに、結衣は打たれた。

昨日、美濃屋の奉公人たちは、おこうの作った花びら餅を頂いた。花びら餅は名前のごとく春の菓子だけれど、薄紅色の花びらを象った可愛らしい饅頭を見ていると、ひと脚先に心に春が来たようで、特に女たちは舌鼓を打ちながら美味な菓子を手に思い思いに話に花を咲かせたのだった。

京屋を出て目抜き通りを歩いていると、行き交う人たちが眼に入る。師走に入り、通行人も気忙しそうに急ぎ足で歩いているように見えるのは気のせいだろうか。

「大小掛け軸、暦、暦は要らんかねー」

向こうから声高に呼び声を上げているのは暦売りだ。結衣はふいに手を上げて暦売りを呼び止めた。

「おじさん、一つ下さいな」

父の喜助ほどの初老の男は背負っていた木箱を下ろし、様々な暦を見せてくれる。結衣はその中から小さな掛け軸様になった安価なものを一つ買い求めた。

表紙をはぐってみると、一枚目は富士山の絵と昇る朝日が多色刷りで美しく描かれている。

「これが睦月」

声を出して一枚、一枚とめくってゆく。ふと六月で手が止まった。六月、この頃にはもしかしたら、随明寺で二人して買ったあのギヤマンの風鈴を新居に飾っているだろうか。

結衣は恍惚りと眼を閉じた。軒下に下げられた紅い江戸切り子の風鈴が涼やかな音色を立てる。夜には勤めから帰った源一郎を出迎え、結衣の手料理を食べながら夫婦湯飲みで茶を飲む一。

その幸せな夢は聞き覚えのある声によって中断されることになった。

「結衣、そのようなところで何をしている？」

結衣は眼を見開き、振り返った。

「源一郎さま」

通りの向かい側にいる源一郎に向かって微笑む。源一郎は行き交う人波を器用によけながら、身軽に通りを横切り結衣の傍に駆けてきた。

「美濃屋の内儀さんの遣いで京屋さんまで来た帰りだったんです」

結衣は手にした暦を源一郎に見せた。

「そうしたら暦売りを見かけて、買ってしまいました」

「暦か、そうだな、もう今年もそろそろ終わるものな」

源一郎は結衣から受け取った暦をパラパラと捲ってから返してきた。

「源一郎さま、こんなことをお願いしたら、ご不快に思われるかもしれませんが、この暦を新居に飾っても良いでしょうか」

「一」

源一郎は最初、ポカンとしていた。結衣は慌てた。

「ごめんなさい。私ったら、幾ら何でも凶々しすぎました」

紅くなり涙ぐんだ結衣に源一郎が我に返った様子で取りなした。

「いや、そうではない。そなたが俺たちの未来についてそこまで積極的に考えてくれていて知り、その何というか嬉しくてだな」

源一郎が耳許で囁いた。

「人眼がなければ、抱きしめてやりたいくらいだぞ」

そのひと言に結衣の顔が真っ赤になった。源一郎の吐息が触れた耳朶が何故か熱い。その熱は結衣の身体に次第にひろがり、いつしか身体全体が微熱を帯びたように熱くなった。

自分の変化に戸惑っていると、源一郎の方はもういつもの沈着さを取り戻している。ちょっとしたことに狼狽えたり胸時めかせているのは、自分だけなのだろうか。結衣は彼の眼に自分がいつもと変わらなく見えることを祈るしかなかった。

「これから少し寄るところがある。なに、すぐに終わる。その後で蕎麦屋にでもゆこう。美味しい蕎麦を食べさせる店を最近、見つけたのだ」

「判りました」

素直に頷き、彼に従って歩く。直に目的地に着いたらしく、源一郎の歩みが止まった。

眼の前にひろがるのはかなりの大店らしく、構えも大きい。美濃屋ほどではないけれど、`越後屋、と紺地に白で染め抜いた暖簾が冬の風に揺れていた。だが、その様子は尋常ではなかった。越後屋に、物々しい様子で人が出たり入ったりしている。少し離れて物見高い野次馬と思しき連中が越後屋を眺めている。

刹那、結衣の中で警鐘が鳴った。

「何が一あったのですか？」

声が震えないようにするのに苦労した。源一郎は結衣のそんな変化を怯えと取っ払らしい。結衣の肩を抱くと、優しく囁いた。

「済まん。やはり、そなたをこんな場所に連れてくるのではなかった」

「何があったというのですか！？」

いつもの結衣らしくなく、叫ぶように問い詰めた彼女に源一郎は少し眼を瞠った。

しまった、と、結衣は唇を噛みうつむいた。

「申し訳ありません」

源一郎が首を振った。

「いや、押し込みの現場なんぞにいきなり連れてこられたら、若い娘なら誰でも怖がって当然だ。俺の配慮が足りなかった」

結衣は茫然と呟いた。

「押し込み一」

「ああ、昨夜、くちなわの伊助、一味が越後屋に押し入ってな。哀れにも一家は主人夫婦から下は幼い丁稚まで皆殺し、しかも切り刻まれての惨殺だ」

突如として、子どもの泣き声が響き渡り、結衣は身を強ばらせた。源一郎の声が結衣の耳を打つ。

「主夫婦には三人の子どもがいた。いちばん下の跡取りはまだやっと一歳の誕生日を迎えたばかりだったそうだ。その赤児は主夫婦と共に眠っていたゆえ、共に惨殺された。上の二人の娘たちだけは母方の祖父母の許に遊びにいて助かった」

二人の幼い娘たちが身を寄り添わせて泣いていた。二人ともに蹲って店の前で泣いている。その時、越後屋の中から戸板が次々に運び出されてきた。店の者すべてが殺害されたというのだから、その数が多いのも当然だ。

泣いていた娘たちが立ち上がり、その中の続けて運ばれる二つに取り縋った。上から箆がかけられているため、亡骸の様子は判らない。だが、娘たちが取り縋っているのが間違いなく両親、越後屋夫妻の亡骸だろう。

「おとっつあん、おっかさん」

上の娘が漸く七つ、下の娘に至っては五歳になっていないのではないか。そんな幼い姉妹がふた親の骸に取り縋って泣きじゃくっている光景はたとえ地獄の鬼でも涙せずにはいられないほどの哀しみを誘った。

それまで声高に高みの見物を決め込んでいた群衆の中からもすすり泣きや念仏を唱える声がひっきりなしに聞こえた。

「あー」

結衣の脚はその場に縫い止められたかのように動かなかった。幼い二人の娘の泣き声が心を引き裂くようだ。ふと姉の方が顔を上げた。可哀想に小さな顔は真っ赤で、泣き腫らした眼は腫れ上がっていた。

結衣の中で、その泣きじゃくる幼い娘の顔が美濃屋の娘おゆみと重なった。一盗みに入るということは、こういうことなのだ。

その瞬間、結衣の心に去来した想いは何だったのか。盗みが悪いこと、罪だという意識よりは、ただ自分がこれからしようとしていることは美濃屋すべての人々を不幸にする、ただそのこと一つを確信しただけだった。

源一郎の声がどこか遠くから響いてくるようだ。

「酷え話さ。くちなわの伊助といえば、その名のとおり、一度狙った獲物は逃さねえ執念深い野郎だ。数ある盗っ人一味の中でもとりわけ残忍さで知られる質の悪イ盗賊集団よ。越後屋もそんな一味に眼を付けられるとは気の毒なことだぜ」

「あの幼い姉妹はどうなるのですか？」

訊かずにはいられなかった。源一郎は溜息混じりに言った。

「まあ、母親の里方は日本橋で堅い商いをやっている海産物問屋だというから、恐らくはそこに引き取られることになるだろうな。幸いなことに、祖父母はまだまだ壮健だし、跡取りの叔父夫婦には子がいねえ。まあ、大切に育て貰えるんじゃないか」

「そうなのですね」

結衣は小さく息を吐いた。あの幼い姉妹に身を寄せる場所があるというのがせめてもの慰めに思えた。

源一郎の傍に岡っ引きが走ってきた。

「旦那、ひととおり現場の検分は終わりやした。亡骸はひとまず番所に運びます」

初老の岡っ引きは俣八(またはち)といい、腕利きの親分として知られている。弱い者や女子どもには滅法優しいが、極道には鬼のように怖れられているという話だ。

結衣も源一郎と一緒に何度か顔を合わせたことはあるけれど、直接言葉を交わしたことはなかった。

眼光鋭い岡っ引きがチラリと結衣を見た。

それだけで結衣ははや、この老練な岡っ引きに引き込みだと思われているような気がしてしまう。思わず眼を背けると、俣八は興味もなさそうにすぐに結衣から源一郎に向き直った。

「ご苦労だった。俺はひとまず昼でも食べてから、番所に戻る」

「へえ、それじゃ、あっしは先に番所に戻ってまさ」

俣八は一礼して駆けていった。

越後屋を出てから結衣も源一郎も口を開かなかった。町人町を抜け和泉橋まで来た時、源一郎が立ち止まった。

「今日は本当に済まなかったな。そなたにまで辛い想いをさせた」

江戸の町外れを流れるささやかな川を人呼んで和泉川という。本当は別の名前があるのかもしれないが、いつしか誰かがそう呼ぶようになった。

その川に掛かる小さな橋を和泉橋と呼ぶ。町人町はその上手(かみて)にひろがる商人の町であった。裏腹にその橋を下手に渡れば、和泉橋町と呼ばれる閑静な武家屋敷町がひろがる。和泉橋のたもとには老中松平越中守の宏壮な屋敷が見え、その他にも大身の旗本や大名の上屋敷、下屋敷が居並んでいる。

小さな橋一つがまさに活気溢れる町人の町と静かな武家屋敷町を隔てているのであった。和泉橋を渡った者は一瞬、この世でありながら別世界に行ったのかと錯覚しそうになる。それほどに町人と武士の町は様相を異にしていた。

この界隈は昼間でも殆ど人通りはない。夜ともなれば、更に人気はなくなり、犬の子一匹さえ

見かけなかった。

結衣は何とか微笑もうしたけれど、果たして源一郎の眼にどう映じたかは判らない。案の定、彼はすっと結衣に近づき、そっと引き寄せた。

「可哀想に、こんなに震えて。そなたが誰よりも心優しい娘だと知りながら、俺はこの世の地獄を見せてしまった」

額に軽い口づけを落とされ、髪の毛を愛しむように撫でられる。

刹那、結衣は叫び出しそうになった。

一違うのです、源一郎さま。私はあなたにこのように大切に頂く価値など欠片もない女なのです。

そう、結衣が押し込みに入られた後の越後屋の無残な有様を見て動揺したのは、源一郎が考えているような理由からではない。これから己れがなさそうとしている罪がいかほどのものか、あまたの罪なき人を犠牲にすることか、それをまざまざと鼻先に突きつけられ、動揺したにすぎないのだ。

それは罪なき人々に災いをもたらすことへの良心の呵責であり、美濃屋の人々に対する罪悪感よりは自己憐憫に近いものだったかもしれない。つまり、我が身はどこまでも自分が可愛い身勝手な人間なのだと思結衣はまざまざと思い知らされたようにも思えた。

結衣はできるだけ笑顔がいつもと変わらないものになることを願いつつ、微笑を拵えた。

「どうか、お気になさらないで下さいませ。私は本当に大丈夫ですから」

「ならば良いのだが。さりながら、もう二度と、そなたをあの様な場所には連れてゆかぬ」

源一郎はまだ気遣わしげな眼で結衣を見ながら、小さな溜息をついている。

結衣は複雑な想いで愛しい男の整った横顔を見つめた。

「お優しい源一郎さま。あなたが私の本当の姿をお知りになったら、きっと私は嫌われてしまいますね。」

迂闊なことに、結衣はこの時初めて、源一郎と自分の立場が実は真逆であることに気付いたのだった。真逆、というよりは敵対すると言った方が良いかもしれない。

源一郎は北町奉行所の前途有望な同心であり、結衣は盗っ人「般若の喜助」の引き込み女を務める身。追う側と追われる側、その立ち位置は端から明確だった。

いや、そうではない。結衣は哀しい気持ちで考えた。そんな単純なことにこれまで一度として気付かなかつたはずはない。ただ、見て見ないふりをしてきただけ、気付かないふりをしていただけだ。

「私ったら、馬鹿ね。源一郎さまをこんなに好きになるまで、そのことを考えてみようとしなかつたなんて。」

これまで事実から眼を背け逃げ続けたことが、結衣を更なる窮地に追い込もうとしていた。

「結衣」

間近で名を呼ばれ、結衣は現に戻った。ゆるゆると顔を上げれば、その先に源一郎の切なげな顔がある。

「頼むから、そんなに哀しそうな表情(かお)をしないでくれ」

結衣の華奢な身体はもう一度、男の逞しい腕にすっぽりと抱き込まれた。

「俺は男として失格だな。随明寺で結衣に妻になってくれと申し出た時、惚れた女を一生守り抜くと決めたのに、もうこの体たらくだ」

このひと言が結衣の辛うじて抑えていた感情を断ち切った。結衣は涙を滲ませ、源一郎を見上げた。

「源一郎さま、どうかも今日のこと忘れて下さいます。私は平気です。源一郎さまの妻になるのであれば、武家の妻として多少の修羅場を眼にすることもあるでしょう。その度に動揺していたのでは、武士の妻は務まりません」

本当は自分は源一郎の妻になるどころか、隣に並ぶ価値もない女だ。いやというほど自覚しながらも、結衣は心にもない言葉を口に乘せた。

こうでも言わねば、優しく正義感の強い男はいつまでも結衣を現場に連れていったことで、自分を責め続けるに相違なかつた。結衣の必死の願いが伝わったのか、彼は口をつぐみ、結衣の漆黒の髪を愛おしむように撫でた。

「結衣、この桜を何と申すか存じておるか？」

唐突に話が変わり、結衣はわずかに眼をまたたかせる。源一郎の視線の先は、和泉橋のたもとに植わった一本の桜に注がれていた。

今、二人は小さな橋のたもとに佇んでいた。丁度、橋を渡りきって下手の武家屋敷町がひろがる方である。二人が立つ場所からは少し先に、松平越中守の屋敷が見えた。

源一郎からさして離れてはいない場所に、その桜はあった。もうかなりの樹齢なのか、一本だけポツンと川岸に立っているその姿は孤高の老人を彷彿とさせる。

春には薄紅色の満開の花をつけ、道ゆく人の眼を愉しませたその桜も師走の今は葉もなく、ただ尖った枝先を寒々とした真冬の蒼天に伸ばしている。

これまで、この場所を通ることは何度もあったけれど、桜の名前など考えたこともなかった。俄に興味を引かれた。

「存じませんが、何と呼ぶのでしょうか」

結衣が桜を見つめながら問うと、源一郎が冬の陽を浴びてすっきりと佇む古木を眺めつつ応えた。

「霞み桜と申すそうだ」

「霞み桜」

結衣は言葉を憶えたての頑是なき子どものように、彼の言葉を無心に繰り返す。

「何故、そのように呼ばれるようになったのでしょうか？」

源一郎が懐手をして首を傾げた。

「さあ。俺も詳しくは知らぬが、この桜は見る者に見たい夢を見せるという不思議な力を持つのだという言い伝えを聞いたことがある」

「見る者に見たい夢を見せるー」

源一郎が頷いた。

「そうだ。判りやすくいえば、その者の願いを夢にして見せてくれるらしいぞ。その昔、四代將軍家綱公の御世、三十ほどの職人がここを通り掛かった。その男は惚れた女と所帯を持ったが、十年経っても子ができなかった。あちこちに願掛けしたが、一向に子はできぬ。ところがある夏の夜、仕事仲間と共に縄暖簾でしこたま飲んで、ここを通った。相当酔っていたものか、桜の樹の下で眠りこけてしまったというんだ」

結衣は物語をせがむ子どものように期待に満ちた瞳で源一郎を見た。源一郎が笑って続ける。「冬場であれば、そのまま凍え死んだやもしれぬが、季節が夏であったのが幸いした。男は少しく微睡んで目覚めたが、その間、何とも面妖なる夢を見たという。この桜の下で恋女房が赤児を抱いて立っている夢だ」

結衣が思わず呟いた。

「まあ、それでは」

源一郎が満足げに首肯した。

「そう、男の妻はほどなく懐妊した。以来、この桜は願いを夢にして見せてくれる桜、または願いを叶えてくれる桜といわれるようになったという話だ」

「ですが、何故、願いを叶えてくれる桜を霞み桜というのでしょうか？」

「大方は桜の見せる夢が現のようにはっきりしたものではなく、朧に霞んで見える、そのような意味合いではないのか？ 俺も実はそこまで知っているわけではないのだ。だが、その謂われを初めて聞いたときは何故か心に感じるものがあったな」

結衣は頷いた。霞み桜の由来を聞いたときの彼の気持ちはよく理解できたからだ。結衣も今、源一郎から初めて桜の不思議な能力(ちから)を聞かされ、昂ぶるものを感じていた。

「霞み桜、心から願えば、本当にそんな夢を見せてくれるのでしょうか」

その呟きを源一郎が目ざとく聞きつけた。

「何だ、結衣は何か願い事があるのか？」

彼の言葉に、結衣の顔が熟れた林檎のように染まった。その初な反応だけで、彼は結衣の願いは見抜いたようである。いや、源一郎はとうに結衣の心など承知なのだ。

「俺は何でもお見通しだぞ。」

源一郎の黒い瞳がそう告げているようで。結衣は耳朶まで紅くなった。

「もう、知りません！ 源一郎さまの意地悪」

つんとそっぽを向くと、源一郎の笑いを含んだ声音が耳朶を掠めた。

「案ずるな。俺の願いも結衣と同じだ。我ら二人ともに同じ願いを持つのだから、きっと桜もその願いを叶えてくれるだろう」

彼の吐息が当たった箇所が妙に熱い。結衣はますます頬を火照らせて、漸く頷いた。

決断

源一郎が案内してくれた蕎麦屋で蕎麦をご馳走になった後、結衣はそこで彼と別れた。源一郎は町方同心として多忙を極める身だ。今日もすぐに番所に赴くことになっている。そんな彼を私用で引き止めておくのは忍びなかった。

結衣はそのまま美濃屋に戻る気にもなれず、再び和泉橋に脚を向けた。川は滔々と流れ、小さな橋はいつも変わらずそこにある。

結衣は源一郎から聞いた霞み桜にまつわる不思議な話を改めて思いだしながら、今は花どころか葉一枚さえ付けていない桜を見上げた。

この桜はもう気の遠くなるような幾星霜もの間、何を考え何を見つめてきたのだろうか。きっと結衣なぞ想像も及ばないような、たくさんの人の生き様や歓び、哀しみを見てきたのだろう。

その一人が源一郎の語っていた子を授かったという職人だった。

一ねえ、心から願えば、本当に私の想いを叶えてくれますか？

結衣は切ない想いで桜を見つめた。

どうか源一郎さまといつまでも一緒にいられますように。大好きな方の傍にいて、あの優しい笑顔と声に触れていられますように。

だが、結衣の幸せな夢は唐突に破られた。

「結衣！」

聞き馴染んだ声に、結衣は眼を開き振り向いた。

「嘉助兄さん」

嘉助と顔を合わせるのには実によ月ぶりである。実の兄と妹のようにして育った懐かしい男に結衣は駆け寄った。

「どうしたの？ あんまり突然なものだから、愕いちまったじゃないの」

いつものように軽口めいて言ったのに、嘉助の顔は何故か強ばっている。

「兄さん？」

嘉助は薄い唇を真一文字に引き結んでいる。どうやら、あまり虫の居所が良くないようだ、子どもの頃から嘉助をよく知る結衣は悟った。

「結衣、あの男とは、どういう関係だ？」

「えー」

結衣は言いかけ、蒼白になった。嘉助が結衣の細い両肩を掴んだ。

「八丁堀の同心とわりない仲になるなんて、お前、一体全体何を考えてるんだ！？」

結衣は懸命に言った。

「待って、兄さん。あの方は違うの、違うのよ」

「馬鹿野郎。俺がお前の本心を見抜けねえほどのうつけだと思ってるのか！」

嘉助が低い声で言った。

「俺の顔を見ろ」

それでも、結衣は顔を上げない。嘉助が再度言った。

「ちゃんと顔を上げて、俺の眼をまともに見て言え。それでもなお、お前はあの同心と何でもないと言い切れるのかッ」

結衣はおずおずと面を上げた。

嘉助の切れ長の瞳が結衣を射貫くように見つめていた。結衣はしばらく兄とも慕う男の眼を見つめ、口を開いた。

「あの方とは本当に何でも」

皆まで言い切れなところか、語尾が震えている。嘉助が大仰な息を吐き出した。

「お前は昔っから、嘘をつくのが天才的に下手だった」

天才的に下手だなんて、また兄ちゃんの笑えない冗談が始まったと、いつもなら笑い転げるところが、今日は顔がひきつるばかりだ。

結衣は厭々をするようにかぶりを振り、顔をうつむけた。これ以上、まともに嘉助の顔を見てられない。

嘉助はまた小さな溜息をつく。

「お前が八丁堀に接近したと知ったときには、まさかと思ったぜ。俺はお前を小さなときから見て知ってるから、手練手管で男を誑かすような娘じゃないってことは判ってる。だから、こいつはまずいなと思ったんだ。けどよ、お前は仮にも般若の喜助の娘なんだぜ、そんなお前がよもや同心に本気でなげこぶせ上るとは信じられなかったというのが正直なところだ。お前なりに考えがあって八丁堀に近づいたんだと俺は何度も芽生えた疑念をねじ伏せ、自分に言い聞かせてきた。だが、俺の危惧は満更外れちゃいなかったんだな」

「兄さん、私」

口を開きかけた結衣に、嘉助が鋭い声を放った。

「黙って最後まで聞け。良いか、お前は色仕掛けで男を欺けるような女じゃねえ。それだけ知ってれば、お前があの同心をどう思ってるかなんざア、銭勘定をするよりは容易いさ。結衣、よく聞いてくれ。お頭はむろん徳市おじさんもまだこのことは知っちゃいねえ。二人共にお前のことを信じてるんだ。恐らくだが、他の仲間も気付いちゃいねえだろう」

俺はたまたま、お前のことが気掛かりでしようがなく様子を探っていたんだ。

しまいに嘉助は溜息混じりに言った。

結衣は弾かれたように顔を上げた。

「お願い、兄さん。おとつあんに今度のお勤めは止めるように言って」

嘉助が絶句した。

「お前、何言ってー」

「美濃屋の旦那さまも内儀(おかみ)さんも良い人よ。特に阿漕な商いをしているわけではないの。あそこにはまだ幼い子どもと生まれたばかりの赤ん坊もいる。無理にそんなお店を狙わなくても、他に大店はたくさんあるはずでしょ」

嘉助が唸った。

「結衣、俺たちは義賊というわけじゃねえんだぜ。美濃屋が阿漕な商いをしてるかどうかなんぞ、拘わりのねえことだ」

結衣はなおも嘉助に取り縋った。

「でも、でも！ できないわ。あんなに良い人たちを裏切るような真似はできない。最悪の場合、美濃屋の人たちは殺されるかもしれない。私にそれを黙って見てろというの！」

「お前、情にほだされちまったな」

嘉助が愕然として結衣を見つめた。結衣は泣きながら嘉助に訴え続ける。

「ねえ、今からおとつあんのところに行くわ。おとつあんに事情を話して、美濃屋に押し込むのは止めてってお願いするの」

嘉助が怒鳴った。

「馬鹿なことを言うな。それが何を意味するのか、お前、判って口にしてるんだらうな。裏切りは一味のご法度、秘密を知った者は消されるぞ」

「一」

嘉助の襟元を掴む結衣の手が大きく震え、離れた。嘉助は結衣の顔を覗き込んだ。

「むろん、お頭は手塩にかけて育てたお前を殺すようなことはしねえ。けど、徳市おじさんはどうかな？ いや、百歩譲って徳市おじさんも眼を瞑ったとしても、他の大勢の手下が黙ってやしねえぜ。そうなりゃア、手下の手前、お頭も徳市おじさんもお前に相応の処分を下さなきゃならなくなる。お前は育てて貰ったお頭にそんな無情な真似をさせるつもりかい」

「だったら一」

どうすれば良いの？ と言いかけた結衣の言葉に覆い被せるように嘉助が言い放った。

「だったら、どうする？ お頭をあの男前の八丁堀に売るってえのか？ 般若の喜助がここにいますって、お頭の許に連れてゆくのか？」

嘉助が結衣の両手首を掴み、グッと引き寄せた。いっそう顔を近づけたその体勢でだめ押しするように告げた。

「赤ん坊のときから実のてて親同様に育ててくれたお頭を裏切るのか？ それがお前にできるのか」

結衣の愛らしい顔が瞬時に凍り付いた。嘉助が更に顔を近づけ、殆ど唇と唇が触れそうな場所で囁いた。

「俺はお頭と同じだ、お前を信じてる、結衣。良いか、お勤めはかねて知らせてあったとおり、今月の二十六の日だ。その日は子ノ刻（午前零時）を過ぎたら正面の大戸の鍵はもちろん、美濃屋のすべての錠前を開けておけ。俺たちは二手に分かれて正面とそれぞれ勝手口から入る」

極限まで近づいた唇はついに触れることなく、スと離れた。

「一」

身を強ばらせている結衣に、嘉助が近づいた。その肩を宥めるように叩く。

「大丈夫だ。般若一味は無闇に犯したり殺したりする無法者の集団者ねえ。よほどのことがなければりゃア、美濃屋の連中を手に掛けることはねえだろう。俺たちは、くちなわの伊助とは違う」

くちなわの伊助、の名に、結衣は大きく身体を震わせた。先刻、見たばかりの無残な光景がまざまざと眼裏に甦る。

次々に運び出される亡骸。見守っていた群衆から洩れ聞こえたすすり泣きや念仏の声。更には両親の骸に取り縋って泣きじゃくっていたまだ幼い姉妹。

それらが次々に瞼に点滅し消えていった。

「それから、くれぐれも言っとくが、あの同心にはこれ以上近づくな。どうせお勤めが無事に済めば、二度と逢えなくなる男だ」

引き込みを勤めた女はしばらく江戸を離れることが通例になっている。やはり万が一、江戸にいて顔を見知った者に遭遇して怪しまれてはならないからだ。美濃屋のお勤めが終われば、結衣もまたその例に洩れず、ほとぼりが冷めるまで江戸を離れることになるだろう。

そのときは嘉助を伴にと喜助が言い出すかもしれない。それは事実上、嘉助と夫婦となつての旅になるはずだ。

嘉助を嫌いであるはずがないが、嘉助への`好き`は今も変わらず兄に対する親愛の情に近いものだ。結衣が添い遂げたいと願うのも今生でもあの世でも、ただ一人しかいない。

結衣の涙に濡れた瞳に、紋付き羽織着流しの端正な風貌の若い男が浮かんだ。ひっそりと涙を流す結衣の傍に、嘉助の姿はなく、かき消すようにいなくなっていた。

ただ川のほとりの霞み桜だけが冬の寒風に吹きさらされているだけだった。

北山源一郎から兄夫婦に引きあわせたいと申し出があつたのは、嘉助の警告を受けた数日後である。その日は師走の十五日、般若一味が美濃屋に押し入るまで、既に十日余りとなつていた。

その後も結衣は自分の立ち位置を決められないでいた。今の彼女は明らかに引き込みを続けることに迷いを抱いている。けれど、引き込みを止めることは即ち、父喜助を裏切ることになる。

そこまで考える度に

—お頭をあの男前の八丁堀に売るってえのか？ 般若の喜助がここにいますって、お頭の許に連れてゆくのか？

嘉助の凄みのある声が耳奥でまざまざと蘇り、結衣は耳許を両手で覆った。

二つの応えの狭間で、結衣は次第に極限状態に追いつめられていった。

「一いどの。結衣どの」

少し焦れたような呼び声に、結衣はハッと我に返った。

「申し訳ありません」

眼前の臍長けた貴婦人に深々と頭を下げる。結衣の前に端座しているのは、髪を島田にきっちり結び上げ、鶯色の地に雪花模様を金糸銀糸で散らした豪華な着物を纏った女人である。

「どうしたのですか？ やはり帯の締め具合が少しきつかったのかしら」

女は気遣いの色を美しい細面に滲ませて、結衣を覗き込んでくる。その澄んだ瞳とまともに眼を合わせていられず、結衣はひっそりとうつむいた。

「そのように堅くならず、少しお楽になさい。何も私たちはあなたを取って食おうというわけではないのですから」

女は軽やかな笑い声を立てた。

「さて、これで良いかしらね」

女が黒塗りの立派な手鏡を差し出してくる。裏には桜が蒔絵で施された立派な品だ。結衣など手にしたこともない代物である。

鏡を覗き込めば、そこには美しく化粧された見知らぬ若い女が映っていた。

その時、部屋の襖が細く開いた。

「義姉上、そろそろ支度はできましたか？」

その声だけで源一郎だと判る。女が呆れたように柳眉を上げた。

「まあ、源一郎どの。仮にも女人の着替え中を断りもなく覗くとは不作法にもほどがありますよ」

源一郎の狼狽えた声が聞こえてくる。

「義姉上ッ、俺は何も覗いてなんか」

上擦った源一郎の声がおかしいのか、女はクスクスと笑いながら結衣を見た。

「ほんに辛抱がない。今からこれでは、先が思いやられますね」

女が立ち上がり、サッと襖を開けたものだから、間近にいた源一郎は「うわっ、とみっともない声と共に部屋に転がり込む羽目になった。

「源一郎どの、はしたない。私はあなたをそのように我慢の利かぬ人に育てた覚えはありませんよ？」

女に睨まれ、源一郎は身を竦めた。罪人たからは「凄腕の若いの、と畏怖されている北町奉行所の新鋭源一郎も義姉の芳野には頭が上がらないようである。

「いや、俺は別に」

長身を縮めて座り、子どものように言い訳する源一郎の姿はまるで母親に叱られる子どもそのものだ。源一郎が語ったとおり、兄夫婦が彼の親代わりであったというのは真実なのだろうと思える光景であった。

いつもの沈着な彼からはおよそ想像もつかぬ慌てぶりに、思わず笑いが込み上げる。源一郎はそれを目ざとく見つめたようで、恨めしげに結衣を眺めた。

「何だ、結衣まで俺を笑い者にするのか」

その時、上手の襖が静かに開き、一人の男が入ってきた。結衣は固唾を呑んで、その人物を凝視する。

その男は三十代後半、すくとした立ち姿やきりりと整った涼しげな容貌は愕くほど源一郎に生き写しである。ただ、この男には弟よりはるかに人生経験を積んだ重みというものが自ずから備わっていた。

いや、それだけではない、けして傲岸不遜でもないのに、むしろ彼を取り巻く雰囲気は穏やかなものであるはずなのに、対する者を威圧するかのような圧倒的存在感がある。不思議な男だった。

この男が源一郎の兄であることは疑いようもない。女が座り、両手をつかえたのを潮に、結衣も見様見真似で端座してひれ伏した。

「殿、こちらが源一郎どのの仰せになっていた結衣さまにございます」

「殿、のひと言に、結衣の身体に緊張が漲った。旗本の当主ゆえ、妻女が「殿さま」と呼ぶのではあろうが、町人の結衣の知る世界に「殿さま」など存在しなかったからだ。

先刻の男のものらしい、低い声が頭越しに聞こえた。

「そう堅くならずとも良い。そなたの話はこの弟から嫌になるほどきいておるでな」

「兄上ッ、何もそんな余計なことを」

源一郎が蒼くなったり紅くなったりするのに、男が軽やかな声を立てて笑った。

「惚れたおなごの前では、さしものお前も良い格好をしたいのだな。まるで子どもだぞ、源一郎」

「うっ、兄上」

源一郎が言葉につまり、真っ赤になった。兄とのやりとりも先刻の義姉同様、兄と弟というよりは父と息子のように思える。

男より少し下手に座した源一郎は今日は藍色の小袖に濃紺の袴だ。同心姿ではない源一郎を結衣は初めて見ることになる。江戸の女たちの憧れの紋付き羽織着流しの粋な姿もむろん良いが、何気ない袴姿は彼の若々しい男らしさを更に際だたせている。

対する源一郎の兄は黒っぽい上物の紬で仕立てた着物を着流しにしている。下座に位置する兄の奥方と結衣は並んでいた。

「殿のおっしゃるとおりですよ。そのように緊張しないで。初めて武家屋敷に来るあなたが緊張してはと敢えて広間での正式な対面ではなく、私用でお客さまをおもてなしする小座敷にお通ししたのですからね」

傍らの芳野が優しく言い聞かせるよう添える。この芳野こそ元の名はお芳といい、北山家の用人の孫娘にして、嫁ぐ際は今は亡き先代、つまり源一郎兄弟の両親が猛反対したという件(くだん)の嫂であった。

だが、今の芳野から町家の出であるということを推測するのは難しい。それほどに、気品ある美貌といい、洗練された立ち居振る舞いといい、武家の奥方として何一つ不自然なところはなかった。

ここで芳野が静かに出ていった。

威丈夫の兄がおもむろに口を開いた。

「戯れ言はともかく、そなたの話は既にこの弟より詳しく聞いて存じておる。ついては、そなたも我ら夫婦の話は源一郎を通じて知っているものと思う。好き合うておる者同士、武家方、町方だと身分の違いを理由にして引き裂くのも酷いことよ。どうも回りくどい話は苦手ゆえ単刀直入に申すが、儂としては源一郎とそなたさえ合意の上であれば、そなたたちの結婚に関して何も異議を唱えるところはない」

結衣の眼が大きく見開かれた。その瞳ににっこりと微笑みかけ、兄は告げた。

「弟をよろしく頼む」

頭まで下げられ、結衣は慌てて平伏した。

「そのような、勿体ないことにございます」

涙が溢れて止まらなかった。こんなに簡単に認められても良いのだろうか。自分だけがこんなに幸せになって許されるのだろうか。

その時、芳野が茶菓を捧げ持つようにして入室してきた。その背後から鉄錆色のお仕着せを着た奥女中らしい女が続く。

芳野がまず高坏に盛った綺麗な干菓子を並べ、腰元が茶托に乗った立派な青磁の湯飲み茶碗をそれぞれの前に置いた。腰元はすぐに下がり、芳野はそのまま元の場所に結衣と並んだ。

「あらま、殿。何を仰せになったのですか、結衣どのが泣いておりますよ」

芳野が兄を軽く睨むと、兄が頭をかいた。

「儂は別に何も申してはおらぬぞ。ただ、二人さえ承知であれば、この婚姻を認めると申したただけだ、のう、結衣」

救いを求められるように促され、結衣は殊勝に頷いた。芳野が艶やかに微笑む。

「源一郎どのも何かおっしゃいませ」

だが、源一郎は惚(ほう)けたように結衣を見つめているばかりである。芳野がさもおかしそうに袂で口許を覆って忍び笑いを洩らした。

「殿、源一郎どの先刻から結衣どのに見惚れておりまする」

兄も笑いながら頷く。

「真よの」

「今からこの有り様では、祝言の日なぞ花嫁御寮のお召し替えが終わるまで待ちきれないのではございませんこと？」

芳野がフフッと童女めいた笑いを洩らすのに、源一郎がハッとした。

「義姉上、何かおっしゃいましたか？」

芳野と兄は呆れたように顔を見合わせ、芳野が応えた。

「いいえ、結衣どのはほんに美しいと申しておりましたのよ」

涼しい顔で応える義姉に、源一郎は生真面目に頷く。

「さようございますな。結衣、綺麗だ」

最後のひと言は結衣に向けられたものだったが、それにも兄夫婦は笑い出しそうな顔で堪えている風だ。

今日の初めての対面は源一郎の兄の別邸だという屋敷で行われた。いきなり本宅での対面となれば、結衣が気後れするのではと敢えてこじんまりとした別宅が選ばれたと聞いている。

更に約束の刻限に源一郎に連れられてきた結衣は湯浴みさせられた上、義姉の手によって美しく飾り立てられた。今も身に纏っているのは袖を通したこともない薄桃色に梅花が細かく散った美しい小袖に上物の黄金色の帯、結い直された髪にも幾本もの高価な簪が惜しげもなく挿されている。

化粧もこれまでしたことがなく華やかで、知り人が見ても一目で結衣だとは判らないほどの変わり様だ。町娘のなりでも十分な美少女であったが、今の結衣は垢抜けて武家のお嬢さまにも見える。どこか幼さを残した町娘の装いと異なり、年が明ければ十七歳になる娘盛りの色香が匂い立つようだ。

これでは源一郎が眼を奪われるのも無理はないといえた。

「それでは、これにて対面の儀は終わり、結衣は俺の正式な婚約者となったと思ってよろしいのですね、兄上」

源一郎の念押しに、兄は大きく頷いた。

「むろんだ。年明けに結納を交わし、春、桜が咲く頃に祝言というのはどうだ？」

とんとん拍子に話が進んでゆくのに、結衣は眼を丸くした。その戸惑いを察したように、隣から芳野が訊ねた。

「結衣どのは早すぎるとお思いなの？」

その指摘に、源一郎の整った面が曇った。不安げに結衣を見つめている。結衣は深呼吸して、手をつかえた。

「私も源一郎さまを心よりお慕い申し上げております。ただ」

「ただ？」

兄が心もち身を乗り出した。結衣は勇気を集めてひと息に言った。

「源一郎さまと私のことを認めて頂きながら、いまだ兄君さまのお名前をお伺いしておりません。真にご無礼な申し上げ様とは存じますが」

と、ふいに兄が笑い出した。その笑い声で、場に満ちていた張りつめた空気が和む。

「いやはや、そうであったな。結衣よ、実のところ、儂はこの弟を信頼しておってのう。源一郎がこれと見込んだ娘であれば、身許の詮索も一切無用、身一つで嫁に来れば良いという腹づもりであったのよ。されば、端から顔合わせというのも形だけのもの、そなたに逢う前から儂はそなたらのことをとうに認めておったのだ」

傍らから芳野が笑いを含んだ声で付け足した。

「それゆえ、お名前を名乗るのをお忘れになったのですか、殿」

「うむ、まあ、そういうことよ。さりながら、結衣の申すは理。まずはこちらも名を名乗るが筋というものだ。結衣、儂は北山源五泰典と申す」

「北山源五一泰典さま」

結衣は聞いたばかりの源一郎の兄の名を呟いた。

この名前、どこかで聞いたことがある。刹那、結衣は息を呑んだ。

「よもや、兄上さまはお奉行さまでは」

結衣が同じ場所に座って良いような相手ではない。結衣が咄嗟に手をつかえようとするのに、源五は手で制した。

「なに、奉行だとして人の子。しかも、そちは可愛い弟の嫁女になる娘ではないか。何も儂の正体を知ったからとて、そのようにへりくだる必要はない」

しかし、結衣の声は依然として震えていた。

「お奉行さまは確か町の噂ではご病気とお伺いしておりましたが」

眼前の源五は顔色も良く、至って壮健そのものだ。それに対して、源五は呵々大笑した。

「とりあえず、そういうことになってはおるようだが」

そこで源一郎が控えめに説明する。

「すべては御用向きのことだ」

「では、子細あってご病気だという噂をわざと広めておいでになるのですね？」

結衣の顔は最早、蒼白であった。名だたる盗っ人一味からは、鬼、と怖れられている凄腕の北

町奉行が仮病を使い引き籠もっている理由は一つしかない。

一盗っ人たちを油断させ、鬼奉行のおらぬ中とのこのこと出てきた盗っ人一味を一網打尽にするため。

「つまりだな、結衣、兄上は」

言いかけた源一郎を源五が鋭い眼で制した。その眼にはこれまでとは打って変わって剣呑な光が閃いている。

一何も申すでない。

名奉行の眼は告げていた。源一郎は息を呑み、頷いた。

あまりに動転していた結衣は、奉行と源一郎の咄嗟のやりとりに気付くゆとりはなかった。

「義理とはいえ仮にも兄と妹の間柄になるのだ。奉行ではなく兄と呼んではくれまいか」

しかし、源五はもう穏やかな表情に戻り、優しく結衣に声をかけた。

結衣は上擦る声を懸命に抑えつつ応えた。

「ありがたきお言葉にございます」

源五が笑みを絶やさぬ表情で続けた。

「今一つ結衣に訊ねておきたい。我ら夫婦には生憎と子がおらぬ。幸いにも弟の源一郎が頼もしく育ってくれた。儂はこの弟に北山家の家督を譲るつもりでおる。この先は知れぬが、北山家は現在ご公儀より三千石の扶持米を賜る身。もしや弟もこの先、町奉行どころか幕府の要職を担う身となるやもしれん。そなたはそんな源一郎を妻として生涯支え、連れ添うだけの覚悟はあるか？」

「一はい」

永遠にも思えるほどの沈黙の果てに、消え入るような結衣からの返答があった。

対面は無事に終わった。晴れて親代わりの兄にも認められて源一郎の婚約者となったはずなのに、結衣の表情はどこか冴えなかった。

源一郎はやはり、自分が町奉行の弟であることや、北山家が大身であることを知らされ、結衣が怖じ気づいてしまったのではと不安を抱いた。最後に北山家の家督をいずれ継ぐであろう源一郎の妻としての覚悟はあるかと、兄は訊いた。質問に対して結衣からの返答ははなかなかなく、やっと返ってきたのは聞こえるか聞こえないかのような頼りないものだった。

屋敷を出た源一郎は結衣を改めて見つめたものだ。既に着物はいつもの町娘の装いに改めているものの、結衣の武家娘姿の艶やかさは今なお源一郎の脳裡に灼きついて離れない。一飾らないこの姿も可愛いが、盛装をした結衣はもっと綺麗だ。

と、今もあの姿を思い出す度に、みっともなく頬が緩みそうになる。兄や義姉が見れば、また笑われるだろうが。

しかし、兄にも認められ婚約や祝言の話まで具体的に出たというのに、有頂天になっているのは源一郎だけで、結衣は少しも嬉しそうではない。

和泉橋のたもとまで来た時、結衣は言った。

「もう、ここで大丈夫です」

ここまで来たら、美濃屋までは眼と鼻の先だ。それに、結衣はいつも源一郎の送りを途中で拒んだことはなかった。一刻でも長く一緒にいたい、その想いは結衣も源一郎も同じであったはず。

にも拘わらず、何故、急に送って欲しくないと言い出したのか。源一郎には結衣の心を測りかねた。

しかも、別れ際、結衣がふっと訊ねてきたのである。

「源一郎さまに奉行所勤めを、お役人になるようにと勧めたのはお奉行さまだったのですね」

予期せぬ問いに源一郎は虚を突かれた。

「ああ、兄上の仰せだが、それがどうかしたか？」

いいえ、と、結衣は微笑んだが、その笑顔がどこか儂く消え入るようだと妙な胸騒ぎがしたのは単なる杞憂なのか。

結衣は最後まで兄を`兄上、ではなく`お奉行さま、と呼んだ。些細なことにいちいち過剰に反応する我が身が男として情けない。つまりは、それほど結衣を好きだ、惚れているということにもなる。

今日の対面の何が結衣の心に翳を落としたのだろうか。あれほど一途に自分を慕ってくれていた娘がたった一瞬で心変わりをしてしまったというのか。

源一郎は一人、和泉川の川辺に佇み師走の風に吹かれていた。江戸の人々が`霞み桜、と呼ぶ不思議な桜は今日も黙して源一郎を見下ろしている。

同じ時刻、北町奉行所の奥まった一室、奉行の執務室に戻った北山源五は側近の新田和馬を呼んでいた。

「お呼びでございますか？」

和馬は既に五十近いが、長年、北町奉行所の与力を務めたベテランである。北町奉行に就任してからやっと五年めになる源五をよく助けて働いてくれていた。

「美濃屋に結衣という娘が住み込みで働いている。その娘を調べてみてくれ」

和馬が一瞬、息を呑んだ気配が伝わってくるのを源五は見逃さなかった。

「お奉行、その娘は若さまの許婚も同然の者では」

案の定、和馬が問うてくる。源五はほろ苦く微笑した。

「さよう。思わぬところで獲物が釣り針にかかったのやもしれん。だが、儂は叶うことなら、儂の勤が今度ばかりは外れておることを祈るばかりだがな」

「怪しいところがあるのですか？」

「ふうん、どうもな。儂が奉行であることを知ったときのあの娘の愕き様が尋常ではなかった」

「お言葉にはございますが、町娘が自分の恋人の兄が町奉行だと知れば、誰でも愕くのではありませんか？」

源五が首を傾げた。

「さようではあるが、どうも今回、あの娘の態度が儂の勤に何かを訴えかけてくるのだ」

「勤、ですか。お奉行の勤はまず外れたことはございませんからな」

源五が笑いながら和馬を見た。

「世辞を申しても、何も褒美は出んぞ」

ですが、と、和馬が遠慮がちに言った。

「今回ばかりは、お奉行の勤働きも鈍ったのやもしれませんぞ」

「儂もそう願うばかりだ」

「御意」

和馬が頷いて立ち上がる。踵を返したその背に、源五は声を落として告げた。

「今更だが、源一郎にはこのこと、子細が判るまでは他言致すな」

「ハッ」

和馬は深々と頭を下げて執務室を出てゆく。

皮肉なものだと思った。結衣に告げた言葉は嘘ではない。弟の源一郎は我が弟ながら見所のある若者だ。この女しかおらぬと惚れに惚れ抜いて娶った妻との間に後嗣を残せなかったのは心残りではあるが、源一郎のような年若い弟がいれば、この先、何の愁いもない。

ゆえに、源一郎がこの女ならと見込んで連れてきた結衣の身許を詮索するつもりはまったくなかった。身分違いをいうなら、そもそも自分と芳野も似たようなものだ。

女という形を取り、嫁がせば良いだけの話である。学問も剣術にも優れながら、弟は幼い頃から、いつも一步引いていた。それが次男であり、親でもないのに育てて貰っている兄夫婦への遠慮であることを源五は知っている。

そのこともあり、源五は弟が持って生まれた才知を十分活かせるようにと奉行所入りを勧めた。期待どおり、いや、それ以上の才覚を弟は現して数々の難事件を解決している。奉行所でも源一郎が若いながら古参の与力にも一目置かれているのは何も奉行の弟だからではない。

源一郎自らの人なりや優れた能力が自然に年配者にも敬意を払わせているのだ。何より源一郎が奉行の弟であることを知る者は与力の中でも知れている。同じ北山姓のため繋がりは隠しようはないが、遠縁の若者を源五が預かっているということになっていた。

それも同心になるに先立ち、源一郎が
一俺は奉行の弟ということで、特別扱いはされたくありません。

と、奉行の弟であるという立場を隠したいと主張したからだ。

今時の若い男には珍しいほど一徹な正義感だが、ひとたび捕り物となれば、その透徹な眼力は冴え渡り時に源五ですら見抜けないような複雑な絡繰りを見抜き解決に導く。

ではあるのだが、捕り物においては抜群の勘働きをする弟も恋する女に関してはその勘も無用の長物になるらしい。

後に残った源五は深い溜息をつき、握り拳で肩を叩いた。

「どうも最近は妙に凝っていかんな」

結衣がその伝言を受け取ったのは師走もいよいよ下旬に差し掛かった十九日のことだった。北町奉行北山源五と対面してから、既に三日が過ぎている。

迷っている間にも、日々は無為に過ぎていった。

育ての父である喜助を裏切ってもなお、罪なき美濃屋の人々の無事を優先するか？

実の父とも慕う喜助のためになら何でもするという昔からの気持ちを重く見て、このまま般若一味の引き込みとしての役目をまっとうするか？

結衣の取るべき道は最早、二つに一つであった。

その日の朝、主人夫妻や家族が住まう奥向きの拭き掃除をしていると、まだ幼い丁稚が近づいてきた。

「お結衣さん、これを」

漸く八歳になったばかりの丁稚は誰からとも言わず、結衣に結び文を押しつけるようにしてそそくさと駆け去っていった。啞然として小さな後ろ姿を見送り、結衣は渡された文を開いた。

その文面を眼で追っていた結衣の顔から血の気が引いた。結衣は文を丸めて懐に押し込み、何事もなかったかのように拭き掃除を始めたが、その可憐な面は依然として蒼白いままだった。

同じ日の昼下がり、結衣は女中頭のお登勢には実家の父が持病の腰痛を起こしたそうなので、少し見舞に出かけてくると告げ、美濃屋を出た。

勝手口から広い庭を通り、広い敷地をぐるりと囲んだ生け垣から柴折り戸を抜けて狭い裏路地に出る。それが美濃屋の奉公人たちが一般に使う通路だ。その路地からは直に表通りに出られる

ようになっている。

表通りには今日も変わらず、たくさんの人々が忙しなく行き交っている。心なしか師走に入ったばかりの頃より、通りをゆく人々の足取りも速さを増したようである。

結衣は表通りに出て、天を仰いだ。どうやら初雪でも降りそうな生憎の空模様である。江戸八百屋町の上に垂れ込めた空は低く、どんよりと曇っていた。

寒さも並ではない。この分では帰りは雨か雪になるだろうからと傘を持って出てきたのは我ながら正しかったかもしれない。吹き抜ける師走の風に身を震わせ、結衣は畳んだ傘を握りしめて歩き始めた。

約束の場所、随明寺の前に辿り着いた時、空はますます濃さを増していた。結衣は重い溜息をつく。まるで今の結衣の心をそのまま写し取ったかのような暗い空に、余計に気分が滅入ってしまう。とはいえ、別に恋しい男と逢い引きをするわけでもなし、天気がどうあろうと関係はないだろう。

むしろ、結衣がこれから逢おうとしているのは、この世で最も顔を見たくない男だった。

結衣は所在なげに周囲を見回した。今立っているところからは長い石段が見える。江戸の町の人はいっしょかこの坂を「息継坂」と呼ぶようになった。その名の所以は長くて勾配の急な石段であるため、女子ども年寄りも途中で休み休みして登らねば上まで辿り着けないからだ。

石段の始まる横には、小さな茶店がある。ここの茶店は腰の曲がった老婆が一人でやっているが、春の桜の時季にしか作らない桜餅は絶品だとわざわざ遠方から買いにくる客がいるほどで、花見の頃となれば、この小さな茶店の前には長蛇の列ができる。

祝言に先立ち、結衣をそれなりの武家の養 結衣も一度買いに並んだことがあるけれど、結衣の二人前で丁度桜餅が完売してしまい、長時間待った挙げ句、買うことはできなかった。以来、閉口して並んでまで買う気は失せてしまった。

何しろ老婆が一人で作るため、一日に売ることのできる桜餅の数が知れているのだ。

今の真冬の時期には花見の賑わいが嘘のようにこの界限は静まり返っている。見れば老婆の具合でも悪いのか、いつも表は葦簀で囲ってある店はきっちりと閉ざされ、木戸に一きょう、やすみます。

と、たどたどしい字で書かれた張り紙が出ていた。張り紙の右下端が既にめくれ、寒風にわずかに揺れている。

花見の時分を覗いては、この門前道は昼間でも人通りがない。ましてやこの寒さでは、誰もわざわざ好んでくる者はいないだろう。老婆が店を閉めたくなる気持ちも判らないではなかった。

と、結衣のすぐ後ろを男女らしい二人連れが通り過ぎていった。これは何も珍しいことではない。茶店と向かい合うように少し離れた場所には数軒の料理茶屋が居並んでいる。二人連れはここから出てきた客に違いない。

いや、実のところ、数軒ある店はすべて料理茶屋などではなかった。見た眼は小体な料理屋を装ってはいるけれど、内実は出合茶屋なのだ。つまり、男女がひそかに忍び逢う連れ込み宿なのである。

こんないかがわしい場所に来るほどだから、大方は道ならぬ恋に焦がれている手合いだろう。結衣は穢らわしいものでも見るかのように背後の二人を振り返った。

四十ほどの男と男とさして変わらない年頃の女がもつれ合うようにして歩き去ってゆく。

女が何か言い、男の腕にしなだれかかる。男が馬鹿みたいに笑い声を上げ、二人の姿はやがて辻を曲がって見えなくなった。

あの二人共に家庭を持つ身だろう。それぞれ良人や亭主、子がいるはずなのに、何故、穢らわしい関係が続けるのか。まだ未通の娘ならではの潔癖が余計に結衣の眉をひそめさせた。

幾ら洒落た料理茶屋の風を装って営業していても、どうしても淫靡な雰囲気醸し出してしまうのは男女が密事を重ねる場所柄ゆえ致し方ないのだろうか。

結衣は何故、作蔵がこのような場所を指定したのか皆目判らなかった。確かに人の眼を避けるという点では良いのかもしれないけれど、それなら随明寺の境内でも良かったはずだ。そこまで考えた時、ふいに背後から抱きすくめられた。

「一？」

少し汗のにおいがする体臭は紛れもなく男のものである。結衣は暴れた。しかし、相手は屈強な男、少女の儂い抵抗は易々と封じ込まれる。しかも結衣が抗えば抗うほど、拘束する力は強くなる。

突如として口許に冷たい湿ったものが当てられ、クラリと目眩がした。ツンとした匂いが鼻につく。意識が急速に遠のいてゆく。

一助けて、源一郎さま。

暗闇に意識が飲み込まれる寸前、結衣は最愛の男に助けを求めた。

どれだけ意識を失っていたのか。漸く目覚めたというのに、まだ意識は朦朧として、身体がだるい。恐らく何かの眠り薬を嗅がされたに相違なかった。四肢がわずかに痺れていることからすれば、痺れ薬も入っていたのだろう。

唐突に訪れた覚醒は結衣に悶えるほどの羞恥と屈辱を感じさせた。あろうことか、結衣は紅い腰巻きだけを付けた全裸に近い、あられもない格好をしていた。

「これは何なの？」

無意識に逃れようと身体を動かしたものの、手足に鈍い痛みが走っただけだ。

結衣は信じられない想いで腕を見た。紅い縄紐で両腕をひと纏めに括られている。恐る恐る後方を見やると、両脚は大きく開いた体勢でそれぞれの脚をやはり紅縄で棒のようなものに繋がれていた。

縛めを解こうとしても、身動き一つもできないほど縄は堅く結衣の身体に食い込んでいる。

「やっと気が付いたか。薬が効きすぎて永遠に眼を覚まさねえんじゃないかと思ったぜ」

背後から忌まわしい声がゆっくりと近づいてくる。結衣は唇を噛みしめ、自分をあられもない姿で繋いだ男を睨み上げた。

「何のつもりなの？」

男一作蔵がニヤリと口の端を引き上げた。なまじ男前だけに、こういう皮肉げな笑い方をすると、何とも陰惨さが際立つ。

「いつかお前に言わなかったか？ 私は必ずお前を手に入れると。こうも言っただろう？」

「私は綺麗なもの、美しいものが好きだ。だが、あまりにも美しすぎるもの、愛らしいものはこうして踏みつぶしてやりたくなるんだ。」

作蔵は結衣の耳許にあの毒の言葉を注ぎ込んだ。

「どんな誘いをかけても私が相手なら乗ってはこねえだろうと思ってな。悪イが、お前の親父の名前を使わせて貰った」

そう、丁稚が今朝、手渡した文にはこう書かれていたのである。

「きすけのじゅうだいなひみつをしる。これをしりたくば、ひるハツにずいめいじもんぜんにくるべし。」

さくぞう

結衣にも読めるように平仮名で書いてあったから、すぐに読めた。

結衣は作蔵の眼を真正面から見た。本当はこんな無防備な状況が怖くて堪らない。明らかに眼に狂気を宿した男と二人きりなのが怖ろしかった。しかし、こんな嗜虐趣味を持った男には怯える様を見せれば、余計に飲ばせ嗜虐心を煽るだけだろうと思い、懸命に怯えを堪えていたのだ。

「それで、おとっつあんのどんな秘密を知ったというの？」

声が震えないようにしながら虚勢を張って言う。作蔵が嗤った。

「威勢が良いな。普通、こんな状況で目覚めれば、助けを求めるか許しを請うかのどちらかだろうに」

「応えなさい。おとっつあんがどうしたっていうの？」

よもや喜助が般若の頭領だという秘密をここの暗愚な男が知っているとは思えない。だが、世間では多少変わり者だが、真面目一徹な小商人(こあきんど)で通っている喜助が持つ重大な秘密といえ、それくらいしかないのも事実なのだ。

それに、この作蔵という男、存外に鋭い嗅覚を持っている。

作蔵が陰惨な嗤いを浮かべたまま真正面に立った。

「よほど親父が大事と見える。そんなに親父の秘密が知りたいか」

見下ろす男に、結衣は顎を反らした。

「生憎とうちのおとっつあんにたいした秘密があるとは思えないわ」

「フン、そんなに知りたければ教えてやろう」

短い沈黙の後、作蔵が得意げに披露した話に、結衣は笑い出したくなった。

「喜助には情人(いろ)がいる。縄暖簾の女将で、四十前の大年増だ。まあ、そこそこの別嬪らしいが、かれこれもう十年近くも続いてるって話だけ、マ、知らなかったのは娘のお前だけだろうがな」

「どうだ、参ったか、というように見下ろされ、結衣は声を立てて笑った。

思わぬ反応に作蔵が鼻白む。

「な、何だ。何がおかしいッ」

ヒステリックにわめき立てる男に、結衣はさもおかしそうに笑ってやった。

「あんたも馬鹿ね。おとっつあんはまだ五十前なのよ？ 私のおっかさんを亡くして、ずっと男一人で娘の私を育ててくれたの。そんな父親がどこぞの亭主持ちのおかみさんとよろしくやってたのならともかく、縄暖簾の女将と良い仲になってたからって、どうしていちいち私が騒ぎ立てなきゃならないの？」

結衣は作蔵を睨んだ。

「たかだか父親の色恋沙汰で私が狼狽えるとでも思った？」

「この！」

作蔵が結衣の髪から紅い櫛と小さな簪を抜き取った。漆黒の艶やかな髪が意思を持つ生きもののように流れ落ち、白いすべらかな背中を覆う。

その髪を鷲掴みにし、作蔵がグッと結衣の顔を持ち上げた。

「お前はどうも今の自分の立場が判っていないようだ。それとも、主家の跡取りへの口の利き方を忘れたか？ 忘れたなら、私が思い出させてやろう」

いきなり掴んでいた髪を放されたので、結衣は畳で顔をしたたか打った。

どうやら、ここは随明寺門前道の幾つか立ち並ぶ出合茶屋の一つのようである。時ここに至り、結衣は何ゆえ作蔵があ場所を指定したかを悟った。この卑劣漢は最初から薬で結衣の自由を

奪い、ここに連れ込むつもりだったのだ。

作蔵はゆっくりと結衣の背後に回った。

「結衣、俺は優しい男だ。だから、お前がどれほど無礼な物言いをしてしようが、囚われた哀れな女の世迷い言だと思ひ、聞き流してやろうじゃねえか」

言葉が途切れない中に唐突に、結衣の背中に得体の知れぬ感触が走った。続けざまに走ったその感覚を何に例えれば良いのか。

さざ波のように背筋を駆け抜けたそれは妖しい震えとなり四肢に伝わる。その感覚を与えられる度に、華奢な身体を跳ねさせる結衣に、作蔵がさも優しげに囁いた。

「お前が今、感じているのはこれのせいだ」

眼前に突きつけられたのは紅い筆だった。結衣の親指ほどの太さの穂先、持つ軸の部分も紅い筆。

結衣は「感じる、という言葉の意味も知らぬまま、男に告げた。

「私は感じてなどいない」

「なるほど、あくまでも言い張るか」

作蔵が結衣の白い背中に紅筆をすべらせる。また妖しい感覚が背筋を這い回り、結衣の身体がビクビクと波打つ。あまつさえ声が出そうになり、結衣は必死に飲み込んだ。

作蔵の濡れた声が耳朶に触れる。

「俺が何も知らねえと思ってるようだが、お前のことは何でもお見通しなんだぜ？ お前、八丁堀の若え同心と懇ろになってるんだろ。北山某とかいったか？ 粋な同心だと女たちにもてはやされて調子に乗って色男ぶってるようだが、あんなすかした野郎にお前は渡さねえ」

結衣は唾棄するように言った。

「あんたには関係ないわ」

「大ありだよ、お前は私だけの女、獲物だからな」

作蔵の声が低くなった。彼は烈しい眼で結衣を射竦める。

「虫も殺さねえような楚々とした娘の癖に、この身体で一体何人の男を銜え込んでるんだ？ 正直に白状しろよ。どうせとっくにその北山とかいう同心とやっちまって、生娘なんかじゃなくなってるくせによ」

あまりの屈辱に眼の前が怒りで紅く染まる。結衣は唇を噛みしめた。あまりに強く噛んだので、血の味が口中にひろがった。

近づいた作蔵の顔に結衣はペッと唾を吐きかけた。

「源一郎さまはあんたのような下衆とは違う。一緒にしないで」

「お前はどうしても私を本気で怒らせたいようだな」

作蔵の切れ長の眼(まなこ)が嫉妬と憤怒で燃えていた。結衣が身じろぎする度に、俯せの形で繋がれた白い魅惑的な裸身が小刻みに揺れ、合わせるように双つの胸のふくらみもふるりと揺れる。

作蔵の粘ついた視線がふくらみの先端で慎ましく息づいている薄紅色の乳首を舐めるように見つめた。

「そんなに嬲られるのが好きだというなら、望み通り嬲り尽くしてやるよ」

あられもなく大きく広げられた両脚の狭間に作蔵が陣取った。何をされるかも判らないまま、結衣の身体を激痛が貫いた。

「一っ」

結衣の可憐な唇から悲痛な声が洩れた。

どれほどの刻が経ったのだろう。結衣は緩慢な動作で立ち上がった。足許には鮮血を帯びた男が仰向けになって無様な姿で転がっている。

結衣は屈み込んで、男の首筋に手を当てた。脈は規則正しい。この分では、死ぬことはあるまい。おびただしい血のように見えるけれど、たいしたことはない。傷も浅いことを確認したし、一時、気を失っているだけだ。

そこで結衣は自分を嗤った。ここまで徹底的に貶められ嬲られて、それでもなお自分はこんな男が死んだかどうかを気にしている。この甘さがこの愚かな男に付けいる隙を与えたのだ。

作蔵によって純潔を散らされた結衣はその後、徹底的に慰みものにされた。結衣が生娘であったことは作蔵にとって愕きではあったようだが、逆に男を歡ばせ、その嗜虐心を更に煽った。結衣は初めて男を知ったばかりの無垢な身体を踏みにじられた。

幾度めかに抱かれた後、結衣はそれまでの反抗的な態度をかなぐり捨てた。この男から逃れるためにはそれしかないと悟ったのである。

一っ、こんなのはいやです。

少し甘えた声音で訴えるように言えば、すぐに男は反応を示した。

一ん？ 何がいやなんだ。

一私だけ若旦那さまに翻弄されるばかり。私も若旦那さまに触れさせて。

遊廓通いばかりしているだけあり、作蔵の女体を陥落させる技巧だけはそこそこのものだった。初な処女であった結衣が反応を示せば、その箇所をこれでもかというほど責め立ててくる。

結果、結衣はあっさりとは陥落し、作蔵に触れられ、あられもない声を上げ、身をくねらせた。

死ぬほど辛くて嫌なのに、大嫌いな男に身体中を触れられ舐められ、快感を憶えている我が身が堪らなく穢れてしまったように思えた。それでも男から逃れたい一心で本心を押し隠し甘えた声でねだり、縄を解かせたのだ。

案の定、これまで反抗的だった結衣が甘えると作蔵は馬鹿みたいに飲んで、すぐに手足を縛めていた縄を解いた。

一若旦那ア。

下半身をいきり立たせた男の膝に向かい合うようにして大股を開いて跨りながら、結衣は鼻にかかった甘ったるい声で作蔵を呼んだ。さんざん男に蹂躪されつくした下半身のあわいを男自身が深く貫いたのと、結衣が隠し持った簪の切っ先で男の背中を貫いたのはほぼ同時のことだ。

一き、貴様。

作蔵はひと言呟き、その身体は崩れ落ちた。立ち上がった刹那、結衣の秘所から男が幾度も放った体液が生温く糸を引いて滴り落ちた。

私はもう、生娘ではない。源一郎さまにふさわしい綺麗な身体ではなくなった。

そのことが無性に哀しくて辛い。けれど、私はゆかなければならない。

結衣はのろのろとその場に落ちていた緋縮緬の長襦袢を拾い上げ、身に纏った。着ていた着物は作蔵がどこかに隠したのか、見つからなかった。そんな中で櫛と簪だけがすぐ傍に落ちていたのは不幸中の幸いであったといえよう。

この遊女が纏うような長襦袢といい、目覚めたときに身に付けていた腰巻きといい、どれもが血のような紅色だった。おまけに手足を縛めていた縄や筆までが紅ときている。

あの男、やはりどこか頭のネジが緩んでいるに相違ない。

だが、今はあんな気違いのことはどうでも良い。結衣は薄い長襦袢を着たままの姿で部屋を出た。どうやら二階らしいその部屋の周辺に人影は見当たらなかった。他に客がいるのかと疑いたくなるほど、どの部屋も静まり返っている。それが幸いして、結衣は誰にも見咎められず、階下まで降りて門前道に出ることができたのである。

結衣は走った。この役目を終えるまで自分は死ねない。出合茶屋を出たときは既に空は薄墨色に染まっていた。作蔵に責め苛まれていたのは数時間にも渡っていたらしい。

途中からは小雪が舞い始めた。初雪だった。降り始めた雪は止むどころか次第に烈しさを増してゆく。裸足の脚がかじかんで感覚はどうになくなっていった。直に道はうっすらと雪化粧を施された。そのせいかどうか、結衣は途中で足を滑らせて転んだ。

前のめりになった拍子にしたたか頭を打ち、激痛が走った。しばらくは動けなかったけれど、それでも結衣はよろめきながら立ち上がった。

一私は行かねばならない。罪のない美濃屋の人たちを危険な目に遭わせることはできない。

その一心がともすれば倒れ伏しそうになる身体を支えていた。

随分と長い間走っていたようだけれど、どうやら気のせいのようなのである。気が付けば、結衣は小さな橋のたもとに佇んでいた。和泉橋である。ささやかな川の面に降りしきる雪が音もなく舞い落ちては消えてゆく。川岸に雪を戴いた霞み桜が見え、そこで結衣の意識は途切れた。

次に目覚めたときも結衣はまだ同じ場所にいた。不思議なことに、あれほど降りしきっていた雪はふっつりと止んでいる。結衣は訝しみ、周囲を忙しなく見回した。川岸に霞み桜が立っている。

—今は夏？

桜は雪を被ってもおらず、張り出した枝には青々とした葉が豊かに茂っている。確かに眠る前は真冬だったはずなのに、不思議なこともあるものだ。

降り注ぐ陽光を緑の葉が弾き、重なり合った葉が作る天蓋は光の網を地面にひろげる。爽やかな風が川面を渡る度に光の網がちらちらと揺れた。

茫然と周囲の風景に見入る結衣の耳を涼やかな音が打った。

シャラン、シャラン。結衣は弾かれたように顔を上げる。はるか彼方で幾つもの切り子細工の風鈴が鳴っていた。風鈴の音は次第に近づいてくる。その瞬間、結衣は確かに見たのだった。

緑豊かな霞み桜の下で微笑み合う幸せそうな若い夫婦。その姿はまさしく源一郎と結衣だった。二人はもう一人の結衣が見ていることなど知る由もなく、ギヤマンの夫婦湯飲みで茶を酌み交わし、愉しげに話している。

あれは霜月の初め、随明寺で風鈴売りから貰った夫婦湯飲みだ。

結衣の眼に大粒の涙が溢れた。

—霞み桜は願い事を夢に見せてくれるというぞ。

源一郎の言葉を今更ながらに思い出す。

では、私は今、幸せな夢を見ているの？

いやと、思い直す。源一郎はこうも言った。霞み桜は願い事を叶えてくれるのだと。ならば、あれはきっと紛れもない現実。今ここにいる我が身こそが幻で、きっと桜の下で微笑み合う眩しい二人が真実であるに違いない。

結衣が幸せそうな自分たちの姿に見惚れていると、突如として風鈴の涼やかな音色が止んだ。同時に桜の下の二人も徐々に遠ざかってゆく。

待って、消えないで。

叫んでも、声が出ない。結衣は茫然としてその場に取り残された。

寒い、震えが止まらないほどに寒い。眼を開いた結衣はあまりの寒さに身震いし、しばらく自分が気を失っていたのだと知った。では、先刻見たばかりのあの幸せな一刻はやはり夢幻にすぎなかったのか。

落胆と絶望がせめぎあい、また新たな涙が湧いた。

駄目、こんなことをしているわけにはゆかない。結衣は烈しく首を振った。どうやら、自分は霞み桜の下で意識を手放していたようである。ここから源一郎のいる番所は近いはず。何としてでも、行かなければ。

立ち上がろうとした結衣を鋭い頭痛が襲った。頭が痛いー。あまりの痛みに叫び出しそうだが、ここで私は死ぬわけにはいかない。優しくしてくれた美濃屋の内儀おここの顔が浮かんだ。普段は厳しいけれど、意外に情に脆い女中頭のお登勢、夜更けまで布団の中で他愛ない話で盛り上がった歳の近い女中仲間。

美濃屋の人たちの笑顔が通り過ぎてゆく。あの人たちのためにも行かなければ。そして、おとつつあんにもこれ以上、無益な罪を犯させてはならない。おとつつあんがお縄になって獄門送りになる前に、盗っ人なんか止めさせなければ。

凄腕と評判の北町奉行北山源五が本気になったからには、たとえ般若の喜助といえども、お縄になるのは時間の問題だろう。取り返しのつかないことになる前に、般若の一味を解散させるよう、喜助に頼まなくては。

だけど、私はもう歩けない。頭が痛くて、どうしようもない。結衣は霞み桜の下に座り込んだ。太い幹に背をもたせかける。

せめて今は自分にできることをしなければならぬ。結衣は懐に忍ばせていた銀の簪を取り出し、自分の手に突き刺した。一瞬痛みが走ったものの、結衣は頓着せず、吹き出した血を指につけ両手の平に書いた。

一はんにゃのきすけ しわすにじゅうろくにちよる おしこみはいる

裏だけでは足りず、手の表にも書いた。

一ごふくどんやみのや あぶない じゅうぶんなけいかいが

そこで力尽きかけ、ありったけの気力を振り絞り

一きをつけて

と、書き足した。

父の名前を出すつもりはむろん最初からまったくない。結衣はただ美濃屋が般若の喜助に狙われていることを源一郎に告げたかっただけだ。

結衣は銀の小さな簪を見た。先の方に紅い小さな丸玉がついているだけの安物だけれど、父が買ってくれたもので大切にしていた。

おとつあん。心の中で呼びかけた。

私、おとつあんの娘になれて幸せだった。おとつあんのためなら何でもすると言っていたけれど、これで本当に良かったのかな。

だけど、おとつあん、私はどうしても美濃屋の人たちを見捨てることはできなかった。あんなに良い人たちがもしかしたら殺されるかもしれないなんて、そんなことは我慢ならなかった。

結衣は桜の樹に寄りかかり空を見上げた。ぬばたまの闇から白いものがひっきりなしに落ちてくる。それは生まれて初めて見るかのうような美しい眺めであった。

冬に降る雪は春に咲く桜の花びらに似ている。

「雪が綺麗」

呟く声は儚く、凍てつくような真冬の大きに散っていった。

結衣は眼をまたたかせた。

一雪が花びらに変わっている？

降りしきる切片が薄紅色の花片に変じていた。薄紅というよりは限りなく白に近い花びらがはらはらと天から零れ落ちてくる。

結衣はハッとして背後を振り返った。花びらどころか葉の一枚さえなかった霞み桜が満開になっている。

「こんな綺麗な桜、見たことがない」

結衣は呟き、涙を流した。花また花、隙間もないほどの無数の桜花が霞み桜を彩っている。

いずこからともなく小さな蝶がひらひらと飛んできて、満開の桜花に戯れかけるように舞っている。

一あの蝶は。

結衣は眼を眇めて、ひらひらと飛ぶ蝶を見つめた。間違いなく、あの黄色い愛らしい蝶は美濃屋の山梔子の傍で見た蝶だ。

でも、変なの。あの蝶は確かに作蔵が踏みつぶしてしまったのに。もしかしたら、あまりにこの世ならぬ美しい桜に惹かれて、死んだ蝶の魂が常世から舞い戻ってきたのかもしれない。

そう思っても、不思議に怖くはなかった。ただ、あの蝶にもう一度逢えて嬉しかった。

妙だ、眼の前の景色が、桜がゆらゆらと揺れて眼が霞む。一瞬、視界が白く染まり、眼が見えなくなったのかと焦ったが、ほどなくまた見えるようになった。

不思議とあれほど結衣を苦しめた頭痛はなくなっていた。結衣は最後の力を振り絞って立ち上がった。降りしきる桜の花びらを一身に浴びながら一步一步、前へと踏み出す。

純白の花びらが結衣の髪に肩に降り積む。今、白い花びらで身を飾った自分はきっと花嫁が纏う白無垢を着たように見えるだろう。

一源一郎さま。

結衣は最愛の男の名を心で呼んだ。

北山源五も芳野も皆、良い人たちだった。叶うなら、あの人たちの家族になりたかった。母や姉を知らずに育った結衣にとって、初めて身近に接する義姉になるはずだったひとはとても優しく接してくれた。

だけど、私は源一郎さまに逢えたことを後悔はしない。結衣の眼から澄んだ涙が溢れ、頬をすべり落ちた。

結衣の脛に純白の山梔子の花が束の間、甦る。

一源一郎さまにお逢いできて、結衣は幸せでした。

黄色い蝶が道案内するように、ひらひらと結衣の前を飛んでいる。

結衣は蝶に導かれ、また歩き出した。

その夜、江戸に降った初雪は一晩中降り続き、翌朝になって漸く止んだ。源一郎は定刻通りに北町奉行所に出向いたのだが、そこで急な知らせを番所から受けた。

源一郎は何事かと仲間が呼び止めるのも振り切り、番所まで駆けた。そんな彼の眼に飛び込んだのは、番所の前で座り込んでいる結衣の姿であった。結衣はこの寒空の下、緋縮緬の襦袢一枚きりだった。

岡っ引きの俣八が源一郎の姿を見るや、近づいてきた。

「死んで一いるのか？」

既に訃報は聞いているというのに、源一郎は訊ねずにはいられなかった。

「へえ。まだ年端もゆかねえ身空で、可哀想なことをしやした」

俣八は沈痛な面持ちで言った。源一郎の配下でご用を勤める俣八は結衣が彼の恋人であることも知っている。けして余計なことを言わないこの親分が結衣のことを持ちだすことはなかったけれど、宥めるような口調は最愛の女を失った源一郎の苦衷を十分に察するものだった。

「何故、何故」

源一郎はうわ言のように繰り返した。仕事柄、これまで亡骸は数えきれぬほど見てきた。膺に切り刻まれた無残な死体を検分したこともある。亡くなった仏に憐憫の情は湧いても、所詮はそこまでであった。仕事だと割り切れた。

だが、愛しい女がその仏とあっては割り切れるはずがない。俣八が囁いた。

「気を落ち着けて聞いて下せえ。旦那、どうやら、仏は死ぬ前に手籠めにされたようでして。ざっと改めやしたが、明らかに男に陵辱された痕跡がありました」

しゃがみ込んでいた源一郎がユラリと立ち上がった。

「何だって、今、何と言った？」

俣八が気の毒げに繰り返した。

「仏は乱暴されていやした」

源一郎が吠えるように怒鳴った。

「そいつが結衣を殺したのかっ」

「それは恐らく違えます。ほどなく医者が来ますが、あっしの見たところ、ここに来る途中のどこかで転んだみてえで。その時、不運にも頭をぶつけたんでしょうな。その頭の怪我が致命傷になったようです。ただ」

俣八は言いにくそうに続けた。

「この寒さと雪でやすから、たとえ頭の怪我がなかったとしても、朝までここにいたとしたら凍え死んでいたとは思いますがね」

源一郎が地を這うような声で呟いた。

「許さん。結衣を髑りものにしたヤツを殺してやる」

この時、源一郎にとっては祖父のような歳の岡っ引きは膚が粟立った。この若い旦那は怒れば怒るほど、静謐になる。だとすれば、これまで俣八は源一郎が心底から怒った姿を見たことがないのだ。

北山源一郎という男は本当に怒らせれば、身の内から蒼白い焰を燃え上がらせ抜き身の刃のような尋常でない殺気を放つ。敵に回したくない男だ。一度、食らいついた獲物は逃さない鬼、と血も涙も見ない凶状持ちから怖れられている凄腕の岡っ引きが長いご用を務める日々の中で初めて心底「怖い」と感じたのが、実はこの若い二十二歳の同心であった。

俣八は慌てて源一郎の羽織を掴んだ。そうでもしなければ、源一郎はすぐにも飛び出してゆきかねない剣幕だったからである。

「旦那、お待ちなせえ。旦那のお気持ちはあっしも判りやすが、旦那にお見せしてえものがあるんですよ」

俣八は番屋の扉にもたれるようにして亡くなっている結衣に近づき、手を合わせて黙禱した。その姿に、源一郎は今更ながらに結衣が既にもうこの世の者ではないことが身につまされ、熱い塊が喉元まで込み上げてくるのを必死に飲み下した。

「これを見て下せえ」

俣八は結衣の手を取り、持ち上げるようにして掌を源一郎にさらした。

「恐らくは」

流石の熟練した岡っ引きも感に堪えたように首を振る。

「自分の手を鋭い切っ先で突いて、血で書いたんでやしょう」

源一郎はあまりのことに言葉を失いつつも、結衣の掌を包み込み、記された文字を辿った。

一はんにゃのきすけ しわすにじゅうろくにちよる おしこみはいる

そっと手を裏返すと、手の甲にも血文字が書かれている。

一ごふくどんやみのや あぶない じゅうぶんないかいが

そこで気力が尽きたのか、次の字は判別できないほど大きく乱れていた。

一きをつけて

「これは」

源一郎は俣八を見た。俣八が唸った。

「てえした娘っこだ。あっしもお上から十手を預かって長え年月になりやすが、ここまで壮絶な覚悟で本懐を遂げようとした者をついぞ見たことはありませんや」

源一郎はもう一度、結衣が最後に残した血文字を見た。瀕死の怪我を頭部に負いながら、この極寒の凍え死ぬような寒さの中を物ともせず夜の中を番所まで歩いてきた結衣。そうまでしてここまで辿り着きながら、力尽きてしまったのだ。

昨夜は生憎、番所には書き役の耳の遠い老人がいるだけだった。若い下っ引きがいれば、まだしも状況は違っていただろう。書き役の老人は表に結衣がいることを知らず、灯りを消して眠ってしまった一。

さぞ寒かったろう。冷たかったろう。頭が痛かったろう。

結衣の傍ら、番所の前に自生したものか、紅椿が一輪、雪に埋もれるようにして咲いていた。源一郎はその椿を摘み取り、結衣の漆黒の髪に飾った。

「一等きれえだぜ。まるで花嫁御察みたいだ、結衣」

そうやっているのと、結衣は死んでいるのではなく、ただ静かに眠っているだけのようにも見えた。しかし、触れた身体の尋常でない冷たさが想い人は既にこの世の人ではない残酷な事実を何より告げていた。

「そなたの花嫁姿、見たかったな」

源一郎は乱れた髪をそっと直し、物言わぬ結衣の亡骸をきつく抱きしめた。

源一郎の眼につかえた涙の塊が溶けて溢れて砕けて散った。文字通り、血の滲むように凄絶な覚悟で結衣が残した血文字。彼は溢れる涙を拭おうともせず、俣八に存外にしっかりとした口調で言った。

「親分、俺は同心だ」

「へい、さようです」

俣八が孫を気遣う祖父のような口調で頷いた。源一郎はすっと立ち上がった。

「結衣が自らの生命と引き替えにしてまで守り抜きたかったものとは何だ？」

今となっては結衣を愛した男として、その悲痛な祈りにも似た想いが叶うようにしてやること、それが我が身にできる唯一の償いだと思った。

そう、まさしく、それは償いであった。

一俺がもう少し気を付けてやっていれば、結衣はこんな風に生命を落とすことはなかったものを。

取り返しのつかないことをした。苦い悔恨が源一郎をこれでもかというほど容赦なく打ちのめしていた。

結衣に最後に逢ったのは五日前、兄北山源五の別邸で兄夫婦に結衣を引きあわせたその日だった。あの日、別邸を出た結衣を美濃屋まで送り届けようとして、源一郎は結衣と和泉橋で別れたのだ。それは結衣自身がここからは一人で帰ると言ったからだ。

いつもは素直な結衣が何故か、あのときだけは頑なだった。思えば、あのときにはもう結衣の様子は妙に思えるところがあった。正確には別邸を出た直後、いやと、彼は記憶を手繰り寄せる。

辞去する間際、確か兄と結衣が短いやりとりを交わした。あの時、兄は何と言ったか。

一この先は知れぬが、北山家は現在ご公儀より三千石の扶持米を賜る身。もしや弟もこの先、町奉行どころか幕府の要職を担う身となるやもしれん。そなたはそんな源一郎を妻として生涯支え、連れ添うだけの覚悟はあるか？

兄はそんなことを言った。それに対して結衣は何と応えたか？ そうだ、かなり長い間を置いて消え入るような声で「はい」と応えた。あの折、源一郎は結衣が「いいえ」と応えるのではないかと気が気ではなかったのだ。

もしや、結衣は本当に心変わりしたのだろうか？ 三千石の旗本の妻なぞではなく気楽な町人暮らしがやはり性に合っていると？

源一郎は烈しい葛藤の末、烈しく首を振った。いや、それは断じてあり得ない。結衣は源一郎の立場を知ったからとて、容易く気持ちや決意を返るような女ではない。そんな風に考えては結衣があまりに不憫だ。

源一郎は再び跪き、結衣の手を取った。刃物か簪で傷つけた跡が確かに左腕に残っている。彼は懐から清潔な手ぬぐいを出して、まだ血糊のついた生々しい傷痕に巻いてやった。

改めて両手に記された血文字を読んだ。結衣が死力を振り絞って決死の想いで最後に残した

手紙、いわば遺書でもあった。そうまでして伝えたかったのは何なのだろう。

源一郎は立ち上がり、俣八を見た。

「親分、はんにゃのきすけというのは間違いなく、あの`般若、一味の頭のことだろうな？」

「へえ、あっしもそう思いやす」

俣八が頷くと、源一郎は人差し指を顎に当てた。

「般若一味は急ぎ働きや無益な殺生はせぬ掟ではなかったか」

「まあ、そんなところでさ。もっとも、相手は盗賊稼業ですから、押し込みの最中に面子を見られちゃったら、やむなく殺すということはたまにあるようでしたがね」

源一郎は鋭い眼で俣八を見た。凶状持ちが畏怖する鬼の親分が`怖エ、と身が竦む冷徹なまなざしだ。

「この文面からすると、間違いなく般若の喜助一味が今月二十六日の夜、呉服太物問屋美濃屋に押し込むということだな？」

確認するように言われ、俣八は`へえ、と頷いた。

「美濃屋の屋号を持つ呉服問屋は幾つくらい江戸にある？」

「さあ、流石に咄嗟にはあっしも判りやせんが、呉服太物問屋と判っていれば数は知れているんじゃないやせんかね」

「旦那」と、俣八が遠慮がちに言った。いつもの齒に衣着せぬ物言いをする岡っ引きには珍しいことである。

俣八を見た源一郎に、岡っ引きは言った。

「美濃屋というのは亡くなったお結衣さんが奉公していたお店の屋号でもあるんじゃないですか。お結衣さんが般若の一味と拘わりがあると思いたくねえ旦那のお気持ちはお察ししやすが、この際、まずは手近なところから当たっていくのが妥当じゃねえかと」

源一郎は頷いた。

「判っている。俺もまず最初は結衣が奉公していた美濃屋を訪ねるつもりだ。親分はまず江戸中の呉服問屋で美濃屋の屋号を持つお店を調べてくれ」

「へい」

岡っ引きが畏まった時、下っ引きが案内して町医者が到着した。源一郎は結衣の亡骸を抱き上げた。

「いつまでもこんなところに放っておくのは可哀想だ」

源一郎は抱き上げた亡骸をあたかも生きた娘を運ぶように丁寧な手つきで運び込んだ。

その一刻後。源一郎は北町奉行所に戻り、兄の源五と奉行の執務室で対峙していた。

「そうかー」

弟から結衣の死とその事情をひととおり聞いた源五は嘆息した。

「それで死因はやはり頭部の怪我か？」

「はい」

源一郎は軽く頷いた。町医者の検めではやはり頭を強く打った衝撃で、頭部に血の塊ができたのではないかという診立てであった。それが致命傷になったという。凍死の可能性についてはまったくとは言えないが、この様子では息を引き取ったのは凍える前だろうとほぼ断言した。

更に、医者は死ぬ前に陵辱された事実につついても言及した。

一生娘であったようですな。可哀想にさんざん弄ばれて辛い思いをしたでしょう。

源一郎と結衣の拘わりを知らぬ老いた町医者は気の毒げに言った。それを聞いた時、源一郎は両脇で握りしめた拳が白くなるまで力をこめた。それでもせねば、大声で叫びだして暴れ出してしまいそうだったからだ。

「それから、どうやら亡くなる前に何者かに手籠めにされたようです」

源五がドンと拳で畳を打った。

「何と、そのような酷い所業をどこの誰がしたというのだ？」

「兄上」

源一郎は結衣の手に残されていた血文字の文章を写し取った紙片を兄に差し出した。

「これが結衣が自らの血で書いたという文なのか？」

「はい」

源五はひととおり眼を通し、`うむ、と腕組みをして唸った。

「つくづく惜しいことをしたものよ。自らの一念を貫き通すためにここまでの壮絶な覚悟を持つとは。まさに武門の妻にふさわしきおなごであったな」

源五は俣八とまったく同じことを呟いた。

「兄上、結衣の告げた美濃屋というのは、あの娘が奉公していた美濃屋のことにございませうか？」

源一郎の苦渋に満ちた声に、源五は瞑目した。

「そう考えるのがいちばん筋道の通った話ではないか」

源一郎は端座したまま、うなだれた。そんな彼に兄の労りのこもった声かけられた。

「源一郎。結衣の遺した血文字の文章を読み、考えることは恐らく誰しも同じであろう。そして、他ならぬそちもまた、それを考えているのではないか？」

源一郎の声がかすかに震えた。

「それでは兄上は結衣が般若一味の引き込みであったと」

「引き込みでなければ、これだけの詳しい内情を知るはずがない。そちには気の毒ではあるが、結衣の遺した文のすべてがそれを物語っている」

「一」

源一郎は言葉がなかった。血文字の遺書を見たときから、その可能性が恐らくはいちばん高いのではあると思っていただけれど、今、信頼する兄から通告されると、最後まで信じたくなかったその事実が最早決定的なものになったことを認めざるを得なかった。

「源一郎」

兄の声が呼んでいる。彼は溢れそうになる涙をまたたきで散らし、兄を見た。

「結衣の心根も汲んでやれ。哀れな、そして天晴れな心意気を持った娘ではないか。あの娘は自らの生命を賭けて大切なものたちを守ったのだぞ。即ち奉公先の美濃屋、更に育ての父である般若の喜助だ」

源一郎が信じられないというように眼を見開いた。

「結衣は般若の喜助の娘だったというのですか？」

源五が溜息をついた。

「そなたには黙っておったが、実は儂はひそかに結衣の身辺を探らせておったのよ」

「兄上」

俄に気色ばんだ弟を源五は軽くいなした。

「まあ、人の話は最後まで聞け。探らせたのは実のところ、別邸で結衣と対面してから後のことなのだ。儂が仮病を使っておると聞いたときの結衣の狼狽え様にちと不審を感じた。幾らそなたが奉行の弟であると知ったとしても、儂の仮病一つであそこまで愕くとは妙だなと与力の新田に調べさせたのだ」

「それで、般若の喜助と結衣の繋がりが判ったというわけですかー」

「結衣の父親は町外れで小さな仏具屋を営む小商人だ。名も喜助という。近隣への聞き込みによれば、多少偏屈で人付き合いも良くはないが、真面目一辺倒の商人だ。父一人子一人、親子仲は極めて睦まじく、結衣はよく働く親孝行の娘だと誰もが褒めておったそうなの」

「いかにも結衣らしい」

源一郎が涙を啜った。

「結衣は喜助の実の娘ではない」

源一郎が弾かれたように面を上げた。

「そうなのですか？」

「恐らくは捨て子を拾ったか、場合によっては自ら押し込みで入った商家の子どもを殺すに忍びず我が子として育てたのかもしれない。マ、その辺りは僕も詳細は何とも言えぬが」

源五は吐息混じりに言った。

「実の娘ではないゆえ、結衣は余計に喜助に恩義を感じていたのであろう。さりながら、結衣は引き込み女になるには人間が真っ当すぎ優しすぎた。それが、あの娘のすべての不幸の始まりになってしまったとは、この世は神も仏もないものかの」

「結衣は美濃屋で奉公する中に、主人夫妻や朋輩に情を抱いてしまったんですね」

「だからこそ、生命を賭してまで美濃屋へのお勤めを止めようとしたのだ」

兄の言葉に、源一郎はがっくりとうなだれた。その時、執務室の障子が開いた。廊下に与力の新田和馬が座している。

「お奉行」

新田は源一郎の方を気遣わしげに見やり、物問いたげなまなざしを源五に向けた。

「お結衣という娘の災難については、既にご存じにございましょうや」

源五がその視線を発止と受け止め、頷く。

「たった今、源一郎より一部始終を聞いた。何とも惨い話ではないか」

新田は苦い薬を無理に飲まされたような表情になった。

「お結衣に狼藉を働いた者が判明しました。下っ引きが俣八の言いつけで奉行所まで直々に知らせに参りました」

「うむ。子細を話してくれ」

源五が差し招き、新田は一礼し執務室に入ってきた。

「お結衣を手籠めにしたのは誰なのですか！」

源一郎が烈しい剣幕で言うのに、新田が源一郎と源五を交互に見て応えた。

「美濃屋信右衛門の倅作蔵にござる」

「畜生っ」

刀を掴んで立ち上がった源一郎に向かいの新田の厳しい声が飛んだ。

「源一郎ッ、落ち着け。今、そなたが飛び出して行って、どうなるというのだ」

源五もすかさず頷いた。

「新田の申すとおりにぞ、源一郎。作蔵の犯した罪は確かに憎むべきものだが、罪は人が裁くもの」

ではない、法が裁くものだ。奉行所の役人がそれをゆめ忘れてはならぬ。第一、血気に逸って作蔵を斬ったとて、結衣が歡ぶと思うか？ 誰より他人の幸せを願う優しい娘だからこそ、あの者は敢えなく若い生命を散らしたのだ」

源一郎が力尽きたように座るのを横眼で見、新田が源五を見た。

「般若の一味はどうしますか？ 二十六日の夜、何もなかったふりをして捕らえることもできませんぞ。むしろ、この際、般若一味を一網打尽にできるまたとない好機ではありませんまいか」

源五が源一郎に視線を向けた。

「さて、どうする、源一郎」

源一郎はうつむいた。

「俺は」

皆まで言えず、唇を噛んだ。源五が源一郎の想いを見透かすかのように代弁した。

「確かに新田の申すのは理ではあるが、新田よ、自らの生命と引き替えてまで美濃屋と父親を守ろうとした結衣の孝心に免じて、この度は我らが引こうではないか」

源五は結衣の悲愴な覚悟を讃え、この場限りは般若の喜助を見逃そうと言っているのだ。新田は源五の意を正しく理解した。

「はっ」

恭しく頭を下げ、何ももう言おうとしない。

「それでは」

と、源五を見た新田に、名奉行は頷いた。

「結衣の父親喜助に娘の死を知らせり、亡骸を引き取りにくるように言ってやれ」

「畏まりました」

新田は頷き、一礼して執務室を出ていった。

「兄上、ありがとうございます」

自分がどうしても口にできなかった願いを兄が汲んでくれた。源一郎の礼に対して、源五はこんなことを言った。

「源一郎、僕はそなたのために喜助を見逃したわけではない。父親想いの孝心厚い娘の心に報いるために喜助を見逃したのだ。先刻、そなたに罪は法で裁くものと申したが、法だけでは裁ききれぬ罪もこの世にはある。それを判ずるのが奉行の務めの難しきところよ」

法では裁ききれぬ罪もこの世にはある。兄のそのひと言は若い同心源一郎の心深くに沈んだ。

同日昼過ぎ、大仏や喜助が番所に娘の亡骸を引き取りにきた。知らせを受けた喜助は飛んでくると、番所の中に安置していた娘の亡骸に取りついて声を殺して忍び泣いた。

年の頃は五十手前と聞いているが、中肉中背、顔立ちも平凡で、雑踏に紛れてしまえばすぐに判らなくなるような特徴のない男だった。いかにも真面目で一徹な小商人という風体は、近所で聞いた評判どおりの男のように見える。

ひっそりと涙を流す喜助は近所から借りた大八車を引いてきていた。番所にはまだ二十歳を幾つか過ぎたばかりの若い同心と鋭い眼の老いた岡っ引きが詰めていて、まず、岡っ引きから一通りの経緯と娘の死因が語られた。

むろん、娘が自らの身体を傷つけてまで血文字で書いた遺書とその内容も伝えられた。

喜助はただ黙ってうなだれ、時々涙を拭いながら話を聞いた。その後は娘に取り縋って泣く喜助に何を言うでもなく、同心と岡っ引きは静かに見守っていた。

喜助が娘を大八車に乗せようとするときになり、若い同心が制し、自ら娘の骸を抱いて大八車に乗せた。

「ほんにご迷惑をおかけしました。色々とありがとうございました」

喜助が大八車を引いて去ろうとするその間際、岡っ引きが声をかけた。

「待ちなせえ」

その一瞬、喜助の細い眼が炯々と光ったのをその場にいた岡っ引きはもちろん見たけれど、何も見なかったような顔で顎をしゃくった。

「こちらのお武家さまが大仏やさんに是非ともお伝えしたいことがあるそうで」

岡っ引きの背後から、長身の武士が現れた。並々ならぬ存在感に、喜助の小柄な瘦身に俄に緊張が漲った。

武士は上物の紬の着流し姿で、網代笠を目深に被っている。

「その方が大仏やか？」

「へ、へえ」

喜助が腰を低くして頷くと、武士は低い声で言った。

「一度限りだ」

「一」

喜助が武士を見上げる。武士が心もち網代笠を持ち上げ、喜助に面体を見せた。

「儂が何故、そなたの罪を目こぼしたか判るか？ 何もそなたのためではないぞ。生命賭けで奉公先の美濃屋と愛する父親を救った結衣の美しく優しい心に免じて、そなたの罪を目こぼしすることにしたのだ。ただし、見逃すのはこれ一度きりと心得よ。次はない。そなたも父として娘の心根を哀れと思うなら、二度と盗賊稼業などしてはならぬ」

喜助が息を呑んだ。

「あなたさまは一」

源五が笑った。

「ただ今は病で療養中ということになっておるでな。そうそう顔をさらすわけにはゆかぬのよ」

あっと喜助が呟く合間に、長身の武士は姿を消していた。網代笠の武士が消えた方角に向かい

、喜助は両手を合わせて頭を垂れた。

その二日後、久々のお勤めを前に般若一味に突然の招集がかかった。頭領喜助の娘結衣の葬儀の翌日である。

一味の手下には結衣が引き込みとして活動中に不慮の事故に遭い亡くなったとだけ説明され、むろんのこと、血文字で遺した遺書の内容は伏せられた。

喜助は眼を伏せて嘉助が手下たちを諄々と諭すのを聞いていた。

「そのようなわけで、どうやら北町奉行の鬼の源五が美濃屋への押し込みを事前に察知したらしい」

「源五め、仮病を使って俺らをまんまと罠に掛けようってえ算段だったのよ」

傍らの徳市が苦虫を噛みつぶしたような顔で言った。

「なら、二十六日のお勤めは中止せざるをえねえな」

手下の誰かが言い、皆が口々に頷いた。

「ここで、お頭から話がある」

嘉助の言葉に、二十人の手下たちの視線が一斉に喜助を見つめた。喜助は低いが、よく通る声で話し始めた。

「皆、今までよく俺についてきてくれた。俺ももう年が明けたら五十だ。頼みにしていた娘も儂く亡くなり、これ以上、お勤めを続ける気力がなくなっちゃった。皆には済まねえが、これを限りに般若一味を解散しようと思う」

いきなりの宣言に、手下たちから口々にどよめきが洩れた。大方は一味の存続を願い、喜助に翻意を望むものばかりだ。

喜助は皆が鎮まるのを待ち、再び一同を見回した。

「皆、よく聞いてくれ。俺はもう年寄りで、後は迎えが来るのを待つばかりだが、皆はまだ若い。これからの身の振り方はもちろん皆の好き好きだ。けど、これだけは憶えおいてくれ。手前が犯した罪の報いは巡り巡って必ず手前に跳ね返ってくる。だから、叶うなら、これからの生涯は皆が盗っ人稼業からきれいすっぱり脚を洗い、堅気に戻って陽の当たる道を歩いてくれることを願っている」

一俺はこれまで重ねた悪行の報いで、大切なたった一人の娘を失ってしまった。

その時、喜助が飲み込んだ科白の続きを聞いた者は誰もいなかった。ただ、結衣の死の真相を知るただ二人の手下、徳市と嘉助だけは沈痛な面持ちを浮かべ、嘉助の眼には光るものさえあった。

十二月二十六日、北町奉行北山源五は念のために美濃屋信右衛門方に手勢を率いて待機したが、般若の喜助一味はついに現れることはなかった。

その後、江戸でも府外でも般若の喜助がお勤めを働いたという記録は一切残っていない。

その年の暮れ、町外れで細々と仏具屋を営んでいた大仏やは店を畳み、主の喜助はいずこへともなく姿を消した。時折、喜助と話をしていた隣家の煙草屋の主人に暇乞いに現れた喜助は、亡くなった娘の供養のために諸国を巡礼しながらまわり歩くつもりだと語ったそうだ。

人々の歓びも哀しみも飲み込んで、季(とき)はうつろいゆく。江戸に再び春が巡ってきて、寛永寺や随明寺の桜は今年も美しく咲き揃った。

町外れに流れる小さな和泉橋川のほとりの桜も薄紅色の花をたくさんつけている。

北山源一郎は懐手をして川辺に佇み、岸辺に一本だけ立つ桜を見上げていた。あの日、結衣がこの桜の傍を通ったことは後日の調べで判っている。後に下っ引きによって、結衣が血文字を書くのに自らを傷つけた簪がこの樹の下で見つかったからだ。

その簪は娘の形見として父喜助に届けられたはずである。

四ヶ月前のあの雪の夜、薄幸な少女はこの桜の下で何を見たのだろうか。願わくば、結衣が最後に見た夢が美しく楽しいものであったことを今となっては願うしかない。

源一郎はかすかに笑みを浮かべ、満開に咲き誇る桜を見た。この桜は霞み桜だ。きっと愛する少女が今生の名残に見た夢は彼女が心に願う幸せなものであったに違いない。

春のやわらかな風が川面を渡り、岸辺に佇む源一郎の紋付き羽織の裾を揺らす。源一郎は囁くような声で亡き恋人の名を呼んだ。

「結衣」

できることなら、この満開の桜を二人して見たかった。結衣が生きていれば、この季節に祝言を上げるはずだったのだ。

「旦那、旦那。こんなところで花見と決め込んでる暇はありやせんぜ。日本橋の伊勢屋で刃物沙汰の夫婦喧嘩をやってるんで、止めてくれと奉公人から届けが来てまさあ。何でも亭主が女房に隠れて浮気したとかで」

岡っ引きの俣八が息を切らして橋を渡ってくる。

一やれやれ、今度は夫婦喧嘩か。まあ、殺しよりはよほどマシだな。

源一郎は両手を天に突き出し、うーんと伸びをした。

「よし、このまま伊勢屋に直行だ。行くぞ、親分」

走り出した源一郎に俣八が情けない声を上げた。

「待って下せえ、あっしは旦那のように若え者とは違うんですから」

「さしもの腕利きの親分も俺に敵わねえことが一つくらいあるもんだな」

源一郎が背後を振り返りつつ、走りながら笑う。

「何言ってるんだか。年寄りを粗略に扱うと仏罰が当たるんですよ、知ってますか、旦那」

俣八の悲鳴のような声が春の長閑な空に響き渡った。

(了)

山梔子（クチナシ）

花言葉一とても幸せ、私は幸せ者です、優雅、洗練、歓びを運ぶ、清潔。

☆江戸切り子について

江戸切り子は当時の薩摩切り子が厚い色ガラスを重ねた色被(いろき)せガラスを用いていたこと、ホイールを用いた深いカットと大胆な形であることは大きな違いがある。

なお江戸切り子は江戸末期、大伝馬町のビードロ屋加賀屋久兵衛（通称加賀久）が金剛砂を用いてガラスの表面に彫刻で模様を施したのが始まりとされる。

そのため、本作品の時代設定と江戸切り子発祥の時期にはずれがあることをご了承下さい。

『小説を書いている、思うこと。～新作ヒロインへの疑問と共感～』～あとがきに代えて～

皆様、おはようございます。

小説を書いている、ふと思うことがあります。

特に今回はいつもにもまして、色々と考えました。

最新作については今の段階で、やっと1回目の校正作業が終わったところです。

まだまだ気が抜けません。

で、何を考えたかという一。

今回のヒロイン。江戸物なのですが、一言で言うと、

一何で、そんなにひたむきに生きられるのか？

そう思いました。自分で書いたお話でしょ、自分が考えた人物でしょ、

なのに、主人公の生き方に対して、疑問をいだくの？

という声が聞こえてきそうですが、、、

実は他の方はよく分からないのですが、私はそういうことはあります。

小説の中の人物造形について、例えばヒロインを例にとると、

根っこ、もしくは、どこかには「自分」らしさが投影しているんだけど、

基本的には「作者」自身の性格とはまったく違う人物のこの方が多い。

今回のヒロインについては、疑問というより憧れかもしれませんね。

もしかしたら、私の作るヒロイン像は自分の「憧れ」であったり「理想」を託しているのかもしれない。

でも、今回は憧れとは少し違うかなあ。

ネタバレになるので、お話の内容がご紹介できないので、こう申し上げても皆様、

、、、？ と首を傾げられることでしょう。

今回のヒロインは、自分の大切なものを守るためには生命すらも賭けようとした、

そんな女の子です。

そこで、最初の一どうしたら、そんな風に生きられるのか？

という疑問に繋がるわけですね。

自分の大切に思う人のためなら、自らの危険さえ躊躇わない。

生命さえ賭ける。

思えば、ここまで壮絶な生き方を選択したヒロインは、私の数ある駄作の中でも

初めてかもしれない、、、と改めて思いました。

大体、自分のことは放っておいて、他人の世話ばかりしている。。。

そういうヒロインが多いのは確かなのですが、

それでも、今回のヒロインのような捨て身の女の子はいなかったような気がします。

この作品の構想を思いついたのはもう1年以上も前のことになります。

使っている創作メモノートもまだ二代前の古いヤツでした。

江戸物は割と描きやすいジャンルとして私の中では認識されていたはずですが、何故か、なかなか踏み出せませんでした。

韓流とか他に描きたいものがあつたというのも理由の一つではあるけれど、何故か、踏み出そうとすると躊躇いがあつて。

書き上げてみて、もしかしたらとその理由に思い当たりました。

ヒロインの生き方があまりにも壮絶だから？

こんなヒロインは今まで自分の作品にはいなかったような気がする。

なかなか踏み切れなかったのは、そのせいかなと改めて思いました。

このヒロインの生き方を通じて、色々と思うところがありました。

自分の作品でもあまりに辛いシーンのときは涙が出るときがありますが、、、今回もラストの下りは泣いてしまいました。

自分で書いて泣いてりゃ世話ないけど、書き上げてから

一ああ、この子はきっと、こういう生き方しかできなかつたんだな。

と、納得しました。

小説を書いていて良かったなとも思いました。

問題は、読んで下さった方がどのように受け止めてくれるかどうか、ですが、それは私が考えても仕方ないことですし。

もし一人でも共感したり、良いんじゃない？ と思っていただければそれで本望かな。

ヒロインに教えられるというか。

もっとも、私個人としては、今回のヒロインの生き方はとても素敵だけと思うけれど、もっと別の選択もあつたんじゃないか、ここまで哀しい生き方をしなくても良いのではと実は疑問もあります。

どうも、曖昧なことを長々しく語ってしまい、失礼しました。

またいずれ、こちらでもご紹介したいと思うので、良かったら、そのときに読んでやってくださいね。

ところで、蛇足ですが、小説のヒロインに「自分」はあまり投影させないということを最初にお話ししましたね。

これ、もしですが、なかなか書いてみたいけど書きにくいという方は最初は「自分」を投影させてみると良いかもしれません。

小説の主人公が自分だと思って書いてみてください。

こんな時、自分なら、どうするだろうか？

そう思って書けば、小説は意外にすんなりと書けます。

実は私、若い頃から時代小説ばかり描いていて、現代小説というものは苦手というより描いたこともなかつたんですね。

初めて現代物を書いたのは20代後半のときでした。

その時は主人公を「私」という一人称にして、ごく身近な一当時の私にとっては最大の関心事でもあり切実な問題であった「結婚」というテーマで短い現代物を描いてみました。

つまり、小説という形態を借りた日記、エッセイに近いものでした。

もちろん、まったくの虚構でしたけど。

「私」という語り口で書いたら、それまで苦手で描けなかった現代物が何とか一作描けました

。

それからしばらく「私」をヒロインにした現代物を幾つか書いてみました。

実は私が現代物を書くようになったのは、それ以降のことです。

なので、小説を書いてみたいけど、何かなあと思う方は、

ご自分を主人公にした作品から入ると、意外に書きやすいかもしれないかなと思います。

あ、でも、これは私の体験談ですので、そんなたいしたものじゃないし、

参考にもならないかとは思いますが、、、

だけど、何でもそう。

まず自分、それから自分の周辺を見回す。

そこから題材を探すと、書きやすい。

それから徐々に世界をひろげてゆけば、良いのかもしれない。

どうも、つまらないことを喋ってしまいました。

今回の作品、実はその二年も前に思いついたときは全然考えてもなかったけど、シリーズ化してみることにしました。

なので、続きを考えついたのは本当につい最近。

ヒロインやその他のキャラに愛着が出てきたところなので、続きを書くのも実はひそかな楽しみだったりします (- ^ ▽ ^ -)

霞み桜～涙月、はらり冬の花～

<http://p.booklog.jp/book/104293>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104293>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104293>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ